

---

# 地下鉄エトセトラ

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地下鉄エトセトラ

### 【Nコード】

N7619T

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

今日も地下鉄にはいろいろな人が乗っている。

## 酔っ払いボクサー

地下鉄で帰る道すがら、酔った三十くらいの男があっちへヨロヨロ、こっちへヨロヨロしている。

いい加減疲れて帰っている通勤客は、その酔っ払いに対して露骨にいやな顔をする。

すると、止せばいいのに、つり革にぶら下がっていた同じ年齢ぐらゐのサラリーマンがその酔っ払いがぶつかって来たと言嘩を始めた。

サラリーマンは今日は上司に叱られてばかりだった。お得意さんの契約も断られたからだ。ここのところ、社内ではいちばん成績が悪くなっていた。

それなのに、こんな早い時間から酔ってる奴がいると、腹立たしかった。

「バカ野郎、人にぶつかっておいて謝ることもしないのか！」

その声を聞こえないかのように通り過ぎていこうとした酔っ払いの背中を、持っていたカバンで男が叩いた。

振り向きざま、その酔っ払いはびっくりするようなスピードの拳で顔面にストリートを浴びせた。

「うっさいんだよ！」

倒れたサラリーマンは鼻血が出て、少し鼻先が曲がっているように見える。

「うっうっうっうっうっう」

鼻を押さえながら、顔面に鋭いパンチを浴びた男は、持っていたケータイで相手の後頭部を殴りつけようとした。だが、その酔っ払いはフットワーク軽くケータイは宙を舞う。

きつとボクシングをしたことがある奴なんだろう。

どう見たって先程までのヨロヨロとは違う。

鼻血を出した男は、ますますバカにされたと思い、怒りで顔が真

っ赤になつていく。

どうみたつて不利だ。

だが、売った喧嘩を引つ込める訳にもいかないのか怒鳴った。  
「降りろ！」

止まった駅はホームもそう大きくはないが、サラリーマンは体ごと酔っ払いボクサーにぶつかって行った。

「チクショー」

だが、ひよいと体を右へ左へと、さも楽しそうに避けていく。

「お兄さんよ、無理だつて」

「うるさい！」

そのうちに、駅員が走つて来た。

「どうしたんですか！」

「面倒だなあ、このおっさんが僕の背中を殴つたから、正当防衛で殴つたの」

「この野郎がぶつかつて来たのに謝りもしなかったんだ」

「それぐらいで、普通、カバンで背中を叩くかよ」

確かにサラリーマンがしかけたんだが、傷は遥かに深い。

「この人は鼻が折れてるように見えるが」

「駅員さん、殴つて来たのはこの人からなの。僕がやられたの」

そう言われてサラリーマンは酔っ払いボクサーを睨みつけた。

だが、酔っ払いボクサーの方が圧倒的に喧嘩の力は上だった。

「あなたはボクシングでもやってるんですか」

駅員が尋ねると頭を振りながらやってないと答えた。

「悪いけどボクシングジムには一回も行ったことがないのさ」

「嘘だろう」

鼻血を拭きながらサラリーマンは言う。

「いいや、でも素質があるかもしれないね」

笑いながら答えるものだから、ますますサラリーマンは怒りで頭から湯気を出しそつた。

「こんなのは過剰防衛だ！」

「おっと、おかしなことを言わないでよ。あなたが降りろって言ったから降りてきたんだよ。それから殴りかかって来たのもあなたですよ。お忘れですか。僕は叩かれてから車内で顔面をパンチしただけ。その一回こっきり」

サラリーマンはその通りなもので、返す言葉がなかった。

「じゃ、僕は電車に乗りますから」

そう言うのと、酔っ払いボクサーは、なぜかまたヨロヨロしながら電車に乗った。

鼻血を出しながらサラリーマンはそのまま病院へ行った。

医者は明らかに骨折していると診断した。

「ああ、これじゃ、明日の商談どうしよう」

受付に行くと、レントゲンやら診断で一万五百円と言われる。

「えーっ、そんなに高いの？ 足りるかなあ」

「時間外ですから」

真っ青になった。

「財布、財布がない、あいつにすられた！」

その頃、酔っ払いボクサーはサラリーマンの財布を広げていた。

「なんだよ、たった八千円しかないよ。仕方ないなあ」

札を抜き取ると、トイレのごみ箱にポイッと捨てた。

酔っ払いボクサーは駅の階段を下りながら、標的を見つけたのか、また、酔っ払いのようにヨロヨロ動きながら、後をつけて行った。

## 満員電車のランドセル

満員の地下鉄に乗って来る小学生。

制服を着てランドセルを背負い、この満員電車に乗ると、大人にはランドセルが邪魔だ。

ただ、朝早くから近くの小学校に通うのではなく、わざわざ地下鉄に乗るということを選ぶのは、子どもではなく親の考えだろうか。ふと、そう思いながら少年を見ると、紺の半ズボンから出ている足は華奢で、ランドセルがやたらと大きく感じる。中学年くらいだろうか。

ランドセルにぶら下がる定期券は可愛いアニメのキャラクターがついている。その黄色いキャラクターが揺れるたびに、カバンを持つ手に触れるのだ。

目の前の席があくと、私がサツと座った。子どもは立っていればいいのだ。一瞬残念そうな顔をしたが、そんなことは知ったことではない。私は毎朝五十五分間も乗っているのだ。会社に行くだけで疲れてしまう。

私は売店で買った新聞を取り出した。小さく畳んで隣の人たちの邪魔にならないように一面から読み始めた。すると、少年は私の持っている新聞の広告欄に目をやった。

何か嬉しい出来事が書いていたのだろうか。少し前かがみで目を近づけて来るものだから、私も次のページへめくるのが可哀そうになった。

うちの高校生の口をきかない息子より可愛い。

『何だい？』

小声で少年に言った。少年は照れ臭そうに指を差しながら答える。

「この作家、僕のお父さん」

「えっ？」

慌てて広告欄に目をやると、今、推理小説で人気のある作家の新

刊紹介だった。

「そうなの？」

「うん」

周囲の人も少し驚いて、少年と私のやり取りに耳をそばだてているのが伝わってくる。

「お父さん、売れっ子だね」

「うん」

「家で書いてるの？」

「ううん、ホテル」

そうか、流行作家はホテルで缶詰めになって書いているとはよく聞く話だ。こんな満員の地下鉄に子どもを乗せなくても、車で送ってやればいいのにと、余計なことを思ってしまう。

それでも、嬉しそうに広告を見つめている姿は、父親をこんなに慕っているのかと思うと、自分も嬉しくなるのはなぜだろう。

「お父さんは、家では優しいかい？」

少し興味も出て尋ねてみる。

「うん、すごく優しいよ。ときどき料理も作ってくれる」

「ふーん」

「でも、この本を書くのに忙しくて、もうずっと帰ってこない」

「そうか、大変なんだね」

そう言うと、少年は胸を張って得意気に頷いた。

誇らしいことだろうな、こんな有名作家の父親がいるなんて。

僅かな車内の会話だけだったが、乗客の中にホッとするようなやさしい雰囲気広がった。

この日一日私自身も気持ちよかった。

子どもは親の後ろ姿を見て育つと言うが、息子は私の起きている時間には会ったことがない。

いつから、そうなったのか。

進学校に行って二年。意見を言う息子はクラスで煙たがられて、いつの間にか物を言わぬ子になった。妻からそのことを聞いても、

みんなそうさと別に相談にも乗らなかった。

話し相手、そう、私も親に話さなかった。みんな同じだと思っていたが、こんな少年のような時が息子にもあったに違いない。いや、手を繋ぎたがる時代が確かにあった。

少し話す機会を作ってみるか。

久しぶりに土産のケーキを買った。

帰りの地下鉄で、この少年に会うことはないだろうとは思ったが、ふと会いたいなあと感じている自分に驚いた。駅の売店で、夕刊を買おうとして見出しに引き寄せられた。

『人気作家の龍田雄介！ 今朝自殺！』

慌てて新聞を買い、広げて読み始める。

記事には最近原稿が書けないと悩んでいた様子が遺書に書かれていたという。妻は最近家で書けないので、ホテルに籠って書いていたが、信じられないと泣き崩れているという記事だった。

少年はいつ知ったのだろうか。

ベランダから飛び降りたとある。

父親を尊敬し、得意気な少年の顔が浮かんでくる。

あの少年を思うと、鼻につんとくる。プラットホームで泣きそうになる。

「座らせてやればよかった」

変なことに後悔してしまう。

私は地下鉄から降りると、今日は早足で帰る。

肩を落として歩く息子の後姿が見えた。

思わず大きな声で呼びかけた。

「和夫、お前の好きなケーキを買って来たぞ。一緒に食べよう！」



振り向く息子の顔に、あの少年と同じ笑みが浮かんだ。

## パンキャンディ

「げほっ、げほっ」

もう、嫌になっちゃう。

満員の地下鉄で咳こむサラリーマン。

お願いだからマスクをしてほしい。

みんなが顔をそむける。

しかも、そのサラリーマン、ときどき額に手をやるから熱もあるのだろうか。

持っている人は慌てて自分のカバンやポケットからマスクを取り出す。インフルエンザにでもなったら大変だ。予防注射に行こうと思っただけ、病院に行く機会もないし、自分が掛かっているわけではないから行くのを忘れてしまう。

「今日は絶対に病院に行こう」

そう決意はするものの、今、この時間の咳こみでうつってしまいかもしれない。

サラリーマンは自分の前の席が開くとドサツと座り込んだ。

「ふっ」

ああ、もうホントに具合が悪そう。どうして休まないのかしら。そういう自分もこの前具合が悪くても会社はそう簡単には休めなかった。自分の仕事は人には任せられない。きっとこの人もそうなんだろうな。

「ゴホゴホ」

うっ、それでもこの咳は嫌だ。きっとこの車内全員にインフルエンザウイルスなら充満していることだろう。

しかも、このサラリーマンは口を手で覆うけれど、ハンカチは持っていないのだろうか。

すると、私の後ろにいた四〇代くらいの女性がマスクを差しださそう言った。

「あなた、このマスクをしてください」

あろうことか、そのサラリーマンは首を振るではないか。

「嫌ですよ、マスクなんて息がしにくいし、私嫌いなんです」

受け取ってもらえない女性はさらにこう言う。

「あなたの咳が飛び散って、周囲の人は迷惑しています」

そう言われると、サラリーマンは渋々そのマスクを受け取ったがポケットにしまった。

なんとということだろう。

車内に険悪な空気が一気にみなぎってくるようだ。

もうそろそろ女性も周囲の人も堪忍袋の緒が切れそうだ。もちろん私も。

すると、彼の隣の白髪のおばあさんがこう言った。

「私ね、これから病院なんです。喘息でとても辛いんです。マスクをすると息がしにくいですが、私もするので、あなたもしませんか」

彼女の開けたバッグには喘息の吸入器と薬が見えた。底の方からマスクを取り出すと着用した。

サラリーマンもポケットから取り出してマスクをつけた。

「あなたの咳はインフルエンザではなくて喘息ですね。私と一緒にしんどいでしょう」

「ええ、もう子ども頃からです」

「普通は小児喘息で終わる人もいるけど、私はこの歳になっても治らないの」

「僕もです」

周囲の人は二人の会話を聞きながら恥ずかしかった。特にマスクを渡した女性は二人の話の黙って聞いていて今度はバッグからキャンディを取り出した。

「喘息にはキャンディがいいって言いますから。知らなくてごめんなさい」

「いやいや、ありがとうございます。私も昨夜から眠れないものでつい大人気ないことをしました」

「私は受験生の子どもがいるので、つい過敏な反応してしまつて」  
サラリーマンはパインキャンディの包み紙をとると、口に入れた。  
「懐かしい味ですね」

おばあさんもキャンディを口に入れた。

「あら、ホント。これは昔からあるのよ」

「ええ、私も懐かしくつて買ってしまいました」

「これは昔は包装なんかなくて、ガラス瓶に入っていましたよ。小さなスコップで量り売りしてもらいましたから」

と、おばあさんの話に笑顔になる。

病院近くの駅につくと、おばあさんはニコニコとしながら会釈を繰り返して席を立った。

「またね」

「はあ、お大事に」

車内に温かい空気が流れる。先程までのあの険悪な雰囲気はどこへ消えたのか。

朝から車内に甘い香料のパインキャンディの匂いが微かに残る。  
マスクを渡した女性も降り、口の中でキャンディを転がしながらサラリーマンもやがて降りて行った。

昼食時、会社近くの小さな店であのパインキャンディを見つけた。

「これください」

会社で配ると、みんなが懐かしそうに喜んだ。

「わあ、懐かしい」

甘いものが苦手な男性も顔がほころんだ。

今度からキャンディをポケットに入れておこうつと。

ペリカンなの？

職場近くの保育園に連れて行かないと。

四月から主人は二年間単身赴任が決まった。

私も仕事をやめようかと随分悩んだが、今の職場の給料はいいし、この先やめてこれ以上の仕事が見つかるかどうかは分からない。

結局、四才の息子と二人で朝の地下鉄に乗る日が続いている。

「おねがい、まーくん、急いで」

「ママ、僕、うんこ」

「えーっ！ 乗り送れちゃうわ」

「じゃ、もれちゃうー」

こんな会話を毎朝している。

今日もせかしながら地下鉄に乗った。

「ママ、園長先生が昨日日本を読んでくれたよ」

「ふーん、どんな本」

「赤ちゃんがどうやって生まれるかを教えてくれる本」

この会話はまずい。

満員電車ではやだ！

周囲の人がみんな耳がでかくなっていくような気になる。

ママだって、まだ三十才なのよ。恥じらいがあるの。

「そう、ママはみにくいあひるの子を読んだわよ」

「僕は、昨日の本の方が好きだよ」

ママはその本が今日は嫌い。

「それはね、絵も面白いんだ」

ああ、困る。

その絵の話はやめて。

「見てごらん、まーくん、あのお店のドーナツ好きだったでしょう」  
看板にドーナツが描かれているどうってことない絵だけねど。

「ねえ、ママ僕の話聞いてる？」

「もちろん」

「その絵がね、でっかいの、おちんちん  
うー、キター。」

「馬も象もすごい」

「哀しいけど、どこかでくすくと笑い声。」

「ママ、こんなに長い」

「手で広げて見せる息子よ、やめて。」

「そうよね、どこかでくすくとされると、息子は得意になって声が  
大きくなるの。」

「子どもってそうなのよ。」

「ああ、ホントに、今日の地下鉄、遅いんじゃない？」

「しかも、車掌がアナウンス。」

「皆様、毎度ご乗車ありがとうございます。ただいま事故のため、  
電車が遅れております。お急ぎのところ誠に申し訳ありませんが今  
しばらく……」

「うつつうつつ、困るのよ、速く走ってちょうだい。」

「見て、この息子の目、輝きだしてる。ヤバい！」

「それでね、馬がね背中に乗るんだよ」

「ああ、息子に猿ぐつわをかませたい。」

「前で座ってる男性は、読んでいるはずの本のページが止まったま  
まだわ。隣のケータイを開いていた若い女性もポケットにしまっ  
ちやっただ。」

「みんな聞いているのよ、まーくん。」

「よく考えなさい、地下鉄の会話かどうか。」

「でも、ママどうして背中に乗るの？」

「それは今日保育園に行ってから園長先生に聞いてみたらどうかし  
ら」

「えっ、ママは知らないの？」

「うん、全然知らない」

「じゃ、人間はどうして生まれるの？」

「うづうづうづう、知らない、知ってるけど知らない！」

「まーくん、もうあんまりおしゃべりしちゃダメよ。みんな静かに乗ってるでしょう?」

「だって、僕小さな声でお話するよ」

何を思ったか、隣の若い女性に息子が尋ねる。

「僕の声、うるさい?」

女性はニコニコしながら首を振る。

お願い! やかましいって言って

「ほらね、ママ、いいって」

ああ、何だか頭痛がしてきた。

「まーくん、ママね頭が痛い」

「どうして?」

「どうもおおしゃべりできない気がする」

「じゃ、聞いているだけでいいよ」

「違う! 静かにしてほしい」

「つまらないなあ」

「静かにしてくれたら、いつものお店でガチャガチャ二個買ってあげる」

「ほんと?」

そうよ、少し汚い手だけどいいじゃない、この場合は。

一個二百円のを二個、つまり朝から四百円か。

仕方ないわ。

一瞬黙った息子、車内にはがっかりした雰囲気か漂うのは気のせいかしら。

「ママ、じゃこれ最後のお話」

「うん?」

「僕はね、ペリカンが運んで来たの?」

あら、急に可愛いじゃないの。

「違うわ、コウノトリよ」

「そう言ったら大人は嘘つきだって、ゆーくんが言ったよ」

「どうして？」

「ゆうくんは見たんだって」

「ヤバイ！」

車内の復活した雰囲気。違うの、皆さん、話はここまでよ。

電車が動き出した。

「まーくん、そこまでよ。さあ、もうすぐ着くわよ。今日は雨が降らないといいねえ」

「ママ、声が大きいのはママだよ。もっと小さい声で  
うっうっうっうっ。

疲れた。

ホームに着くとスキップする息子。

「ママ、ガチャガチャだよ。二個だよ」

「うーん、この調子でやられると破産よ。」

単身赴任のパパ。私も単身赴任したい気持ちよ。



## ニュースソース

終電になってしまった。

ホームにはカップルがいっぱい。

学生がイチャイチャするんじゃないよ、親の脛をかじってるのに。ああ、もうやだねえ。

ホームで恥じらいもなく男にしなだれかかるなんて、まだ若い女性なのに。

大学生のコンパの帰りだろうか。

授業の話で盛り上がってるみたいだ。

私の大学時代と比べたら……こんなものだったかな、いや、もっとだったかも。

すると、超ミニスカート女性が大酔いだ。

地下鉄のドアが開き乗りこむと、私の前にその女性が座ったのさ。大股開きで座るから、目のやり場に困ってしまうだろう。

だが、開いている方が悪いんだから、私だって部下とちょっと飲んだ帰りだし、折角若い女性が開いてくれてるのを見ないってのも悪い気がする。

ふと、持っていた新聞を開きながら、折り目のところを破った。

見えるんだな、いい具合に。

「おい、何見てるんだよ！」

その声にハツとした。見ると、彼女の隣に座っていた男がいきなり近寄って来た。胸倉を掴まれて息がしにくい。

「何をするんだ！」

「この子のスカートの中覗いていただろう」

「そんなことするわけないでしょ」

「その新聞、穴があるよ。そこから見てたんでしょ」

その声に周囲の人がじろつと私を見る。

「冗談じゃない。そんなことするわけないだろ！ 誤解だ！」

酔っている女の子は口を開けて寝ているのに、なぜ、この大手銀行部長の私が、みんなの面前で罵倒されるんだ！

「じゃ、警察を呼ぼう！」

「そんなことする必要はないよ。俺が警察へ連れて行ってやる」  
もう、とんでもないことになって来た。

こんなことが銀行にバレたら、私は退職目前なのにどうなる！

「あなた、これ 銀行の社員証だね」

いつの間にか、胸ポケットに入れている社員証を見られた。  
慌てて取り返したが、恐怖がつのる。

「ちよつと降りようか」

完全にこの男のペースになってしまった。名前も仕事も見られた以上、放っておけない。

男の後ろから降りると、終電のドアが閉まった。

「いくらで手を打つかい？」

仕方なく財布を取り出す。すると、覗きこんだ男はニヤツと笑った。

「終電に乗り遅れたから、タクシーで帰るんだから」

そう言いながら二万出すと、男は笑いだした。

「ちよつとちよつと、部長でしょう、会社に知れたらまずいでしょう。そうだよ、痴漢と一緒にだろ」

「私は何も……」

「あ、この新聞を持って行って話したら、あなた捕まるよ」

「そんな」

「じゃ、上乘せしてくれるかな」

「いくらだ」

「二十万でいいよ」

「に、二十万だとー！」

口が渴いてきた。これはとんでもないことになった。こんな脅しに乗ったら一生ついて回るんじゃないだろうか。この得体のしれない男に付きまとわれるなんて、私の一生、いや、家族にも危ないの

ではないか。

「そんな金は持ってない。急には無理だ」

「じゃ、明日の昼休み、この駅の上の一番改札口に近い喫茶店で待ってるから。届けて」

男はそう言うと、ウインクしながら去って行った。

膝ががくがく震えた。

終電も出てしまったが、家に帰りたい。

タクシー乗り場に向かうと、あの男がケータイで話しているのが見えた。

「チヨロイもんだぜ、明日二十万持って来るってよ。明美のお陰だぜ。祝杯があげられるぜ」

仲間に話してるのが聞こえてくる。

電車内にいた奴らに自分の手柄を吹聴しているのだ。

私のことを嘲っているのだ。

何がわかる！

三十五年働いてきたんだ！

無遅刻、無欠席ですつと働いてきたんだ！

あんな若造に脅されてたまるか！

言いようない怒りが体を駆け巡る。

駅前の花壇の煉瓦が割れている。

一つポケットに入れて、男の後を追う。

男はご機嫌で時折スキップしながら路地へと行く。

追いかける。

男は電信柱の陰で小便をし始めた。

「今だ！」

ガツツ、鈍い音がして、後頭部から血が噴き出た。

スローモーションを見ているように男はゆっくり倒れた。

この石はポケットに入れてどこかで捨てよう。

誰も気づかないはずだ！

振り向きながら周囲を確かめる。

血がついたところを新聞で拭く。

タクシーで帰宅した。

家の近くの橋の上から石も捨てた。

翌日の新聞を開いた。

『血糊のついた穴開き新聞！ 現場近くで見つかる』

## メロディは風に乗って

日曜の午後三時頃の地下鉄に、若い男の子がギターを持って乗って来た。

右の耳にはピアス、腕にはチェーン、腰には派手なバックルのついたベルトに革のズボン。

指輪も銀の髑髏模様。

ギターを網棚にあげると、入り口近くの座席に座った。

隣には若い女性が五線譜の模様のバッグを持っている。

ショートカットの女性はそのバッグから一冊の楽譜を取り出すと、ごく小さな声でときどきメロディを口ずさんでいる。男は目をつぶっていたが、徐に目を開いて隣の女性の楽譜を見た。

女性は総譜を見ているのだ。指揮の練習でもしているのだろうか。時折、何かを書きこんでいる。

すると、女性の持っていたシャープペンシルがコロコロと転がった。

男は黙って足元に転がったそれを拾い上げると、彼女に渡した。

「あ、どうもありがとう」

「ねえ、君のその楽譜、新世界だね」

「あ、これ？ はい」

「何を勉強してるの」

「小学六年生の音楽会でみんなで演奏するんです」

「新世界を？」

「ええ、この楽章だけですけど」

「俺も昔やったよ」

「そうなんですか」

「うん、この木琴のところ」

楽譜を指さしながら、男はニコツとする。

「難しいですよ、ここは十六分音符ですから」

「でも、ムキになって練習したよ」

「子どもってすごいですね」

「ああ、そうだね。先生が音楽大好きな人だったから、クラスみんなで盛り上がったよ」

「え？ 学年でなくてクラスで演奏ですか？」

「ああ、俺の学校小さかったから、学年二十三人。一クラスしかないの」

「わあ、聞いたかったなあ。今の勤務先の小学校は学年で百二十人いますから」

「ふーん、そうしたら、音が深みが出るだろうなあ」

若い教師の女性は、外見と違う男の話し方と内容にいつの間にか惹かれていたようだ。

網棚にある楽器を指さして、男はこう言った。

「週末だけこのギターを持って、ライブさせてくれる店に行ってるんだ」

「バンドですか」

「ああ、ロックは好きだけど、君のその楽譜見ていたらクラシックもいいよねえ」

「ええ。私はロックのことは知らないけれど」

「今度、聞きに来ない？」

「あ、そうですね」

男はポケットからマッチを出すと渡した。

「この店。でも、普段は真面目なサラリーマンさ。楽器店の」

「そうなんですか？」

「うん、楽器取り扱ってるよ。学校にも納めてるし。音楽会用の楽譜もいろいろと置いてるよ」

「あら、じゃあ、今度いい曲があったら教えてください。私、小学校の鈴木です」

「あ、僕は 楽器店の山野です」

男が網棚からギターを下ろしながら言った。

「あのよかつたら、今日店に来ませんか。六時からです」  
女性はその目を見ながら頷いた。

「行きます。でも、全部は見れないかもしれませんが」

「うん、僕たちは三曲だけですから」

頭を掻きながら男は言った。その笑顔は乗って来た時の表情とは全く違っていた。

そして、女性に会釈をしながら手を振って下りて行った。

女性は笑みを浮かべながら男を見送ると、また、楽譜に目を落としました。

シャープペンシルでときどき書きこんでいるようだが、口元が何かを思い出して笑っているように見える。

新世界の楽譜に『 楽器店、山野』と書いている。

くるくると二重丸をして囲むと、あのマッチを取り出した。

赤のパッケージに金色の文字で『可憐なロツク』と書いている。

「意味が分からないわね」

笑ってそう呟くと、五線譜のバッグの内ポケットに入れた。ショートカットの女性も、乗って来た時よりも軽やかに降りて行った。

車内の年老いた夫婦がその様子を見て言った。

「あなた、あの二人恋人になりそうね」

「そうじゃろうか、あんな男の恰好はわしは好かん」

「別にあなたがあのお嬢さんの父親じゃないんだから、いいじゃないの」

おかしそうにおばあさんは笑う。

「それに、あの若者は見かけよりはずっといい人みたいよ」

「なんでわかるのさ」

「あの人、昔のあなたに似ているもの」

「バカ言っつな」

そう言いながらも、おじいさんは満更でもない顔をして眠ったふりをする。

おばあさんは遠い昔を思い出していた。

おじいさんが吹いたハーモニカのメロディを。  
今も吹けるかしらと、笑ってつぶやいた。



## 羽田へ連れて行って

地下鉄の笹塚の駅でケータイを持って呟いている若い男。

「ここから新宿で乗換、大江戸線で大門まで行く。そこから羽田へ京急か」

手には海外旅行のようなスーツケースが見える。

隣には眼鏡を掛け黒のリクルートスーツを着た若い女性が、ボストンバッグを持っている。

おずおずしながら男に話しかけた。

「あのう、羽田へ行くんですか」

急に話しかけられた男は、少し戸惑い気味に頷いた。

「私も羽田へ行きたいんです」

「じゃ、この地下鉄でいいですよ。一緒に行きましょう」  
乗り込む二人。

「どちらへ行かれるんですか」

「あ、僕は卒業旅行でグアムです。あなたは」

「羨ましいわ。私は面接を受けに地元へ帰ります」

「あ、就職試験ですか」

「ええ。あなたは就職は決まってるんですか」

「ええ、まあ一応は」

言葉を濁しながらも男は言った。

女性は眼鏡を押さえながら、いいなあと呟く。

「私はなかなか決まらないです」

「そうですか、不況ですからね」

そう話しているうちに新宿に着く。

大江戸線はこっちだと彼女の前を歩く男は長いエスカレーターに乗った。

女性はボストンバッグを抱えながら後を追いかける。

二人の横を急ぐサラリーマンが階段を下りるように、エスカレー

ターを下りて行く。女性たちのヒールの音がカツカツと高い音をさせていく。

「都会の人はよく歩きますよね」

「そうですね。田舎はすぐに車ですから」

「だから、すごく太ったサラリーマンとかはあんまり見ないですね」

「そうそう、私もそう思います」

大江戸線の新宿のホームは狭くて人があふれそうだ。二人の荷物がかかります場所をなくしているようで気が引ける。

電車が入ると客がどっと下りるが、乗る人も多いので常にこのホームは満員だ。

男は大きな荷物なので、足の間に挟むように置く。女性のポストンを持つと網棚に載せてくれた。

「すみません」

「いや、どうってことないです。僕の荷物に比べたら」

「どれぐらい行ってるんですか」

「えーと、三泊です。贅沢でしょう」

いたずらっぽく笑う男に、女性も気を許してきた。

「ホント、私は試験だというのに。あなたはグアムなんですね」

「そうですね、いいでしょ」

「あら、だんだん腹が立ってきました」

ふざけて怒ったように話す女性。打ち解けて話しているうちに二人は古くからの友人のような気がしてきた。ちょうど座席が二つ空いて座ることができた。

「何の仕事をされるんですか」

「僕ですか。ホントは野球選手になりたかったんです。でも事故に遭って、この左手義手になったから田舎で民宿の後継ぎになります。結局大学も五年行きましたし」

その左手は実によくできていて、義手とは思えなかった。

「皮膚も本物みたいでしょ。でも違うんです」

女性は何も言えなかった。さつきから男のことを羨ましがってば

かりだったから。

「さ、次は大門ですよ」

網棚の荷物もサツと取ってくれるこの左手が義手なんて思えなかった。

男のスーツケースはコロコロと音をさせながら女性の前を歩く。

羽田行きの京急電車が待っている。

「あれに乗りましょう」

「はい」

羽田行きの電車は空いていた。二人で並んで座ると、男はこう言った。

「羽田の一つ前で僕は降りますから。あなたは最後まで乗って行ったらいいですよ」

「ありがとうございます。私、初めての飛行機なんです」

「そうでしたか」

「あの、民宿の名前、教えていただけますか」

「あ、宣伝しておかないと。高知の桂浜近くの民宿です。黒潮クジラっていいですよ」

「すごい名前ですね」

「完全に建物は名前負けしてるんですが、魚は美味しいですよ。嫁さんも料理の腕がいいからきつと満足してもらえらると思います」

「結婚してるんですか」

「いえ、まだですけど。する予定です。随分辛い思いをさせたから彼女の車で事故に遭って。相手側がぶつかって来たんだけど、運転していたのが彼女だったから。切断した時に僕より落ち込んで」

話しているうちに羽田国際ターミナルに着いた。

男は機嫌よく手を振って降りて行った。そのホームには優しくそうにほほ笑む恋人が見えた。二人で行くのか。グアム。

「ちよつと期待していたのにな」

そう呟きながら、何だかスカツとした。

前向きな生き方の人に触れると、自分も前向きになれる。

そんな気がした。

いろいろなおことがあったに違いない。

颯爽としている彼の左手に彼女が手を差し伸べたのだろう。

野球選手を目指していたぐらいだから、きつと言えないほどの悩みや嘆きもあったに違いない。

だが、あの人ならグアムできつと義手も隠さずに手を繋ぐんだろ  
うな。ふつと笑いながら女性はボストンバッグを片手に国内線の出  
発ゲートに向かって行った。

今日の面接はきつとうまくいく。

何の確信もないけれど、そう感じていた。

## 憧れの人

満員電車の中で、先程から後ろでゴソゴソする人がいる。

『やだ、痴漢かしら』

何か固いものをお尻のあたりにすりつけて来るの。

初めは何か筒のようなものでも当たっているかと思ったけど、どうも様子がおかしい。

もう絶対に許さないんだから。

ここで大声あげるのって、とても大変な勇気がいるのよ。

掴むのもいやだし。

そうだ、ソーイングセットをポケットに入れたはず。

そっと、ポケットから出して針を出す。

ブスッ。

「うー、つつつつ」

と声にならない声がある。

それはそうでしょう、叫び声をあげたら痴漢だとバレてしまうものね。

いい気味だわ。

どの男かしら。

駅に着いた。

どの人かは分からないけど、これで懲りたでしょうね。

オフィス街に流れていく人波。

私の会社は高層ビルの三十四階にあるの。

更衣室で上にあげていた髪を下ろす。節電の電車の中ではバレッタで髪をアップにしているけど、会社に着いたら、ストレートにし

ている。

「おはようございます」

「あ、おはよう」

今日も部長はカッコいい。

紺のスラックスに薄いブルーのワイシャツがよく似合う。

クールビズになってネクタイをしないけど、このラフなスタイルがまた素敵。

年齢は四十二才。髪もすっきり顔は大沢たかおみたい。

こんな素敵な部長が独身だなんて。

だから、独身女性はみんな彼に声を掛けられると妙に華やいだ返事をする。

そう、この私もその一人。

「林さん、悪いけどこのコピーを十枚頼めるかな」

「わかりました」

同期の男性が頼まれると、思わず自分でやってと言いたくなるが部長は別よ。

早速コピーをして揃えて出す。ついでにカラークリップも添える。

「お、流石だね。気が効くなあ」

ニコツと笑って席に着く。

周囲の鋭い視線が体に突き刺さる。

仕方ないの。私って気が効くの。

お昼時になると、さらにヒートアップ。

「部長、お昼はどうしますか」

「ああ、今日は取引先と約束なんだ」

そう言っって颯爽と出ていく後ろ姿。どこまでも大沢たかおにそっくり。

「ホントに素敵よねえ」

「うん。結婚しないのかなあ」

すると、同期の男たちがこう言う。

「普通四十二才の男って、課長もそうだろう？」

「ダメ、あのでっぷり肥ったお腹は無理！」

「だけど、君たちが四十才の女ざかりになった時に部長は六十才だぜ」

「いいの、大沢たかおなら」

「けっ、大沢たかおだって爺になるぜ」

「ほつといて」

そんなふざけた昼の会話をお弁当を食べながらしていると、お局様の田所さんが入って来た。

「このハンカチ誰のかわらない？」

「えっ？ それは部長の机の上にありました」

「そう、血がついてるのよ」

「あら、どうしたんでしょう」

「どこか怪我したのかしら」

「私、洗って来ましようか。今日はそのまま出先からお帰りになるって聞いてますから」

「じゃ、そうしてくれる？」

「はい」

これで、ますますお近づきになれるかもしれないわ。しっかり洗って、アイロンかけて来よう。そつとバッグに忍ばせて帰る。

退社時刻になって地下鉄の駅に並ぶ。

夕方のラッシュ。

いやなのよねえ。

朝の事件を思い出した。

あの痴漢、今頃どうしているかしら。

ふと、前を見ると部長の姿。

『あら、この電車なの？ 知らなかった』

前に行きたいけど、満員で動けない。

部長は若い女性の真後ろだ。

こつちから声を掛けるには勇気がいるわ。

もう少しすいたら近くに行こうかしら。

そんな甘い考えをしていたら、突然女性の声。

「いい加減にしてください！」

部長の前の女性が怒って震えて言っている。

『誰に怒ってるのかしら』

「この人、痴漢です！」

女性の手が部長の手を握って、叫んでいるのだ。

まさか！

そんなはずはない。

傍にいつて濡れ衣だと証明してあげなきゃ。

女性の隣の人が部長と一緒にあって捕まえている。

つい、どうにかしてあげたいと、一緒にホームに降りた。

突然の私の登場に部長はギクツとした顔をした。

私は証明するから安心してと言いたかった。

だが、部長の顔は真っ青だった。

冤罪なんかを負けないでと慰めてあげないと。

だが、部長は小さく小さくなっていくようだ。背中がまあるくな

っていく。

可哀そうに油汗まで出している。

「あ、ハンカチを」

まだ洗っていないけど、預かっていたハンカチを出して、部長に

渡すと倒れんばかりに驚いた様子だ。

朝は気付かなかったけど、この整髪料の匂い。

汗をかいた部長の匂いは似ている。

目を落として見つめるとストラックスのチャックの部分に残るしみ。

まさか……。

「この人、痴漢です」



女性と一緒に指差した。

## 予期せぬ贈り物

朝の地下鉄にときどき荷物の多いお年寄りが乗り込んでくるときがある。

ホームで並んでいるのが見える。

乗客がどつと降りて四人が座れた。

例の老人優先席だ。

その老人優先席にはサラリーマンがズラリと座つたのだ。

なるべく目を合わせたくなくて、熊に出会つたかのようにみんな死んだように眠つてるふりをする。

四人席で一番若い奴が一番疲れてることもあるが、この際若い人が譲るべきだとみんな心の底で思っている。だが、今日の若者はいけなかった。腕にギブスをはめている。吊革が片手で荷物もある。流石に譲つてやれとは言えない。

とすると、二番手は三〇代だなとみんな思う。しかし、今日はその若い人がいない。六〇代前後なのだ。当然もうそろそろ座つてもいいというつもりでいる奴が三人だ。

同じ年齢となれば、そのお年寄りがどこに立つかで席が決まる。ドキドキしながらも、こいつの方が若いんじゃないかと考えてみる。

普段はどうすれば若く見えるか競っているはずが、こんな時は歳とつていふと思われたい。人間の欲望は果てがない。

そつだ、何気なく膝サポーターを履いているところを見せようと思つた男が一人。

姑息な考えだがさりげなくしないと意味がない。

そこで、呟く。

「新しいサポーターはゴムが締まり過ぎるな」

すると、隣の死んだふりの男は、途端にいびきをかく。二分と立っていないのに、どこまでも寝たふりなのだ。一番いけない野郎だ。

だが、起こしてまで席を譲れという奴はそういない。さらにもう一人。こいつが一番いけない。ケータイでメールを始めたのだ。こいつしか席を譲る権利のあるものはいない、そう膝サポーターの男は考えた。

だが、何ということだ。老人は膝サポーターの男の前に立った。

『ああ、じいさん、やめてくれ』

ケータイ男に『お前が譲れよ』と言いたいが、これまた言える雰囲気ではない。仕方なしに席を立ち、どうぞと声を掛けた。

すると、老人はこう言うのだ。

「いや、私は仕事もないですからあなたが座ってください。お疲れでしょう」

そう言われると、とても座れない。まして、こういう心のやさしい老人には席を譲ってもいいという気持ちになる。

「いえいえ、どうぞお座りください」

「すみませんね」

荷物が多いようなので、上に載せましょうかと話しかける。

「あ、でも、重いですから」

「大丈夫ですよ」

確かに重い。やつとのこととで棚にあげる。

「どうもすみませんね」

「いえいえ、でも、ここまで持つてるの大変だったでしょう」

「はい、でも折角作った餅ですから」

「え、餅ですか」

「はい」

「道理で重いはずだ」

「私を作ったもち米で作ったんです」

「ほう」

「ひ孫が一歳の誕生日ですから、背中に背負う餅です」

「ああ、昔はやりましたねえ」

「今はやらないからって言われたんですけど。祝い事はしないとっ

て私が言ったので責任上私が作らないとね」

笑いながら語る老人の話は温かい空気を醸し出す。

「お餅を持ってどこからいらしたんですか」

「はい、新潟からです」

「ほう、米どころですから美味しいでしょうね」

「ええ、そう思います」

ニコニコしながら老人は言う。

「そうそう、あなたにもお一つ食べていただきたい」

「いや、これから仕事ですから」

「いえ、ほんの一つ、このバッグにも入れてきましたから」

小さなポストンにビニール袋に入った小さな丸餅が二個。

それを差し出すと、男にどうぞと薦める。

「でも、これはあなたの食べる分ではないですか」

「いえいえ、残った餅を少し丸めて誰かに渡せたらいいなと思いまして」

「そうですか、どうもすみません」

「こんなものしかあげられませんが」

「いやいや、どうも朝の地下鉄でお餅をいただけるとは思ってもいませんでした」

「荷物になりますか」

「ありがとうございます」

やがて、老人は駅に着くと深々と礼をして重い袋を持ってゆっくり歩き出した。

男は通勤カバンにそつと餅を入れる。

次の駅で男も降りた。

鼻がつんとする。

餅が嬉しいのか、泣きそうになる自分に笑えてくるが、何だか胸が詰まる。

男はケータイを取り出して電話する。

「母さん、元気？」

## 表参道へ行こう！

表参道に行くらしい。

鳴子を持った踊り子たちが地下鉄に乗って来る。

透ける生地だが片袖ごとに色が違う。右手が薄い黄緑、左手がオレンジ。ズボンは白、ひつつめのアップにした髪には揃いの白いベレー帽。

踊り子たちはどこかの大学生らしい。

白いオーガンジーの布地に大学名が染められている。鳴子は揃いの白木だ。

「暑いねえ」

「うん、それにドキドキするねえ」

「先輩、東京は初めてですか」

「ううん、去年に続いて二回目」

「私は、高校から踊っていたからもう五回目です」

「あら、流石ね」

「東京の人も喜んでくれるから嬉しいです。年々人が増えていきますよね」

「ホントね」

楽しそうな会話に耳をすませる乗客。スーパーよさこいが始まったもう十年くらいだろうか。

東京の街を練り歩くのだろう、鳴子を持った踊り子たち。

東京では東京音頭とか徳島の阿波踊りを踊ったりするところもあるようだ、最近はこの表参道のよさこいだ。

ママに抱っこされた二歳くらいの子どもが鳴子を珍しそうに眺めている。

「これ？」

その踊り子たちの持っている鳴子が欲しいのか、手を出してきた。後輩の大学生はすっと渡してあげると、子どもは嬉しそうにカチ

ヤカチャ鳴らしている。

「次の駅まで貸してもらおうね」

抱っこしているママは気兼ねしてそう言った。だが、踊り子は袋を見せてこう言った。

「大丈夫。あげます。これに予備が入ってますから」

「いえいえ、この鳴子が高いのは知ってますから」

「えっ？」

「私もずっと踊っていたんです」

「あ、そうでしたか」

「高知の人ですか」

「いいえ、違うけど。関西の大学でいつも夏は踊ってました。懐かしいわ」

「もう踊らないんですか」

「この子が小さい間は。でも、あれはいいですよね」

子どもの鳴子を眺めながら、若いママは懐かしそうに話した。

「今日は東京でお披露目ですか」

「ええ、本場はこの前踊って来ましたから」

「そうですか。楽しかったでしょう」

「はい。だから、今日も張り切ってます」

男子学生も揃いの衣装で近づいてきた。

「僕たちは飲料水や太鼓の運搬があるから、君たちは悪いけど帰っても電車で帰ってくれる」

「了解です」

男子学生は大きなフラフを下げている。それには鯉に乗った金太郎が描かれている。

子どもの目はまたもや輝き、その色鮮やかなフラフに釘付けだ。

気付いたママは鳴子を受け取ると、踊り子に渡した。

子どもは手から鳴子が離れても、今は金太郎の方が魅力的らしい。車内には祭りの雰囲気満載だ。

「ほら、こうしたら見えるかな」

男子学生が少し広げて金太郎がよく見えるようにする。

「きんたるう」

と小さくつぶやく子ども。

「そうよ」

手を叩いて喜ぶ子どもにみんなも笑顔になる。

「私たち、みんな子ども好きなんです。保育士志望ですから」

それを聞くと、ママは嬉しそうに頷いた。

「みんな素敵な保育士さんになりそうですね」

鯉にまたがっている金太郎は、よほど子どもの目を引いているようだ。

「クマさんじゃないから珍しいのかしら」

そう言うと、ますます子どもは手をパチパチと叩いている。このあどけない姿に学生も乗客も笑顔になる。

ホームに踊り子の一団が下りると、男子学生と踊り子たちはそのフラフを大きく広げて見せた。鯉に乗った金太郎がりりしく前を見据えてる。

子どもはくるくるした目をさらに大きくして、声を出して喜んでいる。

「きんたるう」

ママは手を振り、鳴子を持った踊り子はホームでカチャカチャ鳴らして挨拶する。

やがて電車が走り去ると、踊り子たちは爽やかな笑顔をして、表参道へと向かった。

今日の気温は三十四。快晴である。



あなたならどうする？

終電に乗った。

ネクタイに醤油がついて匂ってる。

くたびれたサラリーマンがたくさん乗っている。いちやつくカップルもいる。

先程までビアガーデンで飲んだんだ。

一駅で降りる人が目の前にいたから座ることができた。

今日も疲れたけど、帰りのビールが美味かったなあ。

受付のエリカさんが一緒だと気持ちも華やぐよなあ。

彼女を狙っている人は多いんだろうなあ。

美しい白い肌、切れ長の目、知的な顔立ち。

まるで、江角マキコのようだ。

未だに結婚しないけど、どうしてかなあ。

そんなことを考えながらウトウトした。

ハツと気がつくともう車内は人がほとんどいない。

乗り過ごしたのか。いや、後二駅だった。

辺りを見渡す。すると、僕の隣の人が立ち上がった。コートから

ハラリと五千円札が落ちた。

「あー！」

声を掛けようとしたが、すぐに下りてしまった。ドアが閉まった。寝てしまっている客がほとんどで、一人は本を読んでいる四十代くらいの女性だった。

僕はすぐに拾った。

「あとで、拾得物で届けよう」

わざわざ声に出してそう言った。そうしないと、この起きてる女性にカッコ悪いし、盗ったと思われるたくない。

だが、今日の飲み代が四千八百円。ここに五千円持っている。いや、拾ったのだ。

財布に千五百六十円。

ここに五千円。

違う、これは人の金だ。

だが、名前が書いてあるわけではない。

そうだ、金は天下の回りものというじゃないか。

あそこの女性も一緒に下りる訳ではないし、もらってもバレないかもしれない、いや、バレない。

さあ、次で下りるんだ。

あれ、女性が本をしまう。

まさか、一緒の駅かよ？

最悪だな。

だが、他人なんだし、まあいいんじゃないか。

彼女より後から行けばいいんだし、出口は二つ。

東口に駅員がいたな。そちらに行けばいいんだ。

「落ちてました」

と言うふりをすればいいんだ。

ヒールの音がコツコツ響く。

なぜか僕の心臓がドキドキする。女のヒールの音にこんなにびびつくなんてちつぽけな心臓だな。

だが、女性は東口に出るようだ。どこまでもついてない。

なるべく後から出たいから、靴紐が解けてないのに直すことにする。

紐をキュツと縛っていると、なんだよ、あの女性は階段で転んでる。間抜けな女め。

「痛い」

小さくそう呟いているが、どうも腰を強打したみたいだ。周りには僕しかない。

なんでだよ！

「大丈夫ですか？」

一応声を掛けた。女性は首を振ってこう言った。

「すみません、駅員さんと呼んでもらえませんか。立てません」  
げっ！ そんなー。

駅員に会いたくないのに。そうだ、呼んで来たりしていたら、ドサクサで落とし物を渡すことを忘れたって言えるな。

「ちよつと待つてて」

そう言つて走つた。

まるで、いい人じゃないか僕つて。気持ちもすつきりした。

駅員さんに事情を話すとすぐに担架を持って向かつたようだ。  
後は駅員さんに任せればいい。

それを見て、僕は安心して家に戻つた。

つい、帰りのコンビニでシュークリームなんかもお土産に買った  
りした。

「ただいま」

「お帰りなさい」

小学生の息子が喜んでいる。

「パパがお土産を買ってきた」

「ママは？」

「今、従妹が電話があつて迎えに行った」

「従妹？」

結婚してから従妹なんて会つたことがなかった。確か、アメリカ  
に行つてた人がいたな。

ピンポーン。

息子と玄関に出る。

「こんにちは」

妻と現れたのは、あの女性だった。

「あ、あなたは」

「あら、どうも」

届けたと言えはいいのか、それとも、忘れてたと言えはいいのか。

僕の心はどんより曇って晴れそうもない。

シュークリームも食べる気がしない。

地下鉄の窓に映ったのはだあれ？

「じゃ、行ってきます」

「いつてらっしやい」

夫を送った後、掃除、洗濯、朝食の片付けをすると、念入りに化粧をする。

決まった時間に地下鉄に乗る。

私は専業主婦。

今日は東西メトロ。

あなたはどこに乗ってるのかしら。

私は白のパンツに麻のジャケット、インナーは黒のポロ。

今日のお相手はベージュのチノパンに白いポロという話だったわね。

来た！　ここは四両目。

九段坂から乗って来た人。

さりげなく私の隣に座る。

「よく似合ってますね」

「ありがとう」

二人で早稲田で降りる。乗降客が多いので目立たないの。二人並んで歩く。

「なんで、あなたみたいなのがこんなサイトに」

「そんな野暮な話はしないの」

軽くたしなめる。

私は四十五才。もう子どもたちは関西の大学へ行った。長男は京都、妹は神戸に行った。急に子どもが離れた途端、虚しい日々が始

まった。

いつも子ども中心の生活をしていたのだと思い知らされる。夫との会話は続かず、全く無味乾燥な毎日だった。テレビや本があると、言っても、会話をしないことの寂しさが募る。

夫は毎日疲れてると言い、風呂と寝るだけ。私はPTAすらなくなり、外出する機会はドンドン失っていった。カルチャーセンターでは、老人ばかりで話が合わずすぐに辞めてしまった。

かといって、通販で買えるものばかりする友だちや、韓国の俳優に入れあげている友だちとは疎遠になってしまった。ふと、パソコンで覗いていたページ。出会い系サイトではありませんと書いていたが、一度クリックすると魅力的に誘う言葉が溢れていた。

「バカみたい」

そう思いながらも、悪い気はせず、一回きりと思ってサングラスを掛けて出かけてみた。若いけど初な感じの可愛らしい男の子がいた。私を母親のように甘えるものだから、つい我が子が母親を鬱陶しそうにする現実とのギャップが楽しくてハマった。何も知らない少年を味わってしまった気分。忘れていたこの感覚。手ほどきする瞬間、すごい娼婦のような自分に驚きながらも、これも同じ一生なら味わってみるのもと、大胆な考えが頭に浮かんできた。

そして、二度が三度になり、今や両手ほどになってしまった。だが、後ろめたい気持ちが無くなったわけではない。ただ、必要とされている感覚、人と人との触れ合いの心地よさに目覚めてしまったのだ。

お互いが背を向けて寝る寝室や、いびきをかかされると寝られず、階下に降りてテレビをつける。そんな主婦の侘しさ。大学を出て仕事を持っていたころは、生き生きと活動していたように思う。結婚してすぐに子どもが年子で生まれたものだから、退職するしかなかったあの頃。

大学が近くにあるから、安いランチの店が並ぶこの界隈。男性はセックスに興味がないのか全く誘う気はないようだ。

でも、こんな関係もいいかと可愛い文房具などを見たり、古本を探したりと、普段とは考えられない日を過ごした。あっという間に三時間が過ぎた。

二人はもちろん、名前も電話も教えない。

そう、探ったりしてはいけないのだ。

電車に二人並んで座る。ふと顔を上げると、自分の顔が窓に映る。いつも下を向いていたから気付かなかった。後ろめたくて下ばかり向いていた。今日はすがすがしい。晴れやかな顔をしている自分にびっくりした。

「彼はどこに？」

「これが奥さんの歩いているコースです」

写真を並べ、説明するのは探偵。

「家内は浮気しているんじゃないのか」

「違いますね。詳しく調べてみましたが、ただ散歩しているだけです」

「そんなバカな」

「美術館や文房具店、古書店などです」

「だって、あいつは妙にこの頃華やいでいるし、見たことのない下着が干してあった」

「だからと言って浮気をしているとは限らないでしょう。奥さんは妄想しているみたいです」

「えっ？ 出会い系サイトも覗いているようだ」

「ええ、でも、奥さんは入ってはいません。ご自分に関心がないこととの寂しさからくる精神的なものと。私共としては精神科への受診をお薦めします」

「そんな」

夫は写真に写る一人だけの妻に驚愕するとともに涙があふれてきた。

久しぶりに駅前でコロッケを買うことにするわ。

「コロッケください」

肉屋の店主は笑いながらコロッケを何個包むか尋ねる。

「そうね、四個頂くわ」

「はい。毎度ありがとうございます」

見送る店主は、隣の奥さんにこう言った。

「もう二週間も続いてるんだけど、旦那さんはそんなに好きなのかなあコロッケ」

夫は先に帰っていた。

冷凍庫に溢れるコロッケ。

「あら、あなた、帰っていたの」

「ああ」

「コロッケ買ってきたわ」

ドキッとする表情を見せる夫。

「なあ、明日、僕と遊びに出かけようか」

「えっ？ どこに行くの？」

「お前とならどこでもいいよ」  
「抱きしめられた。」

ふと、思い出す夫の匂い。

感情が止まらない。



私はとんでもないことをしていた。

「ああああ、どうしよう」

「どうしたんだ、お前」

「ああああ、とんでもないことを」

「違うんだ、お前は何もしてないんだよ」

「いいえ、いいえ、どうしよう」

夫は泣き叫ぶ妻を抱きしめた。

いつからこうなっていたのか。

気付かなかった。

一人でいる妻の気持ちを。

壊れていく、ああ、神様。

## ホームに響くのは

暑い。

熱風が吹く地下鉄の駅。

それなのに、朝から人身事故で人ばかりが増えていく。

「遅れるかもな」

「困るわ」

ホームに立つ二人は結婚して三年。

京王新線の初台の商店街を抜ける辺りに住んでいる。

結構静かだし、三〇分ほどで新宿にも歩いて行ける。

ところが、二人の勤め先はその新宿を超えて一時間弱のところ。

勤め先に近いところでもっと安い場所もあったが、夫の実家が近くで子どもの送り迎えもしてくれるのは何よりもありがたいと思っていた。

生まれて五カ月の息子は可愛い盛りだが、二人で勤めないこの頃は先行き不透明なので心配だ。

夫の両親は長年勤めて、去年から悠々自適の毎日。時たま趣味のデジカメを持って出かけたり、パソコン教室に通ったりしている。

やっと動き出した電車が入る。乗り込んだが満員だ。

妻は小声で言う。

「ねえ、あなた、今日は早く帰れる？」

「どうして、何かあったっけ」

「うん、お母さんの誕生日よ」

「ああ、忘れてた」

「私ね、お母さんにスカーフ買ったの」

「ふーん、じゃ、僕がケーキでも買って帰ろうか」

「そうしてくれる？」

「うん。久しぶりだよ、母親の誕生日なんて祝うの。小学生以来だな」

「そうなの？」

「ああ、男なんてそんなものさ。兄貴なんてずっと知らん顔さ」  
だが、その兄貴の嗣夫からメールが来た。

『今晚帰る。話があるから来いよ』

母親の誕生日だから来ると言うのか、それは少し考えにくい。嗣夫は家を出てもう十五年だった。年齢は三十三才になっていた。三つ違いで学校でもよくできると評判だった。弟は誇らしい気持ちも半分、比べられるというしんどい気持ちも半分あった。

そんな嗣夫が大学を京都に決めてからは全く帰ってこなかった。どんなに電話しても忙しいと言つて。こちらが行くしか会う方法はなかった。嗣夫がサラ金で金を借りたという取り立てが来たのが四年前。いつのまにか五百万もの借金ができていた。親が退職金の前借などで返したが、嗣夫は小さくごめんと言っただけでまた家を出て行った。何に使ったものなのか、全く分からなかったが、それからは無理に会うことは家族の中では誰もしようとしなかった。両親の無言が哀しいのか怒りなのかよく分からなかった。

嗣夫は重い足取りで地下鉄に乗った。

「厄介者扱いだよな、きつと」

そう思つてはいたが、隣の女はきゅっと手を握つて大丈夫よと声を掛ける。

「私と一緒にいいの？」

「ああ、もちろんさ」

懐かしい初台で下りる。商店街に向かい、何か果物でも買おうと店に立ち寄る。

「その苺を二つください」

大きな箱に入った苺を二つ買う。女は財布から四千元出した。レシートもきちんと揃えて財布に入れる。

手に提げた苺の甘い香りが、少しだが気持ちを和らげる。

「今日は母さんの誕生日なんだ」

「えっ、じゃあ何か買ってきたのに」

「いいよ、苺で」

「そんな、私も何かしたかった」

少しふくれながら女は言った。

懐かしい家が近づいた。

中から聞こえるにぎやかな声。家族の団欒が伝わってくる。

一瞬たじろぎながら二人は玄関へ入った。

「ただいま」

バタバタと出てくる両親。

「お帰り」

「母さん、父さん、こっちが佐織。結婚したんだ」

「おお、そうか、早く上がれ。弟夫婦も待ってるぞ」

「これ苺」

「ありがとう、嬉しいわ」

部屋に入ると、ケーキがある。近くの宅配寿司もあった。母親の誕生日だからと父が照れ臭そうに言う。久しぶりに会った兄弟はどことなく照れながらも、お互いの顔を見て安心した。昔の嗣夫だった。ニコニコ笑う弟の嫁と息子。父親は嬉しそうにこう言った。

「結婚したんだって」

「そうかあ、おめでとう。じゃ、今日は母さんの誕生日と兄さんの結婚を祝えるね」

佐織は嬉しそうにしていた。こんなに歓待してもらえるとは思っていなかったのだ。

弟夫婦が息子を抱いて帰るといふ時に、嗣夫が話があると引きとめた。

「みんなに迷惑をかけてしまった。恥ずかしいことばかりで来られなかったけど、やっと嫁さんももらえて紹介したくて」

母の目につっすらと涙がにじむ。

「エイズになつて借金ができた。ホントにすまなかつた」

父も母も知っていたのか、下を向いたままだった。

声も出なかつた。

「僕は初めて知つたよ、兄さん」

「ああ、誰にも言えなかつた。学生時代にそんなもの貰つたなんて。献血で気付いたのが八年前。結婚しようと思つていた彼女にも逃げられた。幸い、彼女にうつつていなかったけど。それから知つての通りさ」

父親は呟いた。

「取り立てがきて京都に向かつた時に、抽斗にあつた病院の検査結果を見つけて」

母親が声を上げて泣きだした。

「ごめんよ」

「体の調子はいいいのかい」

「うん、発症してないし。嫁さんもできまし」

「本当に嗣夫のところ嫁いでくれてありがとう」

佐織は優しい言葉を掛けられて泣いていた。佐織は介護士だった。

「嗣夫はどこに勤めてるの」

「大学の先生に紹介してもらつて、授産施設の職員に。研修でこいつと知り合つて」

「そうか」

話は尽きることがなかつた。

ついに終電の時間になった。

眠っている息子を抱きながら二人は初台の駅のホームに立っていた。

嗣夫夫婦が実家に泊まることになった。

穏やかな夜だった。久しぶりの家族揃っての団欒だった。

「あなた、どうしたの」

夫は息子を頼ずりしながら泣いていた。

「兄さん、兄さん」

背中を撫でる妻の手はどこまでもやさしかった。

## シャンソンの夜

有楽町線に乗って、銀座へ行く。  
確か夕方六時開演だった。

友人からの招待状が届いたのは十日ほど前の話。

もう二十年ほども会っていない友人から手紙が来たので、同窓会でもするのかなあと思っけて開封したら、なんとそれが彼女のシャンソン発表会と書いてある。もちろん彼女だけではなくて、そのシャンソンの講師に習っている方たちの発表会だった。

思い起こせば大学時代も歌は確かに好きだった。でも、この前会ったのはお子さんが大学受験でこちらに上京したときだったから、四十四才の時だった。あれから二十年。

彼女は子育てを終え、シャンソンを習っていたとは。

私は夫がリストラに遭い、今では二人とも働いている。夫も年金だけでは苦しいので近くの学習塾にパートで勤めている。私も、近くの喫茶店にモーニングの時間だけ手伝いに行っている。

彼女が上京した時は、私たち夫婦は豊かで、若い夫の早い昇進を自慢げに話したことだった。彼女は羨ましいと言っていたつけ。奨学金で子どもが大学へ行く話やら、教員夫婦の彼女の夫は田舎の小学校へ赴任して離れ離れだと聞いた。

田舎の先生は大変ねと、どこかで相手を下に見ていたような気がする。

今は、彼女はシャンソン。私は朝の喫茶店でモーニングのパンやコーヒーを運んでいる。

どこで変わったんだろう。

車窓に映る人の顔はみな疲れている。

夕方の車内は一仕事終えた人がほとんど。夜のお勤めに行くような着姿のホステスさんが数人いるのもこの時間ならではの光景だ。

銀座の街に出ると、華やかな夜の照明がいく分減ったとはいえ、銀座は銀座だ。

花でも持つて行った方がいいのかなと思いつながら、デパートに入る。花代だけでも五千元。こんな花に五千元。私の朝の二日分のパート代が消える。

少しため息をつきながら、コンサート会場を探す。銀座のビルの六階にあった。

そこは華やかな雰囲気にもまれていた。彼女の家族も来ていた。みんなお洒落だった。自分の姿をもう一度見て負けてないか見直した。肩のパッドが大きくて昔のスーツだと分かってしまうかも。仕方ないと思いつながら、何だか恥ずかしい。

花を受付に渡して名前を書く。

彼女に届けられた花もいくつあった。

舞台はプロのシャンソン歌手から始まった。普段、見ることのない別世界。きらびやかな衣装に包まれて次々と披露された。

スポットライトが当たり、彼女が出てきた。もう六十四歳なのに、スパンコールがちりばめられた衣装は彼女を若く見せて、まるで四十代くらいに見せていた。ぐっと胸を大きく開けたドレスに、小さく後ろにまとめた髪が色っぽくて、とても昔の田舎の先生には見えなかった。

歌い方も迫力があり、年数を感じられる。シャンソンが若い人だけの歌ではないということが伝わる、そんな歌いつぶりだ。

昔、イブ・モンタンが歌った歌だと思いつながら、恋人の足音を聞くという歌を聴く。

「パダム パダム」

思わず涙がこぼれてきた。彼女はそれほどうまかった。

終わった後の拍手も一番多かった。

みんなに囲まれている彼女を遠くで見て、私は静かに会場を後にした。

地下鉄の駅に着くと、彼女から電話がかかった。



「ありがとう、話がしたかったのにごめんなさいね」

「ううん、素晴らしい歌声で泣けたわ」

「ホント？ あなたにそう言われると一番嬉しいわ」

「素敵だったわ。ホントよ」

「お花ありがとう。あなたらしい洒落た花束、こんなの初めてよ」

「喜んでもらえてよかったわ」

そう言いながら電車が来るからと切った。

本当はまだ時間があつただけだ。

あなたは掛け値なしのいい人だと、改めて自覚した。花束はもつ

とたくさんあつたのに、一番だと言ってくれる、そんな優しい彼女。

だからこそ、胸に迫つたあの歌。

きつといろいろな人生経験を積んだのだ。

いつも表面しか見ていなかったのかもしれない私。

夜の地下鉄に乗り、彼女の歌を思い出していた。

去っていく恋人の足音が……。

改札口を出ると夫がいた。

「あら、どうしたの」

「いや、塾が早く終わったから。今日は帰りに一杯やろうかと思っ

て誘いに来た」

「わあ、嬉しいわ」

「何だよ、いつもの居酒屋ゲンちゃんだよ」

「いいの」

思わず腕を組む。

私もいい人生送ってるかもしれない。

## 顔を上げたら

いつの頃からか、緊張するとお腹にガスが溜まるようになった。女の子なのに高校時代は、トイレに近い廊下側の席をいつも確保した。

病院の先生に診察をしてもらうと、過度なストレスでますます腸が敏感になるということだった。

繊維質のものを取り過ぎないように食事にも注意した。

便秘したわけでもないのに、いつも人前でおならが出ないように緊張する毎日。

進学校の受験への緊張が、私の腸を過敏にさせた。

幸い合格した大学は地元だったから、満員電車など縁がなかったけど、今年から就職で東京に来た。満員ということとトイレがないということは、ひどいストレスになった。忘れていたおならの悩みがまたもや復活してしまった。

地下鉄が混まないように早目に出るようにしたが、流石にどんなに早目にしても満員だった。まさか始発で出勤するわけにもいかないし、ホームから近いトイレを頭に叩き込んだ。おならが出ると腸の動きは活発になり、便意を催すのだから始末が悪い。

篠崎から新宿まで一時間弱。

もつと近いところに部屋を探そうとしたが、田舎育ちの私は家賃の高さに驚きここになった。小さなマンションの二階。毎朝駅までは六分程度で、距離は万全だった。

始点から近いので大体座れるのだが、この日はタッチの差で座れなかった。

座ると耐えることができるのだが、立っていると腸に刺激がかかりやすい。ダメだという危機意識でさらに困難な状況を自分で作り出す。

気を紛らわすことをしないとダメだ。本をバッグから出して読み

始める。だが、こういう時の読書は集中してないから、読んでいても面白くないのだ。しかも、扉に近かったらもたれるのでいいけど、つり革にぶら下がってはしんどいのだ。

いやだなあと思っている、隣の男性がブツブツ言っている。

「くそ、腹がいてえ」

げっ、この人、私みたいな人かしら。

思わず感情移入しちゃって、声を掛ける。

「大丈夫ですか？」

「あ、すみません。ええ、多分」

多分と付くあたりが大丈夫ではないってことよね。

「何だか、朝から緊張しちゃって」

「何かあるんですか」

「うん、研修で今日は僕の発表なんです。昨日、練習したけど時間が合わなくて、ずっと夜中もやってましたから寝不足です」

「毎日のリズムを崩すとよくないですね。私、薬を持ってますけど。売薬ですが」

「あ、できたらください。いえ、売ってください」

「じゃあ、十万円で」

「ええっ！」

「嘘です。あげます」

笑いながらポーチから渡すと、彼はすぐに口に入れた。

「はあ、助かった」

「飲んだという気持ちだけで、おさまって行く気になるから不思議ですね」

「えーと、僕はこういうものです」

首からぶら下げた社員証を見せてくれる。筒井浩介と書いてある。

「私は丘紀子です」

気楽な会話が進んでいくと、不思議なことに緊張感がドンドン和らいで、お互いにリラックスして来る。

「僕は週末が休みです。丘さんは？」

「私は水曜です」

「そうですか、合いませんね」

「え？」

「じゃ、火曜の夜が都合がいいかな」

「あ、でも」

「あ、軽い食事だけなら？」

「わかりました」

彼は嬉しそうに約束の日をケータイに入力した。私も同じようにした。

そして、彼は名刺入れの中から自分の名刺を渡してくれた。

「営業でなく渡すの初めてです。下痢止めのお礼なんてカッコ悪いですが」

「そんなことはありません」

くすつと笑いながら答えた。ケータイ番号も書いてある。

私もバッグから新品の名刺を取り出しケータイの番号を書いて渡した。

彼は九段下で降りた。

いつまでも手を振ってくれた。恥ずかしいほどに手を振るので少し困ったけれど、その純粋な雰囲気が好きだった。

新宿に着くと、いつものようにトイレに急ぐ自分でないことに驚いた。

なんともないのだ。

肩もすつきり。つまり緊張してコチコチになっていないのだ。

ただ、火曜日の夜って今日のこと？

ケータイが鳴った。

「今日、どうですか？ 火曜日でした！」

「ええ、いいですよ」

「そうですか、じゃ、新宿の京王の花売り場で七時に  
「はい」

ケータイを切ると、背筋を伸ばして駅を出る。

下を向いていない私。

朝日が眩しい。

自転車は走るものです！

地下鉄が運行しないなんて考えたこともなかった。

間の悪いことに昨日からエアロバイクを始めたのだ。

それというのも、ウエストが結婚前から比べると十センチもオーバーした。

ズボンは何れも小さくなって、その度に直したり買ったりして不経済だと妻に叱られた。

「こうなったら、自分の体を修正するしかない！」

そうだ、キムタクと同じ年なんだから。

あの肉体を目指せばいいんだ。

顔のパーツはそう悪くはないと思うのに、妻に言わせると合わせるとだいぶ違うって。余計な御世話だ。自分の方こそよく見てみる。竹内結子と同じ年なんだぞ。

だが、そんなこと恐ろしくて言えない。

「私も使うから買いますよ」

そして届いたエアロバイク。張り切ってまずは俺から使うことにした。漕ぐこと一時間。汗にまみれてすごい達成感を味わうことができた。

その後のビールのうまいこと！ アルコールやプリン体がカットされたビールもなぜか喉越し爽やかだった。

そして、今日、筋肉痛が少しある。でも、これを続けるのだ、目指せウエスト十センチ減。

夫婦で出勤。

地下鉄の階段は昇るのが辛い。昨日の運動のせいだ。

一日よく働いた。

だが、問題は帰宅時間に地下鉄がストップしたこと。

昨夜の筋肉痛が午後から響いて来た。

それなのに地下鉄が動かないんだって。バスも来ない。人が溢れて来る。当然タクシーも来ない。駅の周りはすでに数え切れないほどの人でごった返している。

地下鉄は動かないという情報が流れ、みんな歩き出した。

妻へのメールも使えない。

街はひっそり。

妻はどうやって帰るのだろう。この暗い道を通るのは危険だ。

営業で車を運転するから帰りの道はなんとか分かる。多分二十キロくらいじゃないだろうか。

自転車店はもうすでに賢い人たちが買って売り切れ。エアロバイクを買ったって仕方ないじゃないか。

急に自分に腹が立ってきた。

あれほど漕いで汗をかくんじゃないやなかった。

黙々と歩く。

コンビニでお茶でもと思ったのに、すでにコンビニは真っ暗で客に売れるものは日用品しか残ってない。みんなはどうしてそんなに頭の働きのいいのだろうか。

欲しいものがすべて売り切れということとは、俺の頭がワンテンポずれてるといふことなのか、疲れがたまる。

学生街では二人乗りをこのときとばかりしている。危ないから止めるとは誰も言わない。ひたすら羨ましい。

「後ろに乗せてくれ」

と言いたくなる。

父親を見つけた娘が父親に自転車を渡すと、自分は荷台に乗る。

頑張ってるお父さんがあちこちで見られた。うちは子どもがいないからそういふこともない。

都立の高校は体育館を開放しているらしいと言っが、もう半分帰ってきたから家に帰りたい。妻の笑顔が見たくなる。不思議なもの

だ。別段喧嘩をしているわけではないが、妻の顔を思い出すなんてことはない。それがなぜかこれほどまでに帰りたくてたまらない自分がいる。

すでに、三時間経過。

足はスニーカーでなくて革靴だから、めっちゃくちゃ疲れる。そうか、靴屋が満員だったのはスニーカーを買っていたのか。またもや、自分の考えの無さにつくり来る。

今度店が開いていたら運動靴を買おうと決心してから靴店はない。先程から腹が減ってグーグー鳴っている。

だが、もちろん店も開いてはいない。

膝から下に疲労が蓄積される。ゴルフでもかなり歩くからとは思うが、こんな固い歩道を革靴で歩くこと四時間。

見慣れた景色が見えてきた。

あの角を曲がればついに我が家だ。

妻はいるだろうか。

思わず早足になる。

玄関には鍵がかかっており、妻が帰宅していないことがわかった。あいつの方が靴はヒールだし、その上タイトスカートだった。きつと大変な苦勞をしていることだろう。

十分ほどして玄関を開ける音がした。

「ただいま」

「お帰り」

驚いた。ジャージー姿にスニーカー。頭には工事用ヘルメット、服やカバンはリュックに入れてる変なおばさんスタイル。

「すごいなあ、用意周到じゃないか」

「そうよ」

「だって、この前社内のバドミントン大会で使ったのをそのまま置いてあったの。しかもこのヘルメットは警備のおじさんが貸してくれたのよ。自転車は最後の一台だったのを買ったの」

「へえ、よかったねえ。俺なんか革靴で帰って来たんだぜ、歩いて」



「普段の行いの良さかしら」

「それにしても無事でよかったな」

「うん」

汗をかいてる妻はちょっとだけ竹内結子に似ている気がした。

足のマメを妻が優しく消毒してくれた。

すごい幸福感に満たされる。

高価なエアロバイクは返品しようと二人で決めた。

やはり、自転車は走らなきゃ。

## 雨の日の出来事

朝の満員の地下鉄で、一番嫌なのが雨の日。

傘が濡れてるのに、自分からは離して人に付けて来る人がときどきいる。

そんな時は睨むようにするけど、残念なことに私は背が低い。

みんなと視線が合わないわ。

だが、人が混むほどにみんなの傘のしずくがヒールの足元に流れてくる。

長靴を履いていこうと思うけど、それを履きかえらと思うと荷物になる。

仕方なしに合成皮革のポンプスで出かけるのだ。

高い靴ではないけれど、流石に靴の中まで濡れるのは嫌だ。

しかも、今日は大雨注意報が出ている。梅雨のシーズン真っただ中だ。

車内は雨の日独特の匂いがこもり、むしむしする。

ドライのエアコンを掛けてほしいとつくづく思う。

セットに時間を掛けた髪は、哀しいほどに広がっている。

レインコートを羽織って入るけれど、ストッキングは濡れてべとべとしている。

思わずため息が出る。

私の前のおじさんは、昨夜のニンニクが臭い。一体、何を食べたらそれほど匂うのかと、腹立たしい気分。

隣の学生はきつと徹夜で遊んだ帰りなのか、髪はべったり、風呂に入っていない汗臭さ。顔も洗っていないんだらうな。口元には涎のあとすらある。

うー、気持ち悪い。

後ろの女子高生は必死になって単語帳をめくっている。

一夜漬けもできなかったのか。それとも、上位成績者なのか。こ

の満員電車の中でも勉強するなんて。

席に座っている中年女性はカバーをつけた本を読んでいる。朝から真剣な目つきで必死に読む本ってなんだろうか。読書好きの私には気になる。

すると、彼女はますます本を顔に近づけて、人に見られないようにして読んでいる。

そこまでされるとますます知りたくなるのが人間だ。カバーの上から目を凝らしてみる。

見つけたのは淫靡と言う字。はーん、そういう本なのね。

でも、この満員電車で読みたくなるというのがすごい。隣に座っているスポーツ新聞を読んでいる男性は先程からグラビア写真の横にある、エッチな記事から目を離さない。

そうね、行きつくところはやはりここか、と思うと朝から体がだるくなる。真剣な仕事をする前の息抜きがこれなのか。

やっと、赤羽でドドツと人が降りる。

傘で濡れたストッキングが体に張り付いて気持ちが悪い。バッグからタオルのハンカチを出した。すると、あるうことがコンドームがヒラリ。

みんなの視線がそれに釘付けになったことは言うまでもない。

恥ずかしくて死にそうな気持ち。

みんなはコンドームと私とを交代に見る。

何でこんなものが？

残念なことに彼とはもう数カ月前に別れたきり。

「すげえ」

「私の隣の汚い学生が思わず呟いた。穴があつたら入りたい。」

「しかも、そいつが拾って私に渡すではないか。」

「はい」

「あ、違います」

「え？ 違うの？」

本当はそうだけど、違うというよりほかの考えが浮かばない。学生はふーんと言つと、自分のポケットに入れた。

汚い人だけど、いい人みたいね。

私はあわてて電車を降りた。

あの気まずさに耐えられなかった。

思い起こせば、ラブホテルのコンドームが二枚。残った一枚を彼がバッグに入れてきた。ふざけて入れたが、何となく戻さなかったことを思い出した。

あれから彼の転勤で、連絡が来なくなった。忙しいし彼には新しく付き合う人ができたようなメールが来た。初めこそ泣いていたけど、距離が離れ、私も忙しくなると別れも自然に辛くなくなってきた。

もう一本電車を待っている間に、あの時に身につけていたバッグと傘とレインコートだということを思い出した。

「そうだ、この縁起の悪いバッグは使うの止めようつと。これは雨の日用として使っていたけど、安物だしもういいわね」

私はこの日、会社の帰りにバッグを買った。

八千七百元。雨の日用には高いけど、赤いバッグなんて持つのは初めて。気分も高揚しそうだし、運気が上がる気がするわ。

ついでにレインブーツも買った。

膝下まである水玉模様のブーツ。  
四千六百元。

今日一日でこんなに消費なんて。

でも、明日の電車はもうストッキングも濡れないし、みんなの傘のしずくも入らない。

もっと早く買えばよかったな。

大雨注意報は買い物過ぎたころには消えていた。

哀しいことにその夜の天気予報で、明日は晴れだと告げていた。



明日天気になあれ！

東西メトロに乗ってやって来た。市ヶ谷。

東京五輪のころに突貫工事で地下鉄ができた。

あの頃は毎日、とてつもなく大きな音でこの界隈の人は辟易したものだ。ものだった。

「何が嬉しくて江戸ツ子が地下の電車に乗るんだよ！ もぐらじゃあるまいし」

背中に青い籠を背負ったおじさんが、道端に置いたみかん箱に座って話していた。

まだ、戦後十五年程しかたっていないなかったのだ。

矢来町というと、夏目漱石の硝子戸の中に出てくる地名の一つだった。

両親と叔父、姉二人に私が住んでいた。八年間を過ごした東京。今思えば随分と小さな家に六人もいたのだ。

六畳間が一つ、四畳半と三畳、そして二畳程度の台所、風呂はなかった。

下宿をさせてくれと田舎から来た父の弟、つまり叔父が三畳間を取った。残りを五人家族で住むのだった。

幼稚園も併設されている赤城神社というのが近くにあった。祭りになると、威勢のいい男たちが神輿を担いだり、夜店はたくさん立ち並んでいた。境内いっぱい夜の夜店は子どもをドキドキさせたものだ。

赤城神社の境内には忠霊塔があった。今は有刺鉄線で囲まれて上ることはできないが、新宿のど真ん中から富士山が見えたものだった。高層ビルもなく、この境内が結構高台にあったのかもしれない。だから、遠くに見える富士山がとても好きだった。喧嘩をしてはここに上り、泣いては上り、かくれんぼも鬼ごっこもよくしたものだ。この赤城神社に上がる石段の下には、戦後のバラックがそのまま

あつた。時折傷痍軍人と呼ばれる人たちがこの角でアコーデオンを弾いていたのを微かに思い出す。

白い病衣のような服が、やたらと印象に残っていて、私はいつもお金を上げたいと言つては両親を困らせた。

あの頃はまだ幼稚園か一年生のころではなかっただろうか。

時折、末っ子の大学生の叔父を見に、祖母や叔母たちが家に来たものだった。母は貧しい生活をしているのに、田舎から叔母たちがやってくるにニコニコと泊め、随分と狭い家に人が溢れるほどだった。

そして、来るたびにとはバスに乗せていたのを思い出す。

米粒ほどの顔の写った記念写真。日本の高度経済成長期のはとバスはこんなに乗せていたのかと驚いた。母方の祖母が来た時は、母の顔も喜んでいいる。父方の祖母の時は、いつも頭痛がするとしかめ面していたのを思い出した。

駅から矢来町に向かつて歩き出す。

どこも全く変わってしまったて、さっぱりわからない。子どもの目ではすごい大きな道だと思つていたが、まるで小道なのにも勘が鈍る。家のあつたところはアパートができていた。

新潮社も矢来町だった。大きなビルであることに変わりはないが、近くは製本工場がたくさんあつたのに、今はとんと見当たらない。

あの頃には、この近くの工場はほとんど製本か、金属の加工場だった。

そつだ、五〇年も前の話なのだから。

私の通つた小学校は市ヶ谷小学校といつていた。講堂で映画教室というのが時々開かれ、そこで綴り方教室やら、にあんちゃんなど古い名作とよばれるものをよく見たものだった。テレビもない家がほとんどだったから、夏の学校映画と呼ばれるものは地域の人たちの唯一の娯楽だったのかもしれない。コンクリートの校舎の壁に白いシーツを垂らして映画上映するのだ。

団扇と莫蔭を持って学校へと急いだことが懐かしい。

ステテコと縮のシャツを着たおじさんたち、中にはスリッパ姿のおばさんもいたっけ。

家族全員下駄ばきというのも、このころの夏の風物詩。

ご近所の大家さんは、デイズニー映画のチケットをときどき借家人の私の家に持ってきてくれた。そして、眠りの森の美女という映画を見ると、あまりの美しさに感動したものだっただ。

自分の家の周りはステテコの男とスリッパの女たち。

どう見たって、眠りの森の美女のような人はいなかった。思い出すと吹き出してしまふ。

懐かしかった東京。

あの頃の父は若かった。

あの頃の母は綺麗だった。

今、私はあの頃の両親の年齢をはるかに超えた。

赤城神社から神楽坂に向かうと、よく見ることができた芸者衆は今はそのなに見ることもない。

正月は稲穂を簪にして黒の着物を着ていたのに。

夕暮れになると、下駄を放って大声で遊んだっけ。

「あーした天気になあれ！」

公園で同じことをしている子どもを見つけた。

でも、その運動靴ではいつも晴れね。

下駄は鼻緒がしなびて来るから、雨にも晴れにもどっちに転ぶかわからなかった。

だから、楽しかったのに。



それでも懐かしい。私もやってみよう。

スニーカーをつま先で履き、放ってみる。横になるスニーカー。

「あら、くもり」

子どもが嬉しそうに寄って来る。

「おばちゃん、僕とやろう」

声を合わせてせーの。

「あーした天気になあれ！」

明日は晴れです。

上を向いた二人の靴に夕日が赤く染まっていた。

## 一枚の写真

スリの三郎と言えばちよつと名が知れた男だった。

地下鉄の中であちらこちらと被害が出て、現場を捕まえられたことがない。

終電は狙い目だ。

今日はビアガーデンにもってこいの晴れの日だった。

しかも、ナイターの野球やサッカーもあつたらしい。若者が街にあふれていた。

こんな時に若者はスリにとって危険なだけ。近寄らないことにしている。

金はないし、動作は機敏だし、追いかけられたらすぐに捕まってしまう。

そこで、狙いをつけるのは酔いつぶれた中年男性か、金のありそうな女性に限る。

だが、最近は中年男性も酔いつぶれるほど飲んでくれない。

中には三郎より小遣いが少ないサラリーマンも多いみたいだ。

「ケチな時代になったもんだよ」

そう呟きながら、先程から女の二人連れに目星をつけていた。一人は五十代くらい、もう一人はその母親だろうか。田舎から出てきたのだろう、ポストンバッグを手に持ち、土産の紙袋とさらに肩からシヨルダーバッグ。スリにとっては嬉しい二人連れ。

こういう二人は金がある。服も旅行に行くために買ったみたいだし、カードより現金を持ち歩くタイプだ。まして、持ち慣れていないシヨルダーは先程からずり落ちて来ている。もう疲れが出てきたに違いない。

さりげなく後ろに立つ。そう、酔った男たちは席を譲らず寝ている。二人は立っているが、もう眠そうな表情。

母親はしっかりとカバンを斜めにかけているが、五十代の娘は肩

から無造作にシヨルダーを掛けている。網棚にはボストンを置けばいいのに、疲れている時は置くことも面倒なようだ。

右手に新聞を持ち少し広げて周囲の目から女のシヨルダーを隠す。電車が揺れているから、シヨルダーのファスナーが嬉しいことにならないじゃないか。そうマグネツトボタンだけだ。

少し開くと手探りで分かる。

財布は札が入っている感じた。これは十万はあるだろう。新聞に隠しながら次の駅で降りる。

二人は相変わらず気付いていない。

駅のトイレに颯爽と入る。

今日は楽な仕事だったなどと、トイレで財布を開けてみる。

中には確かに八万六千円と小銭が少し入っていた。カード入れのところには写真があった。

普段はすぐに捨てるのに、今日はあんまり簡単に手に入れたものだから、ついついゆっくり覗いてみた。写真には母と可愛い少女と一歳くらいの弟なのか、もうずいぶん古い写真のようだ。今は滅多に見ない名刺サイズの大きさの写真だ。裏を見ると長女頼子、長男三郎って書いてある。

心臓が止まりそうだった。

三郎と言う名はありふれているし、自分は父親としか住んでいなかった。母親の写真も見たことがない。どれほど会いたいと思ったか。だが、父親はスリ以外は教えてくれなかった。中学生になると学校では絶対にやらなかったが、外では仕事として父親より上手になった。

そんなどうしようもない父親は、ある日、電車でスリを働いて見つけたり、怒った男に駅で殴られてホームから転落した。四十男のあつけない死だった。

あの人があつとしたら母親か、それに姉なのか。写真をじっと見ても赤ん坊の写真は自分に似ているかどうか分からないが、母親の顔は自分に似ているような気がした。

今更戻っても、あの人たちがどこに行ったかは分からない。財布を捨てることもできず、ポケットに入れた。

いつもなら酒屋でウイスキーを買うのだが、今日はその金を使わずに自動販売機でビールを二本買った。

心は重く、アパートの階段を上がって部屋に入ると、もう一度財布を開けてみた。

中には銀行のカードが一枚、スーパーのカードが二枚、保険のカードまである。名前は山中頼子とある。結婚しているのだろう。三郎は勝手に想像していた。幸せな家族。母親を連れて旅行に来たのだと。スリを教えてもらった自分の人生と幸せな生活をした姉と母を比べると許せなかった。

だが、たやすく盗んだ財布が、自分の姉と思うと情けなくてたまらなかった。

写真をずつと持っているということは、自分のことを思い出していたのかと涙がこぼれてきた。

返さないと、いや、もう一度正面から会いたい。

住所の書かれた保険証を見つめる。

立派な仕事を持つてるんだ。

「盗みました、弟です」とは死んでも言えない。

でも母親には聞いてみたい、なぜ息子を手放したのかと。

母さんに育ててほしかった。

その頃、二人は警察に話していた。

「多分電車の中だと思つのですが」

「死んだ息子の写真があるんです」

「亡くなった息子さんですか」

「ええ、三歳の時に川に落ちて」

三郎は今までこんなこと考えたこともなかったのに、姉が、母が  
いるのだと思い込んでいた。

まともな仕事が見つかって、金が貯まったら会いに行こうと。

だが、四十九歳の三郎にはそんな仕事はなかなか無く、ついさま  
たスリをした。

捕まった三郎の部屋からはあの財布が丸ごと残されていた。

馴染の刑事はこう言った。

「どうしたよ、無様な捕まり方をして」

「ああ、もう潮時さ。今からはムシヨで仕事を覚えるのさ。財布は  
返してやってくれ」

「お前に言われなくても返すさ」

「そうだな」

照れたように笑いながら三郎は決めていた。

まともな人間になるよ。

でも、安心してくれ。

会いに行ったりしないよ。



## 今日は花を飾りましょう

駅の改札口を少し急ぎ足で歩く親子連れ。

「さあ、<sup>まて</sup>勝手を繋いで行こう」  
それには答えず、手を振りほどく。

少年は小学校高学年に見えた。

父親の呼び掛けには答えず、一人でホームに降りて行く。  
少年はブツブツ呟きながら、目を合わせようとはしない。  
電車に乗ると、少年は吊革の広告を指さして読み始めた。

田村節子は気付いていた。

この子は自閉的傾向があるんだと。

節子は小学校を定年退職していた。今は小学校の相談室でカウンセラーとして働いている。

人手が足りないので声が掛かったのだ。

現役の時彼女は支援学級の子どもたちを受け入れることも多かった。

彼らは急に決められたりするとパニックを起こすこともあるが、順序立てて計画に沿っていけば、集団の中でも過ごすことはできる。父親は仕事上母親任せになる人が多い。今日の彼もきつと普段は母親と一緒に通っているのだろう。父親と通う通学路はきつとどこか違うので、彼は戸惑っているように思われた。

父親は周囲の目を気にしているのか、吊革の広告を呟いている彼に静かにと、声を掛ける。

だが、勝と呼ばれた彼は、制止するとますます声を大きくするのだった。

首を左右に振り、落ち着かない様子で広告名を連呼する彼に、周囲はじろじろと彼を咎めるように見つめる。老人の男性がいかにも躡が悪いというように、父親を睨みつける。

父親は気の毒なくらい体を小さくして、息子の近くに行くのだが、

息子は体を触られるのを嫌がって避ける。

それを見ていた節子は、バッグのポケットから絵カードを出した。  
一枚に電車が描かれていた。

「電車」

勝は嬉しそうに近寄ってきた。手を出してそのカードを取る。

多分母親ともカードで学習しているに違いない。勝の反応は節子が考えていた通りだった。父親は頭を下げながらすみませんと言った。節子は父親に話した。

「いいえ、この絵カードで学習してるんじゃないかしらと思って」

「そうです、家では順番をカードを決めて貼ってます」

「お母さんですか」

「はい、家内がインフルエンザになってしまつて、急遽私が連れて行くことになつたら何だか勝手が違うようで落ち着きません」

「そうよね、でも大丈夫ですよ。このカードは乗り物、こつちが学習用具と科目が描かれているから、使つて下さいな」

「でも、仕事の道具なんでしょう」

「ええ、予備がありますから。それにこれは私物ですから持つていてください」

「ありがとうございます」

勝は今日の科目を呟いている。

「さんすう、こくご、ずこう」

「そうなの、今日は算数があるのね」

「一時間目だ」

目を合わさないけど、話が繋がっている。父親はホツとした様子で勝を見つめている。先程から睨んでいた老人は、勝のことが分かつて来たようで、咳払いしながらばつが悪そうに下りて行った。

「お父さん、肩の力を抜いてください」

「ああ、恥ずかしい限りです。妻にまかせつきりなので」

「いえいえ、大変でしょう」

「家ではもう私もどうすればいいか分かるんですが、外へ行く時は



妻が基本でして」

「あら、助けてあげてくださいね。奥様を」

「はい。どうもすみません」

「私に謝る必要はありませんよ」

そう言うのと、二人は顔を見合わせて楽しそうに笑った。勝はカードの算数の絵がコンパスと三角定規だったので、それが気になって  
いるようだった。

一駅前になると、勝はもう入り口前で構えていた。いつもそうしているのだろう。

父親は勝の横に立った。

「どうも失礼します」

「はい、いってらっしゃい」

手を振ると、勝は節子の顔を見ないで手を振って返した。

父親はそつと「顔を見てあいさつしなさい」と耳打ちした。

「さようなら」

節子に向かって大きな声で挨拶する勝。

父親は嬉しそうに頭を撫でた。

節子も少し照れながら大きな声で返事をした。

「さようなら」

父親は乗った時よりも勝に優しく声を掛けているようだった。

節子は後ろ姿を見送りながら、今日のスケジュールを思い出していた。  
いた。

一番は難聴のお子さんのお母さんだった。

もっと寄り添って話を聴かせていただこうと思った。

母親や父親はみんな一生懸命子育てしている。

初めての経験に戸惑いながら、世間の目にどぎまぎしながら暮らしている人のなんと多いことか。

何ができる、いや何もできやしない、ただ、話を聴かせていただいで、その時間は固くなった心と体をほぐし軽くなって帰ってほしい。

節子は駅前の花屋に寄ってから行こうと決めた。

## カラスは悪い奴

「金輪際あなたとは暮らさないの」

鍵を閉めて家を出る。

始発電車の中は人が少なく、ゆったり座ることができるはず。

私、とても疲れているの。

私の生活は、地下鉄で仕事場と家とを往復するだけだった。

いつもいつも、あなたから殴られた傷を隠すようにして長袖、ハイネックを着ていた。

顔を殴らなかつたのが唯一の救い。

和夫は前からこうだったわけではない。

二年前、私に同窓会の知らせが来て出かけた帰り、初めて終電間に合わなかつた。楽しかつたし何より懐かしくて、女友だちの家に泊まつた。

和夫とは付き合っていたが、まだ同棲もしてなかつたし、気遣うメールも優しさからくるものだと思っていた。ところが、翌日から和夫の雰囲気が変わって来た。

「一体、どれほど心配を掛けるんだ」

「あ、しのちゃんのところ泊まつたんだ。心配した？」

「当たり前だ」

そう言うなり殴られた。

事の成り行きが分からず驚いたが、それほど心配してくれたんだという甘い考えでなぜか嬉しかった。その日の和夫は優しく、しかも激しいセックスに二十二歳の私はのめり込んだ。

「一緒に暮らそう。結婚も考えてるんだ」

そう言われて、結婚への憧れのある私は即座に快諾した。

彼が部屋に来て、折半だと思っていた部屋代は私が払うことになった。その代わり生活費を僕が払うと言ったから。

異常なまでに細かい出費の説明を求められ、こんなことならやはり別に暮らそうと言うと、激しく叩く。そして、そのあと抱きしめられる。風呂に入ってからと言っても、和夫はそのままでもいいからと体のあちらこちらを舐めまわす。

「やめてやめて」

「これほど愛しているのは僕だけだよ」

そう言いながら体を開かせられると、そうかもしれないという気持ちになってしまうのだ。

「叩かないで」

「僕がしたくてやってると思う？　これほど好きなのに心配なんだよ、結婚するんだから」

そう言って、指輪のサイズを聞くのだった。

結婚したら変わるのだろうか。

子どもが生まれたらどうなるんだろう。

だが、ブティックの店員をしている私には、カップルも店に来るみんな対等に話をし、肌を露出した服を着ているのに、女たちはどこにも傷はない。

私の胸には青いあざが二つ、太腿には黒くなった蹴りの痕が残る。ふと、恐怖心が頭をもたげてくる。

そんな気持ちが出てくると、和夫は優しく迎えに来るのだ。

店員仲間はこういうのだ。

「優しい彼で羨ましい」

「うん、いい人よ」

にこやかに返すけど、時々怖いよと誰かに話したい。

親友のしのちゃんは、暑いので着ている長袖を脱いで見せたら言葉が失った。

「どうしたのよ、このあざ、誰がしたの！」

黙っている私に、和夫に今から話してやると息巻いてくれた。

「いいのよ、私が悪いの」

「何よ、殴られるほど悪いことしてるって思ってるの？ どうしたのよ、そんなの変でしょ！」

「でも、愛されてるの」

「愛していたらこんなことしていいの？ あの人の所有物なの？」

泣きながら訴えるしのちゃんの顔を見ると、忘れていた恐怖心がよみがえってきた。

「イヤなの、殴られるのはイヤ」

「バカね！ もう早く別れなさい。それまで、私のところへ来なさい」

その言葉で出てきた。

でも、仕事場は変わらないから、すぐにバレってしまった。

「ほら、結婚指輪だよ。僕はもう嵌めているよ」

「したくないの」

「何を言ってるんだよ、僕は会社の人にみんなにもう話したんだよ」「そんな」

「君のご両親にも会って来た」

「えっ！」

「同棲してるって言ったら許してくれたよ。僕は大手の会社に勤めてるし」

「お願い、結婚はできない」

「これほど、僕が愛してるのに」

そう言つが早いか、殴りかかって来た。咄嗟に顔を隠したつもりなのに、顔面に嫌な音がした。息もできない。鼻からは大量の血。触ってみると、少し曲がっている。

「折れたの？」

「大丈夫だよ、冷やしてあげる。ごめんね。愛してるよ」  
氷をタオルで包んで、冷やす和夫。

頭の中で、何か壊れていく気がした。

シャワーで血を流そうと、和夫が服を脱がす。

乳首を吸い、へそを舐め、体を這わして行く和夫の舌。顔中の血を舐める和夫。

結婚するって？

親にも会ったって？

私の気持ちはどこにも無い。

心はどこに行ったんだろう。

足の付け根に舌が来る。

目に入ったのは誕生日にくれたハンガリー製のガラスの花瓶。

何も考えず、いきなり、和夫の頭に振り落とす。

グシャッ。

潰したような鈍い音。

崩れ落ちる和夫。

買ってきたの、電動鋸。

パーツごとに切る。

あちらこちらのゴミ集積所に捨てていく。

新聞に包んだパーツをビニール袋に入れて。

最後の一つを捨てた時に心が晴れやかになった。

さあ、始発に乗って出発よ。

駅の近くのゴミ集積所、カラスが一羽下りてきた。

追い払ってもすぐ来る悪い奴。

袋から引つ張りだしたのは、指三本。

結婚指輪を嵌めている。

始発電車で疲れて眠っちゃった。

モーニングを食べに喫茶店へ入る。

朝からテレビがついている。

「臨時ニュースです。カラスが人間の指をついばむのを、ゴミを捨てるにきた近所の方が警察に連絡したようです」





## 神様、お話があります

僕の話聞いて。

パパとママは共稼ぎだから、小学校の児童クラブに入ってたんだけど、学校からまた学校、みたいで嫌になっちゃった。

だから、三年生からは一人でお留守番をするってことにしたんだ。月曜日は近くの水泳教室に行ってるし、水曜日は図書館の科学教室がある。それに火曜と木曜はプリント学習をしに通ってる。どんだけ忙しいんだよ。つまり、月曜日から木曜日までろくに遊ぶ時間がないのに、児童クラブに入るなんてどうかしてるんだ。僕だって自由に遊びたい。

「おい、宿題はやったのか」

「早く風呂に入りなさい」

パパとママの会話は命令でしかない。そんなパパは家に帰るとパントリーで缶ビール片手にウロウロしてる。ママはママで同じように缶ビールを持ってご飯を作る、というか並べてる。大体は買った惣菜ばかりだよ。おふくろの味って、スーパ一の味と一緒だ。

でも、そんなこと言うと、ママの怒りはとめどなく広がっていくんだ。

「そんなこと言うの？ ママはこんなに忙しくても洗濯して（うちには全自动で乾燥機付き）、食事を作り（確かに味噌汁はお湯を入れてる）、あなたの宿題を見てるのよ（うん、見てるだけ）」

「それに、パパだって……」

と途中から、いかに自分が気の毒な妻かと言う話に入る。こうなると、パパもうるさいから、その怒りの矛先が自分に向かわないように、僕に追い打ちをかけてくるんだ。

「おい、さつさと食べて、明日の学校の準備をしなさい」

神様は子どもに優しいパパとママをくれるように考えてもらいたい。

これで、毎日、どんな日記が書けると言っのさ、先生も。

僕がこれこれしました、楽しかったですだけ書くと、先生はこう言うんだ。

「あのね、この時はあなたはどう思ったの？ 楽しかったことの中身を書かないと分からないでしょう」

先生、僕は何が楽しいって、たっぷりのゲームをやりたい放題することや、帰りの時間を気にしないで友だちと遊ぶこと、他にはゆつくり食べて僕の話聞いてほしいだけさ。風呂だって、いちいち入って言われなくても入りたい時に入るよ。汗臭いんだから。

でも、こんなこと言うと、きつと先生は家で何かあったのねって言うだろ？ 何もなさすぎなの！

だから、僕はすこすこと日記帳を消す羽目になるんだ。

それで、やりたいなと思うことをしたことにして書いてるんだ。

今日は金曜日。

だから、友だちと家でゲームをたっぷりしたの。嬉しかったな。

そうしたら、雨が降ってきたんだ。

ママは六時半の電車で帰る。

友だちが帰った後、僕はママが傘を持って行ってないことに気付いたんだ。

地下鉄の駅まで迎えに行つてやろう。そうだ、お風呂も入れておこう。何だか喜んでくれる顔が見たくてお米も洗った。スィッチも入れておこうと。

もうできることはないかな。

乾燥機の中の洗濯物もたたんでみた。どうにかできる。学校のエプロンだったためるんだから何でもできるさ。

ここまでやってから駅に向かった。

ママの傘を持って。

六時半過ぎたのに帰つてこない。どうしたんだらう。後もう少しだけ待つて見よう。

七時になった。

パパも乗っていない。  
辺りは暗くなったよ。

地下鉄から人はたくさん降りてくるのに、なぜいないの？  
七時半になった時、僕は神様に祈った。

「意地悪なパパでもママでもいいから、どうか僕のもとに帰してください」

涙がこぼれてきて、しまいにはしゃくりあげて泣いちゃった。

「新ちゃん！ どうしたの！」

ママがびっくりして駆けつけた。

「ママ、傘を持ってき、た、ええええん」

「あら、ありがとうね。ママ、残業になったからメールしたんだけど」

ケータイを持って来るのを忘れていた。

「あれ、新太郎、ママ、どうしたの？」

「傘を持ってきたの」

「えーっ、一時間も待ったのか」

「うん」

また、泣けてきた。

その日は、僕は世界中で一番幸せな子どもだった。

僕の仕事を素晴らしいと褒めてくれたし、パパは久しぶりに抱っこしてくれた。ママは優しく頬ずりほっぺにキスしてくれた。

どんなに大変だったか、二人は僕の話をよく聞いてくれた。

「いい子を持って幸せだ」

そして、今日は土曜日。パパとママは仕事。

「確か、洗濯物もたためるね」

「ご飯も炊けるじゃないか」

「ええええええっ！」

僕の仕事が膨大になった。

神様、ご相談があります。

想像していたのと違うみたいね

ボストンバッグを下げて、地下鉄の駅に向かう。  
オープンキャンパスに行くのだ。

彼と同じ大学を目指すことになってるの。

二人で親には内緒で東京に出てきた。

飛行機はわざわざしした。これで万全なはず。

大学前で彼が待っているってメールが来た。

地下鉄の中は昼だというのに、かなりの人が乗っていて、田舎の電車とは違う。

都会の人はみんな静かに座っている。

田舎では知り合いがいると、たちまちにぎやかに話したすのに、地下鉄の中は沈黙のみ。ときどき若者のイヤホンから漏れ聞こえてくる音楽が、うるさく感じるほどだ。

今日から泊まりがけで来たオープンキャンパス。

ホテルに泊まるのも修学旅行以来だ。

しかも、彼と同じホテルを取った。ものすごい大冒険。彼とはまだキスマでしか経験がない。今日のために私は新しい下着を買い、化粧品もいい匂いのするものを母親の化粧台から小分けにして持ってきた。

あんなことやこんなことするんだろうか。

だけど、初めから積極的になったらバージンだと思われたい気もする。

でも、キスすら三カ月もかかったんだから、今日はどうなるんだろう。

痛いと嫌だな。

コンドーム付けてくれるかな。

でも、大事なことだ。

ドキドキしながら、電車に乗っていると、吊り広告が目に入る。

過激な見出しに心を奪われそうになる。

「こんな女は嫌われる！」

「セックスでこれだけは外せない！」

「一度で懲りた彼女とのセックス！」

どの本も買いたい。

どれが一番正解なのかよく読んでから実行したい。

女子高生がいつまでも広告を凝視しているなんて、慌てて眼をそらす。

地下鉄の中は私と同じような雰囲気荷物を持った女子高生や若者がいる。きつとこの人たちも大学に行くんだらうか。

その直感は当たっていた。

私と同じように大学への道を進む人の波。

都会の雰囲気そのままの人もいれば、きつともっと田舎から出てきたのねと思える人もいる。

彼はどこにいるかな。

そう思って探すと、いた！

でも、隣にいるのは田中レミ。隣のクラスのアイドルじゃないの。なぜ、ここに？ どうして彼の隣に立ってるの？

「待った？」

「ううん、田中さんと一緒だったから」

「えっ？ 飛行機も？」

すると、余裕のある笑顔でレミは言った。

「ええ、びつくりしちゃった。空港に行ったら吉河君がいるし、行く大学まで同じなんだもん。ホテルも同じ」

「えっ、ホテルも同じ？」

「そうよ。あれ、あなたも？」

「う、うん」

「同じ旅行会社なら大体同じホテルよ」

「そうなんだ」

がっかりして彼を見ると、なんだかとても楽しそう。いやだな。

「じゃ、三人で見ようよ」

と、彼が言うからますますテンションが下がって来た。私は下着までおニューにしたのよ。

と言うわけにもいかないし。

彼をはさんで三人で歩く。

美しい彼女は大学生からものすごく声を掛けられてる。

「学部の紹介します」

「クラブもどうぞ」

「部屋も決める時にはご相談を」

ありとあらゆる人が彼女に向かって突進してくるようだ。

さすがに、近くにいる私に悪いと思っただけか、ついでに私にも声を掛けるという感じだ。

「あなたもどうですか」

「そっちの彼女も」

その言い方に傷つく。

彼女が説明を聞いている間に、彼を引つ張って話を聞く。

「どうするの、今日はずっと彼女も一緒なの？」

「せっかく同じ大学を見に来たからいいかなと思って」

「えっ、そうなの？ 田中さんと合わせていたの？」

「違うよ、彼女とは今日空港で会っただけだよ」

急に悲しくなってくる。

彼にとっってはどうでもいいことなんだ。

三カ月もたつてキスだもの。

おまけの人なのね、私って。

涙がにじんできた。

私たち二人を追い掛けて彼女が走って来る。

「置いていかないで」

「そんなつもりはないよ」

彼は優しく微笑む。

そうなんだ、彼は田中さんの方がいいんだ。

私はたくさんパンフレットをつつろな表情で貰っていた。

「何だか悪いみたいね。私はお邪魔虫なのね」

田中さんがそう言った。

「そんなことないよ」

「うん、ないよ」

と言うしかないじゃない。

でも、ホントは怒鳴ってしまいたい。

「あなたは邪魔よ！」って。

学食でランチを食べることにした。海老フライランチが六百円。

安いと思うけど、学生が毎日食べるには高いなあ。学食って三百円ぐらいかと思っていた。

家からの仕送りは極力少なく、部屋だって安いアパートのつもりだし、東京まで出してくれるって言うのはこの不景気の時代にあり得ないかもしれない。

母はオープンキャンパスは見に行ってもいいって言ったけど、オープンキャンパスだけのつもりかもしれない。私はぼうっとしてそんなことを考えていた。

三人で食べていると、彼女の目がキラツとした。

「よー、来たのか」

「先輩、遅いですよ」

先輩とはバスケットクラブのエースだった一つ上の橋田英輔さん。カッコ良くてモテモテだった。この大学に来ていたのか。田中さんはサツと席を立つと私に近づいてこう言った。

「吉河君に聞いてちゃったわよ。今日は二人で逢うことにしてたのね。エッチなこと考えてるんでしょって言ったら真っ赤になったわよ」

「えっ、そんなこと」

「私のホテルが同じって言うのは嘘よ。ちょっとやきもきさせたくて。じゃ、またね」

そう言うと、橋田先輩の腕にぶら下がって行っちゃった。

残された私たちはさらに大学を闊歩して、仲良く地下鉄の駅に向



かった。

電車の中で私たちは静かに寄り添っていた。

何だか胸の鼓動が高鳴っているみたい。手が触れ合う度にドキっとする。

手を繋いで改札口を出る。

ホテルにはたくさんの受験生。

夕食がすみ、風呂に入る。

隅々まで念入りに洗う。

ノックの音。

「ねえ、部屋に入ってもいいかな」

「うん」

その後のことはしっちゃんかめっちゃんか。

初めての二人は試行錯誤、暗中模索、五里霧中……そして、初志貫徹。

天使たちよ！

昼間の地下鉄。

暇そうな学生や老人が多い。

この時間は赤ちゃんを抱いたママたちもよく乗っている。

そんな中、ベビーカーと一緒に乗ってきた女性がいた。

あまり若くはないが、初めての子どものようなようだ。

白いオーバーオールを着せた子どもはまだ一歳にはなっていないようだ。

クククとよく笑い、うつくんうつくんと話をする。

「そう、お話がしたいの」

子どもの瞳を見ながら優しく話す女性は、慈愛に満ちた表情で車内は自然とこの親子に目がいくのだ。

ちいさな紅葉のような手が、女性の顔を触ろうとする。

女性はその手に顔を近づけ、頬にキスをする。

電車が止まり、何人かが乗って来た。

同じように赤ん坊を抱いたヤンママたちも乗って来た。

左手で子どもを抱くが、右手はケータイを離さない。まだ、生後五ヶ月くらいではないかと思う。ヤンママは高く盛り上げたヘアスタイルで、目はびっくりするほどのつけ睫毛。爪の長さは四センチほどあるのではないかと思われる。

子どもは目をパチパチさせているが、ヤンママの目はケータイ画面から目を離すことはない。

後から乗って来たもう一人のくるくる縦ロールのママは、三歳ぐらいの子どもの手をつないで、一人は抱っこバンドで抱いている。

同じようにミニスカートだ。高いサンダルを履いている。

「ママ、座りたい」

「だめ、子どもは立ってるのよ」

まだ小さい子どもになかなか厳しいしつげだ。

「ひろくんは抱っこしてる」

「そう、この前まではあんたがずっと膝を使っていたんだから今は我慢よ」

すると、お年寄りの女性が席を譲ろうとした。

「おじょうちゃん、ここにお坐りなさい」

縦ロールのママは首を振ってこう答える。

「いいんです。どうぞ座っていてください。子どもは甘い顔をする  
とこれからすぐにねだるようになりますから」

車内にほづつというような見直した雰囲気広がる。

席を譲ろうとしたおばあさんは、困ったようにもう一度座りなおした。

「いいの?」

そう尋ねても、小さな女の子は頷くだけだった。

ママは娘にこう言っている。

「お礼を言いなさい。あなたを座らせてあげたいって言って下さったんだから」

「ありがとう」

そう言われて、微笑みながらおばあさんはこう言った。

「よくしつけてらっしゃるわね。えらいわ」

「いいえ、どうってことありません。母に習ったことしてるだけですから」

すると、ずっと子どもをあやしていた女性が話しかけてきた。

「私は、十五年目に授かったから、何でも子どもの望むとおりにしてしまえばいいわ」

「そうね、それはそうですね。可愛いわね、お子さん」

「ありがとうございます」

「みんな子育て頑張ってるのね」

すると、ずっとケータイをいじっていたヤンママが突然ケータイで話し始めた。

「うっそー、そうなの。飲み会? 今晚? 行きたーい。この子ども

うしよう。何とかするわ」

その会話に車内の人は眉をひそめる。

やがて、小さな子どもを連れた縦ロールママは颯爽と降りて行った。みんなには軽く会釈をして。

「今風のお母さんだからと思っただけダメね。よくお子さんをしっけているし、挨拶もきちんとしていて感心だわ」

「そうですね」

そうかと思うと、ケータイはマナーモードにと書かれた優先席にどかっと座って電話しているヤンママもいる。

「これからどちらへ」

おばあさんが尋ねると、子どもを見つめながら女性はこう答えた。

「主人の母に会いに行くところです」

「まあ、それはお喜びになるでしょう」

優先席に座ってケータイをつついていたヤンママは、やっとカバンに入れたと思うと徐に化粧を直し始めた。

子どもを膝に乗せて両手を離すものだから、周囲は心配でたまらない。

「あなた、危ないよ、落ちたらどうするんだ」

七十くらいの男性が注意すると、ヤンママはチツと舌打ちして背を向けて下りて行った。

人はそれぞれ。

母親もそれぞれ。

子どもは親を選べない。

どうぞ、天使たちが幸せでありますように。

金の財布で得たものは？

江田早苗が給料をもらって初めて買った財布。  
一万円もした。

金が知らず知らずに貯まるという広告に書いてあった財布だ。

震える手で払った。

もちろん、ブランドでもっと高いのはあるけれど、早苗にとってはこの値段は清水の舞台から飛び降りたようなものだ。

中学を卒業して初めての給料。

今時、高校は当たり前と人は言うけれど、家庭の事情があつてそうはいかないものだ。

出稼ぎしていた父親は、保険も入っていない若者の盗んだ車にはねられて死んだ。母親は生まれつき足が悪く、外での仕事はできず、着物を縫っていたが、最近は着る人も減って仕事はほとんどなかった。

早苗は成績も普通だったが、高校に行つて勉強したいというより、早くお金を稼ぐことを望んだ。先生からも再三進学の話聞いたが、その気にはなれなかった。

結局早苗はビジネスホテルの客室清掃係の職についた。

ここは社員寮もあるからということだったが、要するに古いアパートの一部屋に二万円取られた。わずか四畳半で共同のトイレと台所。仕事場は歌舞伎町の近くだから、ビジネスというより、ラブホテルと言った方がいいようなものだ。

それでも、自分が働いてもらった給料は誇らしく母親にも二万円を送ることにした。十二万円の給料から食費を二万にして、水道や電気、ガスが二万はぎりぎりだった。部屋代に二万円、さらに電話代や最低限度の小遣いを一万円。交通費で一万二千元。財布が一万円。病院にでも行くことになったら大変だ。

ぎりぎりの生活だった。

同じ年齢の女子高生たちが働いている自分より高いものをたくさん買っている現実に、あれほどがんばろうと思っていた気持ちが萎えてくるのだ。

顔を合わさないように朝帰りをする少女。

中には自分の父親くらいの年齢の人と腕を組んでやって来て、翌日も来るのだ。そして、その子の派手な服。どぎついほどの化粧。でもどんなに隠しても同じ年齢くらいだということは分かる。

地下鉄の始発に乗ると、あの朝帰りの少女に出会った。

顔を合わさないようにしていると、向こうからやって来て、隣にドンと座った。

「あんたさあ、あそこのホテルで掃除してる子だよな」

「はい」

「私とおんなじくらいの年じゃないの？」

「いくつ？」

「十六だよ」

「同じです」

「働いてるんだね」

「あなたもでしょう？」

「違うよ、私は高校生だよ」

「えっ、なんでこんなこと……」

「お金だよ。あんたもやめなよ、仕事」

人のことはほっといてという気になって返事をしなかった。

こんな、人に体を売るようなことをするなんて、そしてその人から安い仕事だと言われているようで情けなかった。

電車の中でポーチから市販の化粧落として彼女はすっぴんになっていく。

そして、逆毛を立てていた髪に櫛を通す。ストレートな髪にするのと、黒いゴムできちっと一つに束ねた。どう見ても高校生になって来た。

「これから学校ですか」

「うん、勉強は嫌いじゃないけど、だるいんだよね」

「家の人は知らないの？」

「うん、友だちと勉強してるっていうことを信じたいみたい」

「それって、気づいてること？」

「まあね、娘の持ち物に気付かない親はいないんじゃないの」

「叱らないの？」

「うん、叱られることはないね。家にいない方がホッとするみたいよ」

「そうなんだー」

「私は上原リカ、リカちゃんって呼んで」

「私は江田早苗」

「ねえ、今度遊びに行ってもいい？」

「うちに？」

「うん、ホテルはもう行きたくない」

何かあったのか、一瞬唇を噛んだリカ。

「じゃ、仕事が休みの時に。でも汚いアパートよ」

「うん、いいよ、そんなこと」

リカは紙袋に制服を突っ込んでいた。それをトイレで着替えて学校に行くらしい。

駅に着くと、仕事が終わってる早苗を連れてトイレに行く。

どんな制服か見たくて、早苗がトイレの外で待っていると、なんと眼鏡をかけてセーラー服で現れた。

「全然違う人みたい」

「そうよ、学校ではビシビシ言ってるの」

「ふーん」

リカは背筋をまっすぐにのばして歩く。早苗は追いつくのにも苦労する。

階段をドンドン駆け上がり振り向いた。

「ねえ、早苗ちゃん、今日はありがとう。帰りに寄ってもいい？」

「あ、今日？ いいよ。じゃ、駅に着くころ連絡して。迎えに行く」



そう言うと、リカはパツと目が輝き嬉しそうにケータイを見た。

「友だち、一人もないの」

リカの呟きに早苗は驚いた。

「あ、そうなの？ 私もよ」

リカは何度も振り返りながら、手を振って走って行った。

ひらひらとスカートが舞い上がるのを気にせず、走って行くのが

羨ましい気がした。

走ること、忘れてる。

勤めだすと走らないんだ。

その日、早苗はアパートで手紙を書いた。

「お母さん、私に高校生の友だちができました。

仕事はだいぶ慣れたけど、友だちがいなかったのととても嬉しいです。

これで、東京でも一人暮らしができる気がしてきました。

もらったお給料からお母さんに少しだけ送ります。

お母さんの好きなものでも買ってください。

私は財布を買いました。

お金が貯まるという金の財布です。

楽しみにしていてください。

お金がザクザク貯まるから。（笑）

早苗「

おかしいですか？

地下鉄の中吊り広告の見出しを見るのが楽しみだ。

ほら、今日は新しいのに変わってる。

「ふーん、結婚するのか、あのイケメン」

「あら、やだ、また離婚？」

「片付けのできない女性たちよか、放っておいて」

頭をグルグル回しながら、あちらこちらの広告を見る。

見出しが命よね。

買って読んだら、どうってことない記事ばかり。

でも、専業主婦には週刊誌を買って読むということはできないわね。

無駄ですもん。

この週刊誌を買って読む人はどんな人かしら。

すると、新宿で乗って来た女性が珍しく週刊誌を広げて読みだした。

年齢は私と同じ四十才くらいかしら。

しかも、結構えげつない内容の週刊誌。女性は買わないだろうなと言っ類の本。

淫乱とか、早熟とかそういう見出しがやたらと多い本だ。

しかも、グラビアを大きく広げて堂々と見だした。その写真の卑猥なこと。大股開きや僅かな布の下着をどうしたらそんなに淫らに着ると言いたくなるモデルたちよ。

でも、女性はじっと目を凝らして見続ける。しかも、記事よりもグラビア中心のようだ。

同じ女性として恥ずかしいと言いたげな老婦人が咳払いをする。

そんな思わせぶりの咳払いなど、どこ吹く風と言った感じの女性はグラビアから目を離さない。

驚いたのは、その一冊が済むと、カバンから二冊目が出て来たの

だ。やはり、ピンク以外は扱わないというものだ。

「ふーん」

そう呟いたのはその女性。

もう我慢ならないと先程の咳払いの老婦人が席を立ててその女性のところへ行った。

「あの一」

声を掛けられても女性は没頭していて気付かない。

「あなたねえ」

思わず肩をトントンと叩いた老婦人。

女性はびっくりしたように顔を上げた。

「はい？」

「こんな電車の中で、子どもも乗って来るんだからそんな本は家で読んでください」

「はあ？」

「そんな品の悪い本、恥ずかしいでしょ」

「どこが？」

「どこがって、あなたも女性でしょう？」

「まあ、一応は」

「一応って、おかしいこと言う人ね」

「どうってことない本ですよ、実物じゃないし写真ですから」

「そういう問題ではありません。こんな車内で女性蔑視の本を開くこと自体セクハラです」

「あ、そうなんですか？」

「そうですよ」

でもあまりにも堂々としてるので、老婦人もおかしいなと思ったようだ。

「あなたの仕事なんですか？」

「ええ、わかります？」

「まあ、そんな写真撮ってるの？」

「はい、もうかれこれ二十年」

「なぜ、普通の写真を撮らないんですか？」

「これは普通だと思いませんか？」

「ええ、絶対に」

すると、笑いながら女性はそうですよと呟いた。

「場所だって被らないようにしないといけないし、街角の風景にモデルを置く方が売れるんですよ」

「まあ」

「だから、条例に引っ掛かって裁判になった写真家もいるし、その見極め方が大変なんです」

「そう」

「過激で買いたくなる本にしないと、カメラマンとしては失格ですから」

「でも、もっと女性を美しく撮る写真は興味ないの？」

「あつたとしても、無名の写真家の写真集なんて売れませんから。稼がないと食べられませんし」

「そうなの。その写真の出来はどうですか？」

「いいと思っています。私としては。このモデルの胸は大きくて美しいですよ。このソフトクリームの看板の横にピッタリで」

「そうかしら」

「汚いですか？」

「汚くはないけど、もっと綺麗に撮ってほしいわ」

何だか力の入ってる老婦人は、本を手にとってあちらこちらの写真を眺め出した。

「こっちはもつと綺麗ね」

「そうですか。よかったです」

まじまじと見ると、結構モデルの表情も面白いかもしれないと老婦人は思ったようだ。

二人は並んで写真談議に花を咲かせた。

子どもたちもランドセルを背負って乗ってくるが、二人は話に夢中で写真を広げっぱなしだ。

子どもたちはひそひそと笑い突っつきあう。後から乗ってきた客たちは二人の写真の見方に眉をひそめる。

老婦人はハツと気づいて周囲を見る。

「あら、私、おるはずのところ過ぎちゃったみたい」

「そうでしたか、どうもすみません」

「いえいえ、何だかあなたの仕事と思うと真剣に見ちゃったわ。一面だけ見て判断しちゃってごめんなさい」

「いいえ、次回はご助言を参考にして撮りますから」

二人は笑いながら会釈をした。老婦人は颯爽と次の駅で降りた。

残された女性は二冊をカバンに収めると、手帳を取り出していた。忘れないうちに書きとめているようだった。

子どもたちはまだ「エッチ」といいながらふざけ合っていた。

地下鉄の中吊り広告を見ながら、どれも仕事なんだと当たり前前のごとが真剣に伝わって来た。

彼女がカバンに入れていた一眼レフを取り出したとき、恥ずかしい仕事なんてしてないんだとつくづく感じた。

今日は子どもの話を真剣に聞こう、食事も頑張って作ろうと決めた。

茄子はちょっと遠いけど八百屋が安いからそっちで買おうと思っ

た。背筋が伸びる生き方がしたい。

たまにはヒールも履こう。

お腹も引っ込めて見よう。

夕日が綺麗だな。

## サマータイム

地下鉄の駅を出ると、風が焼き鳥の匂いを漂わせる。

腹も減ってるし、今日からサマータイムなんだよ。

あまりに早い帰宅は、家族にとって迷惑などと高校生の息子と娘もほざいておった。

そうかもしれん。

こつという時は一杯飲んで帰ることにしよう。

縄暖簾の店は古くからあるが、この時間に入るのは初めてだ。

「やってる？」

「ああ、いらっしやい！ お早いですねえ」

「今日からサマータイムでねえ。七時から会社だったのでね」

「そうですか、お疲れ様です。さあ、どうぞ」

「店も開いたばかりですね」

「ええ、ニュースでサマータイムって言ってたから、少し早く開けてみようかと」

「ははは、そうか、お宅もサマータイムね」

「へえ、そうです。よかったなあ、旦那が来てくれて。開けた甲斐がありましたよ」

早速つくねと皮ねぎと生ビールを注文する。

若いバイトのお姉さんがビールを入れてくれた。冷えたジョッキに冷えた生ビール。美味くないはずがない。

「プハー、これは美味しいなあ」

「そうですか、はい、お待たせしました」

つくねと皮ねぎもできたようだ。甘辛いタレがよくしみわたりこれ又格別。

「いいねえ、こんな早い時間から飲むことができるなんて。サマータイムもいいもんだ」

「そうですねえ、でも朝が早くて大変でしたでしょう」

「いや、電車もあの時間は空いていてね。会社まで座れたのは初めてだよ。いいことづくしだな」

「それはそれは」

バイトのお姉さんは割り箸を揃え、醤油さしに醤油を注ぐ。楊枝入れの中も数があるかどうか確かめている。なかなか気配りのできる娘だ。

「よく働くね、あの子」

小さい声で言うと、店主は頷きながら話した。

「うん、あの子ね、姪でね、女房の妹の子で不登校になって高校は一年しか行ってないんだ」

「そうでしたか」

「ええ、家にばかりいるというので心配していたところ、妹が交通事故になって入院したもので、うちで働いてみないかと誘ったんです」

「はあ、なるほど」

「そうしたら、よく気もつくし、実に賢い子なんです」

手際によさもさることながら、メニューの可愛いイラストも彼女が描いたものだという。

「もう、御品書も油で汚れてたんですが、あの子がこのメニューを作ってくれて。うちの焼き鳥じゃもつたないみたいですよ」

人のいい店主は笑って、メニューを褒めてくれてるぞって、彼女に声を掛ける。

「恥ずかしそうに小さな声でありがとつございますと礼を言った。」

「うちの娘と同じくらいだなあ」

「あ、お嬢さんがいるんですか？」

「ええ、高校二年です。長男は三年で受験生です」

「あれぐらいの子は難しいんじゃないかと思って、最初はとうしようか迷ったんですよ。うちには子どももいないし」

「でも、慣れてるみたいじゃないですか」

「それは、バイトで若い子を使いますからね。それと同じようにし



ていたら、干渉しないのがいいみたいで」

「そうですか」

すると、店主は冷蔵庫のネギを皮ネギ用に切っておいてと指示する。彼女は返事を大きくすると、手を洗って冷蔵庫からネギを取り出した。一本ずつ丁寧に洗う。

言われたことは完全にこなすという。

「あの完璧なまでの様子を見ても、賢い娘さんだと思いますねえ」

「うん、だけど、人との付き合いは要領が悪くて嫌われるのかねえでも、いい子なだけだなあ」

「そうですね。人の評価なんて気にしても仕方ありません。生きやすいように生きてほしいんです」

その言葉は自分にも跳ね返ってくる言葉だった。

いつもいつも、周りを気にして働いてきた。認められるように頑張ることは必要ではあるが、それがすべてだとすると、左遷されたら立ち直れないほど落ち込む。

やっと慣れてきたんだ、この頃。庶務課は花形ではない職場だ。

だが、なくてはならないものだ。会社に行きたくない時期もあった。失敗したつもりはなかったが、営業で大きな成績を残すこともなかった。みんなより出世も遅れた。

だが、妻と生意気盛りの子ども二人、結構仲良く暮らせてる。共働きをして二〇年。

小さいながらも中古のマンションも買った。

そこそこのいい人生じゃないか、人からはそう見えなくても。

「さあ、帰るとするか」

つくねと皮ネギと生ビールを一杯、美味しかった。

千円でお釣りが来るのは嬉しい飲み代。

「ありがとうございます」

「また来るよ」

外に出ると、まだ小学生が駅前でウロウロしてる。今から塾にでも行くのか。大変なことだな、小さき戦士よ。

マンションの前で妻が笑ってる。

「あら、あなたお帰りなさい」

「何笑ってるんだよ」

「だって、パパが一杯飲んで来るって子どもたちが朝言った通りに、あなたが真つ赤な顔して帰ってくるから。大当たりだなと思って」

「それが何でおかしいんだい」

「当たったら、パパに奢ってもらおうって話はずいてるの」

「ちっ、俺をダシにして」

「いいじゃないの、ファミレスに連れて行って」

妻が腕に縋りついて来る。

「よせよ」

「いいじゃないの、夫婦なんだから」

悪い気はしないが、ほら、隣の奥さんが見てるじゃないか。

サマータイムか、いいかもしれんな。

## エンドレス

暑い構内。

殺気立つ地下鉄のエスカレーターに乗る人々。

みんな死んだような表情だ。

この頃タオルのマフラーをしている女性が多い。

日焼け防止と言うことか。

でも、見た目も暑い。

増して、この地下の中どこで日焼けするんだ。

女は襟足が勝負なんだぞ、分かっていないなあ。

男が吸いつきたくなるのは、胸じゃない、イヤ胸もいいけど、うなじ項  
だよ項。

そんなバカなことを考えてみる。

何でこんなこと考えるかって？

それは昨夜のことだった。

駅前の信号でこの暑さの中、紹の着物を着こなした女性に出会った。

これから夜のお勤めだろうか。

アップにした髪は自分でまとめているようで、大きな蝶のバレッ

タが見える。

歳は三十代後半ぐらいか。

淡いグリーンに着物に、白の帯がよく似合っている。

帯揚げと帯締が薄いオレンジで、お洒落な雰囲気漂っている。

着馴れた着物姿はしっとりした女の色香を感じさせるから不思議だ。

これから店で使うのだろうか、小さなスイカとマンゴーを持っている。

思わず見とれていた時に、後ろから思い切り突き飛ばされた。

僕は否応もなく、前に立っていた彼女に強く当たって彼女を押し出す形になってしまった。

車が走り出す道路の上に投げ出された彼女。

これほどの恐怖があるだろうか、という驚愕の表情で小さく叫び声を上げた。

急ブレーキをかけて止まる車が二台追突事故を起こした。幸い、彼女は急ブレーキを掛けた車のドアに少し当たったが、擦り傷くらいですんだ。

「なにするのよ！」

「すみません、後ろから誰かに突き飛ばされて」

「ひどいわ！」

助け起こされた彼女に、周囲の人もこう言った。

「この人も後ろからすごい勢いで突き飛ばされたんです」

「誰か、そいつを見ていませんか？」

「振り返った時はよく分からないけど、若い男の人のようだったわ」  
警察が来て取り調べが行われたが、俺も何がなんだかわからなくて突き飛ばされたとしか言いようがなかった。

彼女は美しく着ていた着物も汚されて、不機嫌ではあったが、私も被害者だと分かると頭を下げた。

「あなたがやったと思って、ごめんなさい」

「いえ、それは仕方がないです。突き飛ばされたにしろ、あなたを車道に押し出してしまって申し訳ないです」

「怖かったわ」

「本当に、心臓が止まったようでした」

「汚してしまって、高いものなんでしょう」

「仕方ないわ」

「クリーニング代金をお支払います」

「払えるかしら？」

「えっ」

「高いのよ、洗い張りは。今回はお互い様だからいいわよ。それよ

り、うちの店に寄ってください」

そう言われて断る理由もないので、彼女についていった。だって、魅力的な人だった。

そして懐かしさも感じていた。

店は小さなバーだが、洒落た店内に彼女の雰囲気がよくマッチしていた。

「じゃ、僕はここのボトルを入れます」

「あら、そう。ありがとう」

彼女はニコツと笑ってマスターに合図した。

「いらっしやませ」

「マスター、私、この人に殺されかけたのよ」

「えっ、また物騒な話ですねえ」

「違うって言いたいけどホントです。信号待ちで後ろに立っていた私突き飛ばされて、ママを押し出してしまったんです」

マスターは白髪まじりだが、白のワイシャツがよく似合う紳士だった。

「まずはビールで無事を祝いましょう」

「そうですね、乾杯」

話は楽しく、あっという間に二時間ほど過ぎた。

「私はこれで、明日は出張ですから」

「そうですか、お引き留めしてごめんなさい」

エレベーター前で彼女はこれを御縁にまた来てくださいと言った。フンフンと鼻歌を歌いながらあの信号前に来た。

だが、先程の恐怖が湧いてきて、後ろにどんな奴がくるのか気になって、忘れ物をしたふりをして最後尾に下がった。もちろん、そんなことは二度も起きはしなかった。

思い出すのは彼女の着物姿と頂の白さだった。

そして今、地下鉄の構内に電車が入って来た。

彼女の後姿が見えた。

「あ、静子さんだ」

着物が昨日と同じだ。

もうクリーニングできたのか。

傍に近寄ろうとするが、人がいつぱいで前に進めない。

この狭い構内が嫌いだ。

行ってしまうじゃないかと思った時に、悲鳴が上がった。

昨日のことがよみがえってきた。

「静子さん！」

そう呼ぶと、彼女は哀しそうな目で振り返った。

人込みの中からすうつと現れた静子さん。

「無事だったんですね」

困ったように笑う彼女。

彼女は草履を履いていない。

昨日は気付かなかったけど、足が……見、えない……のだ。

隣には白髪のマスター。

彼も靴はない。

彼女は地下鉄に身を投げて死んだ霊。

彼女は死ぬ時に愛した男を突き飛ばして自分も身を投げた。

「罪の深さで何度もこんな目に遭うの。私がいけないのだけど、恐怖が永遠に続くの」

「そんな……」

「娘を許して下さい」

「いつも悪魔が後ろから襲うの」

後れ毛を揺らしながら話す彼女、マスターは静子さんの父親。

背広のポケットに手を入れる。

昨日貰ったバーのマッチには「冥界」と書かれていた。

なぜ、名前を知っていたのか？

彼女は僕の恋人だったから。

軽い僕にはほかにも付き合ってる子がいた。

ギクツとなって足を見る。

足がないよ、僕。

## 家族の一員

東京の大学に行ったら、すぐに友だち百人できるかなって歌みたいなことになると思った。

でも、大学は広い教室で、しかもみんなもう友だちができていよう、一人でポツンとしてる奴はあまり友だちになりたい雰囲気じゃなかった。

可愛い女の子はすでに何人も声かけられて、嬉しい悲鳴をあげているようだし、それなりの人はそれなりの奴と腕を組んで歩いている。俺はごく普通の十八歳。スポーツも苦手だった。勉強も中の中。太ってはいないが、あまりファッションにも興味はない。かといってオタクでもない。

家から仕送りしてもらってるので、最低限度の生活はできるがバイトでレジャー費くらいは稼ぐ必要がある。そう思って家庭教師にと思ったが、三流大学に家庭教師の口はない。それもそうだな。

地下鉄の駅の求人情報誌を眺めていると、後ろから声を掛けられた。

「バイト探してるの？」

見たところ、俺みたいな大学生風の男が立っていた。

「ええ、まあ」

「僕も先月から始めたんだけど、君もやらない？」

「あ、でも」

「別にそんなやましいことじゃないよ」

「どんなのですか」

電車が来たので別れるつもりだったら、男も乗って来た。

老人のデイサービスみたいなものだという。

「デイサービスっていうと、介護士かなんかなら、僕資格持ってません」

「いいの、資格はいらないんだ。あくまでもサービスだから」



胡散臭そうな匂いがして、早く下りたかった。

男は年齢は二十歳くらいに見えるが、口は達者だった。いつの間にか話を聞いてしまうそんなタイプだった。

「あのね、今から僕が行くので見るだけ見てみない？」

「でも、大学が」

「いいよ、一回ぐらい休んでも大丈夫だろう？ 君真面目そうだし」

「はあ」

断れない弱い自分が嫌いだ。でも、どことなくそのバイトに興味もある。

「あなたはどこでバイトを紹介されたんですか」

「僕は地下鉄の駅」

「あ、そうですか」

「でも、やってみるといいんだな、老人の話し相手なんだよ。僕みたいな田舎育ちにはもってこいなんだ」

田舎育ちと言う言葉に引かれる。自分にもできるかもしれない。老人の話し相手なら。

新宿三丁目で下りた。ここはそんな老人がいるような住宅街じゃないけど。そう思ったが、裏にはあるのかもしれないと思った。

「ここは住宅街じゃないですね」

「ああ、でもこのビルのオーナーたちはみんな後期高齢者さ」

「はあ、そうなんですか」

一階がマンガ喫茶で、二階はマージャン倶楽部、三階にその男が働いている健康倶楽部というのがあった。

ドアを開けると、老人が六人ほどいる。ものすごい派手な衣装に身を包み、つけ睫毛で目が開かないんじゃないかと思うほどのおばあさんが三人、おじいさんはスターの定番のような金系のモールがついた軍服にサーベルまでついている。

「お帰りなさい」

「えっ？」

ここではそう言うらしい。まるで、言葉は秋葉原のメイド喫茶の

ような雰囲気だが、いるのは老人ばかり。

男は一人の派手なつけ髭毛の縦ロールのウィッグをつけたおばあさんの元へ行った。

「ただいま、周二だよ」

「お帰りなさい。遅かったわね」

額にキスをする男。

びっくりして声も出ない。

「この子も帰って来たんだ。名前は？」

俺に向かつてそう聞いてきたから、思わず卓也つて答えた。

「卓也、おじいちゃんに今日の話を聞かせてもらってよ」

すると、軍服を着たおじいさんが難しい顔をしながら話し始めた。

「ここに座りなさい、卓也」

呼ばれたから座らないといけない気がした。

「大本営の発表ではね」

そこから延々と続く日本の真珠湾攻撃の話。

初めてだし、俺にとっては面白い話だった。目を輝かせて聞くも

のだから、おじいさんは気持ちもこみ上げてくるようだ。

あつという間に一時間が過ぎ、奥から計算書を持った中年女性がやってきた。

「お茶の時間です。皆様、一度ここでお孫さんたちにお小遣いを上げてください」

みんな財布から一万円札を出すと、隣に座ってる偽の孫たちに払うのだ。おじいさんは俺に渡す時にこう言った。

「母さんにも少しはあげなさい。勉強はしてるか？」

「はい、やっています。おじいちゃん」

そう言つと、満足そうにほほ笑んでお茶を飲む。そして、さらに一時間話を聞く。二時間で一万円というめちゃくちゃ高率のバイト。偽家族たちが和気あいあいなのだ。

二時間過ぎると、老人たちは楽しそうな表情で帰って行く。

「ちょっと出かけてくるよ」

「はい、おじいちゃん、待ってるわ」

中年女性はそう言いながら、みんなと握手を交わす。

もらったお金を三割渡してと言われて、残りは七千円。それでもコンビニや家庭教師よりいいバイトだ。

「周二君、いい子を紹介してくれてありがとう」

「はい、いいでしょう、優しい子はナンバーワンになれるからね」  
経営者がこの中年女性。元はマンガ喫茶やこの界隈の怪しげなサロンで働いていたが、ときどきやって来る老人たちは結局話を聞いてほしいのだとわかったという。確かに金は持つてるし、無理のない範囲と言つとこの値段だという。かなりぼったくりだと思つのだが、この界隈の元経営者たちだから、小遣いには困つてないのだという。しかも指名料も付くようになるかとさらに高くなるって。

帰り道、周二はこう言つた。

「いいバイトだろう?」

「うん、ありがとう」

「でも、なんで声を掛けてくれたの?」

「卓也つて田舎から出てきたって感じだもん。悪いけど悪い意味じゃないよ」

「あ、そうか」

ちよつとがっかりしたけど、そうかもしれない。

「ねえ、明日も行く?」

「明日は三時からだよ」

「いつも時間違うの?」

「ああ、ときどき変えるのさ。昨日は十三回忌だったとか理由をつけると何だか本当の家族の一員という気になるらしい」

「ふーん、すごいな」

一日に七回開いているそうだ。衣装は着たいものを着せる。花嫁衣装まであるって。

家族は老人の話を聞かない。代わりに俺たちが孫になって聞く。

何だか阿漕なことをしてる気になってたけど、もうちょっとやってみてもいいかなと思った。

家では碌に祖父の話など聞いたこともなかったのに、バイトでしてるっていうのも変だな。

今度帰ったら、金をもらわない話も聞いてみるか。

周二は俺の紹介料をもらっていた。一人五千円だった。

あれから、俺は考えることのない人間になっていった。

前よりも数段物事を考えない野郎に。

人の弱みにどんどん入り込んでいく。

金のある人の弱い部分はとても美味しい蜜の味。

周二が友人であるはずはないが、俺たちはほとんど似ていくのだ。

あんなに面白いと思って聞いたはずの老人の言葉は、今は電卓の音のように響く。

友人が欲しかったのに、今は貯まる通帳の数字が好きだ。

俺はいつのまにか声を掛けていた。

地下鉄の駅で求人情報誌を持った風采の上がない若者に。

「ねえ、デイサービスみたいなバイトあるんだけど」

## 妻の名前は栄子です

血圧が高くて薬を欠かさず飲んでる。

妻は今朝も追いかけて来て飲ませる。

最近、忘れっぽくなって困ったものだ。

地下鉄の駅に着くと、もわっとした風が吹いて来る。

ホームで風に当たるたびに、記憶が薄れていく気がするのはなぜだろう。

重い気持ちで電車に乗る。

子どもたちはそれぞれ結婚して県外に住んでいる。妻は去年早期退職した。私は定年まで頑張ろうと思う。あと少しなんだ。

会社は中堅どころの住宅建材メーカーだ。不況で随分と苦しい思いをしてきたが、最近はまだ軌道に乗れそうな雰囲気になって来た。だから、今こそ頑張らねばと思うのに、肝心な時に物忘れするのだから、駅に着く。

「部長、おはようございます」

後ろから声を掛けてきたのは木島君だ。

「あ、おはよう。暑いなあ」

「はい、昨日は節電というけど、クーラー付けちゃいました」

「うちも、風呂上がりなどは耐えられなくな。紀子がつけてってせがむんだ」

「あ、お嬢さん帰っていたんですか」

「えっ、あ、ああ」

違う、紀子は嫁いで二年。大阪にいる。ふと、今、頭に浮かんだのは中学生の紀子だった。

朝からおかしいな。

会社では設定温度が二十八度のエアコンだが、付けるのは十一時からとなっている。

「部長、おはようございます」

お茶を入れてくれるのは浜中さんだ。いつも飲みごろのいいお茶の入れ方だ。妻より美味いかもしれない。

「法事はすんだのかい」

「はい、ありがとうございます」

浜中さんはお父さんの三回忌で休んでいたのだ。

妻の作ってくれた弁当を冷たいところに置いておきましょうと、浜中さんが言ってくれた。

「顔色がすぐれないようですね。どうかなさいました？」

「いや、最近物忘れがひどくて。話し合いは昼からだったよね」

「はい」

「ああ、確か……」

メモしていたはずだ。卓上ダイアリーには午後三時と書いてある。そうだ、三時だった。何回も聞くのも恥ずかしいが、困ったものだ。

何の話をするんだっけ。

退職届と書いてる。そうだ、誰かが退職するって聞いたなあ。

「部長、これに目を通していただけますか」

こいつは村瀬、村田、どっちだったかな。眼鏡をかけてるのは村瀬だった。では村田か。

度忘れか、血圧が高いのかなあ。

書類に目を通すが、よくわからない。ただ、部長のところに押せばいいのだ。

印鑑はあるが、朱肉はどこだっけ。

「あの、朱肉はこちらに」

パソコンの後ろの小さな小抽斗の上にある。

「そうだった、朝からボケてね」

「お疲れじゃないんですか、それとも飲み過ぎですか」  
笑顔で押印するが、何を書いていたっけ。その書類。

「部長、電話です」

「はい、乾です」

電話の向こうは佐々木だ。同期の佐々木が電話をして来るなんて、どうしたんだらう。

「乾さん、今晚、久しぶりに飲みませんか」

「えっ、朝から飲み会のお誘いか」

「ええ、是非」

「じゃ、玄関で五時半に」

「了解です」

昼食になって、みんな席を立つて行く。

浜中さんがお茶を入れてくれた。

「悪いねえ」

「いいえ、部長、お弁当はこちらに」

「ありがとう」

浜中さんはお弁当を机に運んでくれた。

あれ、妻が届けてくれたのか。

「妻が持ってきたの？」

一瞬戸惑った表情だった浜中さんは頷いた。

退職したから弁当も届けてくれるようになったのか。なんで退職したんだらう。まだ働けるのに辞めるなんて。私が働いているからいいけど。大体女は考えが甘いよ。夫の稼ぎに乗っかるんだから。

昼食は二人だけだった。

「浜中さん、君はここに勤めて何年だい？」

「私はもう六年です」

「そうか、もうそんなになるのか」

「紀子さんと同じ年ですから」

「紀子はまだ大学生だよ」

「えっ、部長？ 紀子さんは結婚されましたよね」

浜中さんの声は上ずっていた。

「そうだったね」

そう言ったけど、よく分からないのだ。

頭が混乱してきた。

紀子は二女で、長女は亮子。亮子はどこへ行ったのか。嫌な汗が出てきた。

忘れることの方が増えていくようだ。しっかりせねば。午後三時になった。会議があるはずだ。

会議室に向かう。

「部長、どちらへ」

「会議室だよ」

最近、人の行動を確かめるような口調が気にいらん。何を言っただ、木島君は。

じろつと睨みつけて会議室に入った。専務たちが座っている。佐々木の顔も見えた。

「あ、どうしたんだい」

「会議が始まるんですよ」

一瞬、間が開いて専務がこう言った。

「今日は君はいいから」

「えっ？」

失礼しましたと言って出てきたが、顔から火が出そうだ。

恥ずかしさで死にそうだ。

私はこの会社にとっていつから要らない人間になったのか。

心臓が早鐘のように鳴り、何が何だかわからない。

椅子に座りこんで頭を抱えるが、何も考えられない。

いつ、失敗をしたんだ。何を間違ったのか、それさえも分からない。  
い。

浜中さんがお茶を入れてくれる。



退社時刻に佐々木が玄関にいた。

「今日はどうも恥ずかしいところを見せた」  
喉がからからだった。

「いいや、そんなこと。さあ、飲みに行こう」  
佐々木は優しくかった。

昔の新人社員の頃の話をして二人で笑った。佐々木の子どもの話やうちの娘たちの話もした。楽しかったよ。駅まで来ると、佐々木は今日は私の家まで行って飲むと言いだした。

「おい、そんなに飲むのか」

「ああ、奥さんにも会いたいし。昔から綺麗な人だったな」

「なんだよ、どうしたんだよ。酔ってるのか」

「ああ、ついていくんだ」

家まで来ると言っつきかない佐々木は目を真っ赤にしてる。電車の窓に映る佐々木の顔はまるで泣いてる子のようにだ。何かあったのか。

相談にのるよ。

駅の階段をあがると、妻がいた。

ここまで来るなんて、どうした。

「佐々木さん、どうもありがとう」

「何があるがとうだ、図々しいよ、うちでも飲むって言うんだから」

「そうです、これからお宅まで押しかけて行って飲むんです。奥さん、いいですか」

「ええ、どうぞ」

妻はエプロン姿で鼻を真っ赤にしていた。変な奴だな、また、韓国ドラマでも見ていたのか。

家には酒の肴が山ほど作ってあった。

佐々木は徹夜で飲むんだと張り切っている。

三杯までは付き合ったがもうさすがに疲れた。

「もう疲れたから寝るぞ」

私は二人を置いて寢床に行った。

喉が渴いた。水が欲しい。

「佐々木さん、ありがとうございます」

「いいえ、今まで共に働いた戦士ですから」

「あの人がこんな病気になるとは思わなかったです」

「あなたが退職されたのは彼の介護をするということですか」

「ええ、来週で乾も退職します。人事部長には話しています。佐々木さんや浜中さんには、御世話になりっぱなしで」

「実は、今日退職届を彼からもらうはずだったんですが、本人が忘れていたので、君はいいよって専務が話したら、それがショックだったようです」

「本当に全て忘れてしまっただけでしょうか」

妻の嗚咽が聞こえてくる。

佐々木のむせび泣く声も。

水を飲もうとただけだった。

妻と佐々木の話聞いた。

そうだった。

病院にも行ったのだ。

若年性アルツハイマーだと。

自分のことなのに忘れていた。  
妻が退職したのは私のためだった。

いつか、私は下の世話まで妻にさせるのか。

妻の名前は栄子です。

私の名前は乾吾朗です。

友だちは佐々木良太です。

布団の中で呟いてみた。

恐怖で体が震えて来る。

「明日、妻の名前が言えるだろうか」

## 消さないメール

朝からクラクラする。

最近、めまいがするの。

貧血だわ。

値が低いからレバーやハウレンソウを食べなさいって言われたけど、レバーは嫌い。ハウレンソウだって、そんなに食べられる物じゃない。ポパイじゃあるまいし。

地下鉄の駅で栄養ドリンクを買う。

この光景っておじさんみたい。

まだ、二十五歳なのに。

ケータイでニュースを読む。

落ち着いて新聞を読みたい。いつも父さんは新聞を読みながら、朝はゆっくりと過ごすものだと言ってたけど都会じゃ無理よ。大学から家を離れてもう七年。

この前、母さんからメールが来た。近所のなっちゃん結婚が決まったって。私にはそんな人いないのかってお父さんがうるさく言うらしい。自分で聞くことができないのよ、父さんはいつもそう。

私が高校生の時、体育祭の後の打ち上げっていうことでみんなで内田君の家に集まった。

あのとき、内田君の家は父親の仕事で家族はみんな関西へ。彼が一人だからついつい羽目を外すことになり、ビールやチューハイを飲んだ。集まったのは十二人。

少し飲むはずが、そこが子どもだった。

甘くておいしくてチューハイを二本飲んだら、気持ちが大きくなった。騒いでいるうちはよかったが、二階へ誘われてついにベッドまで行くことになった。罪悪感など微塵もなく、興味津々だった。

二人で少し眠った後、ハッと気づいたら夜中の二時。

どれほど慌てたことか。

玄関で仁王立ちしている父さん。

張り手が飛んでくると思ったら、母さんに叩かれた。

「バカ！ 心配して死にそうよ！」

そう言って父さんより母さんが泣いて怒るものだから、父さんは振り上げた拳の持つて行き場所がなくなつたみたいだった。

あのかきは泣いて謝つたけど、「母さん、あそこは父さんの出番のはずよ」と、あとで笑い話になった。私は酔いつぶれただけと話したが、二人はその話にしたいような気配だった。娘がバージンを酔っぱらって失つたなんて思いたくなかつたのだろう。

内田君とはそのあと、気まずくて付き合うこともなかった。

電車に揺られながら、なぜかそんなことを思い出した。

父さんにメールしたくなつた。

「父さん、元気？」

「どうしたんだい、元気だよ」

「夏には帰るから」

「ああ、仕事に師匠のいないようにしなさい」

また、変換ミスしてる師匠じゃないでしょ、支障よ。

でも、そんなことはどうでもいい。

くすつと笑って続きを打つ。

「父さん、今度飲みに行かない？」

「どこへ？」

「美味しいところに連れてって」

「ああ、いいよ？」

また間違えてる。「！」でしょ。なんで「？」マークなの。

何だか、小さくなった背中が緊張してメールを打つ父さんの姿が想像できる。

駅に着くと、階段を上がり、やはりクラツとする。食事に気をつけないと貧血は治りませんって先生に言われたな。

会社に向かう途中、母さんからメールが来た。

「何を父さんに言ったの？ 朝から上機嫌で鼻歌まで歌ってるわよ。」

それに高くて美味しい店を調べておけて。どういうこと？」

「一緒に飲みたいって誘ったの。初めてよ」

「はーん、それね。いつ帰ってくるの？」

「夏までは無理」

「そう、楽しみに待ってるわ。なっちゃんはウエディングドレスを作るんだって」

「ふーん」

「あなたは、そんな話ないの？」

「ない！」

これだ、いつもの家族の会話。

父さんはきつと今日は仕事でも若い人に聞いているはずだ。

美味しい店を知らないかって。

昼過ぎに会社に電話が鳴った。

母さんからだった。

「父さんが自転車にはねられた。すぐ帰ってきて」

自転車になんて、きつと骨折したか、捻挫したのねと思ったが、

一応父が交通事故ということで休暇を貰い家に帰った。夏まで待たずに飲みにいけるかもと軽く考えた。

家に入ると母さんの泣きじゃくる声。

嫌な予感。玄関には遠い親戚までが来ている。

奥に入ると、父さんは白い布を被されていた。

「どうということなの！」

膝がガクガクしてやっと布団に辿り着いた。

昼食時に出かけたら、自転車でメールを打ちながら走る少年に跳ね飛ばされたという。

父さんがひっくり返ったところに、ガードレールがありそこへ頭を強打したのだ。

泣きながら母さんが血まみれの背広をハンガーに掛けると、ポケ  
ットからメモが落ちた。

「ステーキハウスの洒落た店ポワレ。ここがいいらしい」  
父さんの字だ。

私は声を限りに泣いた。

「何で自転車なんかで死ぬのよ！」

もう会えない。

行きたかった、父さんと。

飲んでみたかった、父さんと。

ケータイに残る父さんのとぼけたメール。

「仕事に師匠はないのか」

消さないで置いておくの。

私はマスターです

喫茶ブックレット。

やっと開店にこぎつけた。

退職金を元手に始めると言った途端、妻と大喧嘩になった。

「そんな勝手な」

「だって、昔から夢だったんだ」

「それは聞いてはいたけど、まさかホントにするなんて」

妻は悠悠自適の生活になると思っていた矢先に、こんなことを言いだした私に泣いて抗議した。もちろん、娘や息子も大反対。だが、諦めなかった。

結局、店は家を改造することになった。本当はもつと人通りの多いところを希望したが、家族の猛反対で喫茶店らしいことをさせてあげるといったものだ。私の退職金なのに。なるべくコストがかからないようにと言う理由からだ。

それでも、離婚や家族離散という結果は免れた。

妻はまだ働いているから、妻の退職金を当てにしないでと言われたが。

六十三歳で新しいことを始めるのだ。

昔取った杵柄で、コーヒーはいい味が出てると思う。

そう、私は学生時代に喫茶店で働いていた。

w大学の近くの喫茶店。

私は大学に通いながら、カウンターだけの喫茶店に勤めていた。

親からの仕送りはぎりぎり、学生運動が華やかな時代だった。

あの頃は、地下鉄の構内では学生がギター片手にフォークソングを歌っていた。集会が終わると流れてくる学生が飲み屋と喫茶店に



分かれていくのだ。

飲み屋に行くのは金のある奴、ない奴は喫茶店で議論を交わす。あの頃はそれはそれで学生らしかったのだ。みんな当たり前前にアメリカを打倒せよとか、ベトナム戦争から得たものは何だったのかと、何時間も話すのだ。マスターは二時間たつとコーヒーをもう一杯飲んでよとよく言ったものだ。

マスターは優しい人だった。

戦争帰りと言っていたっけ。

詳しくは知らないが、あの頃四十代だったと思う。戦争で左足膝下から義足だった。

少し足を引きずって歩いてしたが、カウンターの中にいる限り、そんなことは誰も気づかなかった。私はコーヒーの豆かすを集めては、裏の路地に植えてる野菜の肥料にしていた。マスターは飢餓の恐ろしさについて知っているからこそ、こうやってトマトやピーマンができるとホツとすると言っていた。

「ネズミを食べたことあるんだよ」

「げっ、それはちょっと」

「極限状態になればなんでも美味しく感じるのさ。もちろん、この辺りのドブネズミと違って、野生のネズミは小さくつてすばしっこいのさ」

時たま話してくれる戦争の話は、ドンパチの話ではなく、食べ物ばかりだった。

新宿の駅で内ゲバの学生が怪我して喫茶店にくることも度々あった。

「戦争でもないのに、命を粗末にする奴なんてバカ野郎だ」

そう言いながら手当てをしていた姿は、今も脳裏に焼き付いている。

温かいコーヒーを出すと、学生たちは大体ホツとしたような表情を見せた。私は同じ学生だったが、ノンポリの代表みたいなもので、学生運動など全く興味なかった。だから、命を狙われることまです

る彼らをどこか冷たい目で見ていた。

マスターはそんな両極端の若者を優しく見つめていた。

「コーヒーは誰にでも美味しく感じる飲み物さ。だから、好きなんだ」  
この言葉に別段感心することも無かったが、この歳になって思うのはこういうマスターのいる喫茶店がいかに少ないかということだ。  
コーヒーくらいしかなかったが、いつも客がいた。

就職して二年後、マスターはある日、新聞の片隅に載った。

雨で滑った義足、地下鉄のホームから転落死。

葬儀に集まった客二百人

家庭も順風満帆でこれと言った問題もない。

だが、いつかあのマスターのような人になって、美味しいコーヒーの店を持ちたいと思っていた。会社で勤めた三十八年。仕事も頑張ったが、どこかで憧れていたあの喫茶店のマスター。

誰もが落ち着いて過ごせる空間。

家庭ではなく、一人で落ち着いて過ごせる場所。

あんな店を開きたい。

コーヒーをたてていると、妻が入って来た。

「あら、いい匂い。私にも一つ。お金払うし」

「もちろんいただきますよ」

すると、一人の学生風の男性が入って来た。

一冊の本を持って。

「ブレンドコーヒーをください」

気持ちを込めて淹れる。

その様子を妻が盗み見する。

差しだと、彼がカップを持ち一口。

「マスター、美味しいですねえ」

「ありがとうございます」

妻が嬉しそうにほほ笑んでいる。

響きのいい言葉に思わず照れる。

そうか、私もマスターなんだ。

元気ですか？

地下鉄の扉にもたれながら、ため息が出る。

家を出る時に一度で戸締りができなくなつた。

鍵を締めたかどうか不安になるのだ。もう一度戻って確かめる。

そんなことを何度となく繰り返す。

疲れがたまつて来ると、あの子のことを思い出す。

あの頃、私は三十八歳だつた。

私は六年生の担任。学級崩壊してるクラスの担任だ。

前年、このクラスを担当した教師は病気になつてしまった。あとを継いだ理科専科はついに学年末に仕事を辞めると告げた。

そんなクラスを受け持った。

私は六年生の子どもを何回か受け持ったこともあるし、どうにかなるだろうと思つていた。

このクラスの核は北光二郎だつた。暴力的で頭脳明晰。去年、都会からおばあさんとやつて来た。父親は新しい妻を迎えたが、光二郎はこの母親と全くそりが合わなかつた。

母親が何か買つと、こう呟いた。

「その金、親父の金だろう。返してこいよ」

そんなことが二度三度続くと、若い妻はこの子と私とどちらを選ぶのと言いだした。

親子喧嘩も頻繁に起こり、ついに、父親が息子ではなく妻を選ぶことにしたのだ。

光二郎は父の母親に預けられた。つまり、捨てられたのだ。祖母は若いころ、あちらこちらの劇場を束ねる興行師だつた。危ない男たちの間を渡り歩いてきたのだから、普通のおばあさんと思つたら大間違いだつた。

学校で何かあると、光二郎はすぐに電話を掛ける。

「おばあちゃん、僕のことをみんながいじめる」

十分もしないうちに祖母がやって来るのだ。

「学校でそんなことをするなら、教師も子どもも訴えるからね」

だが、彼を虐める子どもなどいるはずがない。光二郎の暴力は群を抜いていた。

顔が気に食わないと言つては、廊下の幕を取り出して太腿を思い切り執拗に叩く。赤く腫れあがっているのに、何ともないと涙を流しながらも彼をかばう。怖いのだ。

掃除の時間に外の掃除の担当になると、女子がずぶぬれになつて帰つて来た。

「何をしていたの」

驚いて問い詰めると、彼女たちはじゃんけんて負けると十秒ホースから水を掛けることを提案されたという。光二郎は自分が負けると、早口で十秒数えるが、彼女たちが負けるとのんびりと笑いながら十数えたらしい。それは下級生から聞いた。

それでも、彼女たちはへらへらと作り笑いをして、光二郎を悪く言わない。恐怖なのだ。彼に何をされるかわからない。私は不甲斐ない気持ちで家庭訪問をし、謝罪し次の家に向かう。

時には、黒板に向かって字を書いていると、突然、女の子の机に飛びあがって頬を殴る。

びっくりして止めると、光二郎は俺を笑つたんだと言いがかりをつける。

男子も女子も顔がひきつっている。自分は叩かれないでおこうとということになる。光二郎二従順な子どもたちがネズミ講のように増えていく。

体育ではバスケットボールをすると、私の体に思い切りボールを何個も当てて。自分のチームが負けてくると審判をする私が憎くなるようだ。だが、子どもたちは耳元でこう言った。

「去年の先生は顔を殴られたよ、先生にはしないからよかつたね」  
哀しい現実。とにかく光二郎の暴力から子どもたちを守るしかない

い。だが、光二郎自身、寂しいのだ。

父から捨てられたという現実。おばあさんがそっぽを向いたら行く場所すらない。

私は光二郎も連れて修学旅行に行かなければと思った。しかし、光二郎の祖母はこう言ったのだ。

「この子は修学旅行には行かせません。どうせ、この子が行けば何か悪者にされるし、私と二人で旅行は行けますから」

「北さん、お願いします。光二郎君を連れて行かせてください。みんなと一緒に楽しい思い出も作りたいんです」

「いいえ、光二郎も嫌がつてますから」

その後は話にならず、玄関から放り出される。

何度となく足を運んだが、結局彼は行かないことになった。プライドも高い光二郎は行きたくても言えなかったのだと思う。

修学旅行はとても楽しい二泊三日だった。子どもたちは恐怖の対象から外れて、心おきなく素直な子どもたちになっていた。いつもは斜め四十五度みたいな視線を投げかけるのに、甘えて触れて、おしゃべりをするのだ。男の子も女の子も本当にはしゃいでいた。

二泊三日、その後は悲惨な結果が待っていた。

行けなかった光二郎はますますキレる子どもになっていった。修学旅行の後はその旅行記や写真をまとめるという学習があるのだ。

しかし、行かなかった子どもがいるクラスでは、その学習は非常に困難だった。彼は面白くないから奇声をあげるようになり、他の子どもたちは楽しかった思い出に封をした。

表面上は落ち着いているが、光二郎の陰湿ないじめは止まることをしなかった。

その頃から、私は休み時間ごとに吐くようになった。

ついに吐くものがなくなり、血が出てきた。養護教諭は心配して、ついに校長から休むことを提案された。

「一週間だけ休むけど、帰ってくるからね」

そう言っただけ私は入院したが、現実はずっと厳しいものだった。過

労で入院のはずが、格子の付いた精神科に廻された。

怖くて誰の顔も見られない。

初め内科では燃え尽き症候群かと言われたが、精神科医はあなたは燃え尽きたわけではないと言われ、不安神経症ということだった。幼い子供もいたし、優しい夫もいるのに、家に帰りたとは思わなかった。

あの人はダメな先生よと、指を差されてる気がいつもしていた。完璧だったはずの学級経営は消えていた。たまに、外泊が許可されても、病院に帰りたかった。

夫が私を病院に連れて来るときの表情を忘れられない。

辛いのに、哀しいのに、愛しい人といたいのに、病院へ帰りたいたい。  
私。

六時半。

ラジオ体操を遊戯室で行うのだ。視線の合わない人や、ずっと歩いている患者などがいる中で、ラジオ体操をきちんとできるのは教員だった私だけ。見事に覚えてることに哀しさを感じる。

医師から病棟の周囲を三千歩は歩くように言われた。

ぼうつとしながら、何も考えない。

考えても終わりがない。

そんな生活を二カ月。

退院はしたけれど、家から出たくない生活。

子どもが怖い。大人が怖い。人が怖い。

教室で唯一の大人なのに、子どもたちを守れなかったことへの後悔、懺悔、悔しさ、哀しさ。

そしてそのままその年が過ぎた。

退職しようと思っていたのに、体が元気になるとまた勤めようかと言う気になって来る。

私は復帰したが、他の学校に異動した。

一週間で帰ると言ってしまったのに、帰れなかった自分が許せない。

期待していた子どもたちはどうなったのか。

光二郎は私が病休に入ると、ついに二学期から転校したという。

新しい学校では借りてきた猫のように大人しかつたらしい。

きつと寂しく辛かったはずなのに、支えきれなかった自分に腹が立つ。

電車には光二郎と同じ年齢になってるサラリーマンがいっぱいだ。鋭く、暗く、挑みかかるような眼をしていた光二郎。

どんな大人になったのだろう。

彼を理解する優しい人が傍にいといいのに。

疲れている日には、電車の中で彼のことを考える。



カエルよ、高く跳べ！

きらきら照りつける太陽に照らされながら、駅前の横断歩道を渡る。

電車に乗ろうと急ぐ人たち。

その中で、子どもを背中におんぶして汗びっしょりで乗り込んできた親子。

母親は三十歳ぐらいだろうか。ショートカットにして、薄化粧だった顔はもう汗で流れてしまっているようだ。コットンパンツに白の花柄のチュニック、スニーカー姿は颯爽としているが、今時珍しい昔のおんぶ紐を使っている。あの紺色の別珍のおんぶ紐。

両手には大きな荷物。紙袋には航空会社の荷札とガムテープが付いていた。

空港からモノレールで来て、今度は地下鉄に乗るのだ。  
ポストンバッグと紙袋二つ。

優先席に座っていた若い女性が、慌ててどうぞと席を譲る。

「ありがとうございます」  
荷物を棚に載せ、にこやかに頭を下げて席に着くと、一歳にはなっていないブルーのスポンに白のセーラーカラーのTシャツを着た子どもを降ろした。

ニコニコと機嫌のいい男の子だ。

母親は時折、膝を揺らしながら、子どもをあやしている。子どもは座っている人に愛想を振りまく。時には声をあげて笑う。実に可愛らしい。

座っている人や、立っている乗客も思わず微笑んでしまう。

隣の女性が声を掛ける。女性は歳は五十代半ばくらいの少し太って優しそうな女性だ。

「どこへ行くの？」

「はい、実家へ」

「すごい荷物を持って行くのね。一人で大変ね」

「ええ、主人の納骨が済んだばかりで」

「えっ？ ご主人が亡くなったの？」

「ええ、仕事場で倒れてそのまま」

「おいくつ？」

「三十二歳です」

近くにいた乗客はじろじろ見てはいけなないと思いつつも、彼女の話に引き込まれてしまった。

彼女の夫は福岡の中学校の臨時教員をしていたという。二年生の担任の他、バスケットボールクラブ、休日は練習試合などの引率。

休みはなかなか取れなかった。

元々は銀行員だったが教師になる夢を捨てられず、ついに臨時教員となった。しかし、正教員になるには試験勉強が必要だがその時間はなかなか取れなかった。それでも、教え子が可愛いと身を粉にして働いた。嬉々として働く姿は、彼女としても嬉しかったが、銀行員の時の半分の収入になり、生活は大変だった。しかも子どもが生まれてからは働くことができなくなった。保育園も順番待ちだったのだ。実家からいろいろと援助もしてもらったが、嫁ぎ先の両親は銀行を辞めた二年前から、口をきいてくれなくなったという。特に父親は自分も銀行員だったことから随分と期待していたという。夫の仕事を簡単に辞めさせると、随分と叱られたそうだ。

「夢をあきらめなさいなんて、私は言えません。若いんですもの。でも、死ぬとは思わなかった」

淡々と話すが、子どもがぐずぐず言い始めると、彼女は子どもの頭を自分のチュニツクの中にすっぽり入れて授乳し始めた。その手際の良さに驚くほどだった。きつとずっとそっやっで育てているのだろう。

「大変ねえ、いつかは分かってくれるでしょうけど。親御さんの気持ちも察するに余りあるわねえ」

「ええ、私もそう思っています」

「そのおんぶ紐は珍しいわね。私の時代のものだわ」

「ああ、これですか？ この前、隣の一人暮らしのおばあちゃんが孫の時に使ったけどどってくれたんです。あんまり私がバタバタしてるからでしょうね」

「そうなの」

「ええ、どうしようか迷ったけど、おんぶする方がずっと動きが楽なので。それにこの別珍だと息子の足が痛くないみたいで。ちよつとカツコ悪いですけど」

「そんなことないわ。昔の母親はみんなそれだったわよ」

「それに主人がいなくなつて、一人で何もかも運ばないといけないからベビーカーは却つて邪魔なんです」

微笑みながら話していたのに、急に夫のことを思い出したのか彼女はしゃくりあげて泣きだした。

聞いていた乗客はあちらこちらで目を赤くしていた。いつの間にか、メールをしていた女子学生もシュンシュン鼻をすすつてる。

隣の女性は彼女の背中を優しく撫でた。

大きく息を吸つて、自分で自分を落ち着かせるように彼女は言った。

「次の駅で母が迎えに来てくれます」

「そう、よかつたわ。私もそこで降りるの。何だか私も心配で」

「どうもすみません」

「いいえ、可愛い赤ちゃんの顔も見せてもらったわ。そうそう、私ね、折り紙教室で作ったのよ。ほら、カエル」

バッグから黄緑色の折り紙で作ったカエルを自分の手のひらに載せる。

お尻を軽く押すと、ぴよんと跳ねる。

「まあ、すごい」

「起きたらお子さんに見せてあげて」

「頂いていいんですか？」

「ええ、色紙一枚でできますから」

「ありがとうございます」

駅近くになり、彼女の背中に子どもをおんぶする。すっかり寝た子どもはとても重い。彼女の額に、引いていた汗が再びにじむ。

棚から彼女の荷物を半分持つて、女性は彼女と降りた。ホームには彼女の母親らしい人が手を振つて待つていた。

「お母さん、この方にお世話になったの」

「まあ、荷物まで持つていただいて、ありがとうございます」

何度も礼をする母親と彼女。女性は恐縮しているようだった。

母親は背中からそつと子どもを下ろすと、自分の胸にひしと抱きしめて何度も孫にキスをする。荷物を渡した女性は会釈しながら離れたが、彼女が母親に甘えるような仕草をするのでホッとしていた。きつと安心したのだろう。一人で頑張つて福岡から帰つて来たのだ。長い旅だったに違いない。

電車の窓から、話を聞いていた乗客は彼女たち親子を見つめていた。

みんなの目が優しくかった。そしてほほ笑んでいた。

女性はふと、バッグを覗いた。

バッグにはもう一枚黄緑色の色紙が残っていた。

「またカエルを折ろう。もっと跳ぶように」

そう呟いた。

**潔癖症です！**

雨が足元を濡らして腹が立つ。

いつも綺麗好きと言われるが、ホントは潔癖症なのだ。

会社でも外から帰るともちろん手洗い、うがいは欠かさない。

トイレで入る前にも手を洗うのは私だけだろう。

この症状が最近とみにひどくなったような気がする。

吊革が嫌だ。誰が触っているのかそれをじかに触るなんて。

傘の水を散らされると、どうしようもないほど拭き取りたくなる。

昔からそういうところはあつたが、最近は取引先が減って来るにつれ、上司が機嫌悪くなり辺りかまわず怒鳴るものだから、余計にこの症状が出てきた。

私は三十四歳の独身で健康な男だ。

スポーツもスイミングクラブの選手コースに小学校から高校まで所属していた。

だが、記録が伸び悩むと、同じプールにみんなと入ることができなくなってきた。

訳も分からず、不潔な感じがして来るのだ。特に汗まみれでシャワーも浴びずに入るのを見ると、もう一刻も早くプールから出たくなるのだ。

垢も浮くプールでいつまでも浸かっていることなどできなくなつた。

大学で自由気ままに過ごしている時は、そんな症状は消えていた。会社勤めになっても初めはよかったが、最近の不景気で取引先が減って来ると出て来たのだ。

今も、継続の契約を断られてきたところだった。仏頂面で地下鉄に向かっていたのだ。

すると、駅の階段で一人の女性が思い切り滑って転んだ。あろうことか、斜め前にいた私までが巻き沿いを食って下まで転んでしま

った。雨なので、背広に汚れがつきまくり、ズボンは膝が破れてしまった。シャツのそで口は茶色くなって水を吸っている。おまけにカバンは傷一つなかった革製なのに、擦り傷だらけになった。

「どうしましょう、ごめんなさい」

「っもう、気をつけてくださいよ！」

「すみません」

起き上ると、女性は私よりも気の毒だった。白いワンピースが見事に汚れ、膝はストッキングも破れてヒールは片方がブラブラしてゐる。

「大丈夫ですか？」

「ええ、体は何とか。でも結婚式に呼ばれていたのに、この格好じや。それより、申し訳ありません。あなたの背広のクリーニング代をお支払いしないと」

彼女は私と年齢は同じくらいだろうか。長い髪をアップにしてビーズのバレッタで留めていたのだろうが、そのバレッタが落ちかかって、髪は見事にくしゃくしゃになっていた。

「あ、イヤリングが」

彼女の片方のイヤリングが私のカバンの上に飛んでいる。

拾って渡すと、彼女は度々すみませんと頭を下げる。流石に、こんな人にきつく言うのは気が引ける。彼女は財布から一万円札を二枚取り出すと私に向かって差し出した。

「これで済まないかもしれませんが、カバンも傷だらけになったみたいだし」

「いえ、要りません。大丈夫です」

「そんなことおっしゃらないで。私も借りができると思います」

その言葉にカチンと来た。

「借りとは、別にあなたに貸しがあるわけではありません」

すると、女性は自分の口を押さえてすみませんと言った。

「私って一言多くて」

「とにかく、私はこれで失礼します」

気分が悪くなつて、即、この場を離れたかった。彼女はどうか  
かなんて考えもしなかった。

一週間後、帰る電車を待っていると、後ろから声を掛けられた。

「あの、あのときの方ですよね」

「は？」

彼女だった。今日は紺のシルクのセーターにベージュのパンツ。  
髪は一つに束ねている。すっきりとした耳元に銀のイヤリングと胸  
元には小さなハートのペンダント。見違えてしまった。

すつきりとした顔立ちの人なのだ。しかも黒縁の眼鏡が似合っ  
ている。

「先日はコンタクトが外れて、踏み外してしまいました。本当にご  
めんなさい」

「いえ、私の方こそ、何だか失礼しました。結婚式はどうでしたか」

「ええ、一度家に帰ったら、もう行くのを止めました」

「そうでしたか」

「ええ、何だかみすぼらしくなつて」

「素敵なワンピースが汚れてしまいましたね」

「いいえ、そんなことじゃないんです。同期で独身、彼女と二人だ  
けだったのが一人になつて。つまらないなあつて」

「そうなんですか。私も同期で独身はあと一人だけです」

「あら、何だか嬉しいです。同志つて感じで」

「そうですね。今日は金曜日ですがこれからご飯でも食べませんか」

「いいですね、私も一人じゃ侘しいですから」

「一人焼肉は寂しいのでどうですか」

「あ、賛成。大好きです」

二人で新大久保に行った。

安くておいしい店が軒並み並んでいる。

いつもは油の付きそうな店のドアを触るのが苦手だったが、自然  
と気にならなかった。

彼女はモリモリと気持ちよく食べる人だった。

少し食べては皿に残す女性とは違って、油がジュージュー散っても平気だった。

その食べっぷりを見てみると、少々なことではへこたれないように見える。

「何を見てるんですか」

「いやあ、食べっぷりが素敵だなと」

「意地悪ですね」

「いや、ほんとです。素敵です」

そう言つと、彼女はビールをお代わりした。

「今日は私の奢りです」

「いや、そんな」

「この間のお詫びをしたくて。させてください」

「わかりました。次回は私が」

「次はいつかしら」

急に嬉しくなってきた。

次はいつがいいだろうか。

ケータイの番号を聞いてもいいだろうか。

少し間が合つて、彼女はスラスラとテーブルの上の店のアンケート

ト用紙に電話番号を書いてくれた。

いつもなら、絶対に触らなかつたアンケート用紙。

私も一枚とつて彼女に書いて渡した。あの油が散ってるかもしれない鉛筆で。

「そうだ、自己紹介がまだでしたね。私は西嶋京太です」

「私は三城祥子です。よろしくお願いします」

飲んで、食べて、しゃべって、楽しかった。

あつという間に三時間。

彼女を送ると、いつもの電車なのに、吊革も平気だった。

傷だらけのカバンは、傷を気にすることが無くなって持ちやすくな

な



駅に着くとふと声が聞きたくなくなった。

今、別れたばかりなのに。

ポケットから紙を取り出して、ケータイに電話した。

「こんにちは。西嶋です。明日は空いてますか」  
彼女は笑いながらイエスと言った。

## 地下鉄の女

いい女だと思う。

多分いい女。

でも、どこがと言われるとよく分からない。

彼女は美人か？

ううん、ブスじゃないが美人だとはつきりとは言えない。

正面から見たことがないからだ。

普通の女だ。

太っているわけでもなく、かといってスタイルがいいというほどでもなく、中肉中背の普通の女。

いい加減狭い地下鉄のホーム。

彼女は本を読んでいる。

いつも真剣な顔で読んでいる。

少し周囲の状況でも見ればと思うが、一向にそういうものは興味がないらしい。

ひたすら、本を読んでいるのだ。あんまり真剣なものでどんな本なのかちょっと見てみたい。

いつものように三両目の真ん中に立っている。それを見つけて僕も彼女の後ろに立った。幸いというかなんというか、僕は身長が一八〇センチ、彼女は姉ぐらいだろつか。一五八センチぐらいか。ちよつど、後ろから覗くと、ページが読める。

だが、いくらなんでも文庫本は小さ過ぎてよく見えない。しかも、彼女に覆いかぶさるわけにもいかないし。

この暑いホームでそんな不審な態度をすると、警察に捕まってしまいそうだ。

年齢はよく分からないが、僕より二、三才下ぐらいだろつか。

流行に疎いようで、そんなに高くないような黒のスカートに普段

着風のポロシャツと色気も何もない。せめて足元はと見れば、ペタンコのサンダル。はいはい、全て合わせても一万円しないような感じだ。

トートバッグは四隅が擦り切れてる。学生時代から使ってるんじゃないだろうか。

ということは、きっとあの本も図書館あたりで借りているのだろう。それとも古本か。

ブックカバーをしているから、きっと本を大切にする人のようだ。これは僕にとってポイントが高い。しかもあのブックカバーが革製だ。

本を読まない女は嫌いだ。

いつもテレビの話や流行ばかりでは飽きてしまう。

などと考えてると、どうも僕は彼女のことを気にしているのかもしれない。

もし、彼女がえげつないエロ小説を読んでいたらどうしようか。

そんな本は似合わないと言ってやろうか。

余計な御世話だと殴られるかもしれないな。

それとも今流行りのボーイズラブやガールズラブで実際もそつちに興味があつたらどうする？

興味があるのとレスとは違うか。

本来女はいやらしいとしたもんだ。

姉貴は俺の部屋のエロ雑誌は全て目を通していたし、父親の買うピンクマンガもエッチと言う割には隠れて読破していた。

この彼女の家族もそうかもしれない。隠さず、堂々とこんなホムで読むのだ。それはあっけらかんとしていいか。

勝手に想像していると、電車が入って来た。彼女は本を閉じて乗り込んだ。いつもは、ここで開いてまた読むのに、今日はトートバッグに入れたままだ。どうしたんだろう。

彼女は髪の毛をきちっと束ねている。この暑いのに、電車の中で髪がひらひらするのはいやだ。顔にあたりたり、いくら朝シャンし

ていてもこう暑いと、電車の中でいい匂いはしない。彼女は黒のゴム紐で無造作に束ねているがそのゴムを唯一隠すのが銀の髪留め。銀縁の眼鏡はしゃれっ気がなく、それでも清潔感がある。

ずっと読み続けていたのに、なぜ、今日は車内で本を開かない。悩みでもできたのか。それとも、恋愛中か。転勤で関西から引越して今日で三カ月。

駅で会う彼女はずっと変わらなかった。雨でも台風でも読んでいたのに、今日は読まない。気になって仕方がない。

すると、突然彼女が意を決したように振り返った。

目が合ってしまった。まっすぐ見ると、どこかで見たとことがある人だ。

彼女は言った。

「あなた、荒川弘明さんですよ。本の返却日が過ぎてますよ」

「は？」

「私ね、図書館に勤めているけど、あなたが借りて行った本、もう二カ月よ」

「え？ 僕が借りた本って、君はあの図書館の人？」

「ええ、早く返して下さいね。予約が三十件も入ってるの」

「どうもすみません。それにしてもすごい記憶力ですね」

「だって、若い男性であればほどたくさん本を読む人、この三カ月うちの図書館ではあなたがダントツです」

「そうでしたか」  
「毎回十冊ずつ借りて、日曜日に借り換えするのに、花村萬月の本がまだです」

「ああ、それ、返したつもりでした。会社のロッカーにあります」

「明日の朝、ホームで渡してくださいださってもいいですよ」

「いや、届けます。必ず」

彼女はニコツと笑ったら、その歯の白いこと。えくぼも出るじゃないか。可愛いな。

胸がドキドキする。

「何を読んでいるんですか？」

「これ？ 花村萬月の『わたしの鎖骨』です」

「あ、あなたもですか？ 花村萬月」

「ええ」

それからしばらく花村萬月で盛りあがった。僕はこういう話がしたかったのだ。本の話ができる人。しかも花村萬月だったさ。

会社に着くと、ロッカーを開けた。

あつた、花村萬月の『風に舞う』。

明日と言わず、今日の帰りに寄ってみよう。

そうか、花村萬月か。

うちの姉貴も好きだったな。

おんなじか。

何だか嬉しくなった。

洋行帰りやで！

暑いなあ。

なんで日本ってこんなに暑いのだよ。

こつ言うセリフ使ってみたかったわ。

でも、やたらと重い父のスーツケース。これだけで七キロはあるし。それにいろいろと入れて出発前から十四キロ。

関空から行くこのツアーに申し込んだのは五月の話。

美沙と知里子と由美と私の四人組のはずが、人のいい知里子のお母さんが交通事故で左足首を骨折してしまつて、急遽取りやめになった。となると、女子三人組なのよねえ。

一人減つても、折角休暇も取つたし行くことになった。

気づいてたのよ、私。きつと一人になるつて。三人組つてそうでしょう？

誰かが一人になるのよ。

毎回部屋割は決めることにしていたけど、三人では無理。

こついう時に美沙はさみしがり屋のふりをするのよ。

「私、一人では寝られない。怖いもん」

嘘つき。怖いはずないでしょう？ あんた、高校時代に痴漢を殴つて鼓膜を破つた事忘れたの？

あーあ、そんなこと知つてるの私だけだし。

御堂筋線の地下鉄に乗つて出たのはいいけど、こんな朝早く乗つてるのは私とおつちゃんばかり。私はまだ二二歳なのよ。美沙も由美も関空までパパが連れていってくれるらしい。私の父は車乗れないし、母は朝から新聞配達に出た。お兄ちゃんも今年から東京で勤めてるし。結局、私一人が電車を乗り継いで関空へ行くのよ。

知里子は昨日電話をくれた。

「一人になつちゃうよ、きつと」

「ごめんね、私が行けたらよかつたんだけど」

「うん、お母さんの具合はどう？」

「暑いからギブスが可哀そう」

「そう、お母さんの代わりしてあげて」

「うん、今度は絶対行くからね」

「うん、一緒に行こうね」

こんな時に電話をしてくれるのは知里子が優しい証拠。本当は私  
が気遣ってあげないといけないのに。こういう気配りできる知里子  
が羨ましい。そうよ、行きたかったのは知里子なんだから。私が一  
人になるっていつてもたかが一週間じゃん。

そうよ、一週間もよ。

電車の中は朝からみんな居眠りしてる。

行きたかったイギリス。

テニス同好会に入っていたからウィンブルドンに憧れるかとい  
うと、そうではない。石川遼が出る全英オープンゴルフか、それも違  
う。とにかく貴族社会とやらが残るイギリスに行き、マナーハウス  
に泊まるこのツアーでお嬢様のふりをしたかった。ただ、それだけ。  
卒業旅行の時は、ほかのみんなはハワイに行った。私は卒業式の  
着物代でバイト代は消えた。みんなは親が出してくれるっていうけ  
ど、うちは無理。でも、やっぱり着物は着たかったから、バイトを  
掛け持ちでやってついに貯めた。わずか一日のために。着物を脱い  
だ時にすごく後悔した。

ただ、父がこう言った。

「よう似合ってるなあ。流石だなあ」

何が流石か分からないけど、私の顔がにやけたのは事実。両親は  
前から後ろから写真を撮りまくっていた。お兄ちゃんも笑いな  
がら、着物姿の妹をケータイの写メに残していたっけ。

関空で美沙と由美が手を振って待っていた。

「早かったのねえ」

「あんたが遅すぎ」

「二万円ぐらい両替しておかない？」

私は重いスーツケースを引きずりながら二人のあとに続く。二人は今流行りの軽い鮮やかな色のスーツケース。父の二〇年前のサムソナイトがいくらいいものだとはいえ、若い女性には重すぎるわよ。「どちらまで行かれるんですか」

銀行員に聞かれて

「イギリスまで」

この答えを言う時に、一瞬疲れが吹き飛ぶ。二人はあとは父親のカード払いで買うのだとか。私はツアー代を払った後の五万円しか残っていないカード。そう、使えるのは七万円しかない。どこまで買い物できるかなあ。二人の声はバーバリーがどうのこうのと言っている。

「佳奈」

ふと振り向くと、母がいた。

「今日は配達でしょう？」

「うん、娘さんの見送りに行って来いって、代わってくれたんよ」  
手には一万円札が二枚。

「これ、御饞別よ。好きなもの買ってきなさい」

「いいわよ、別に」

予期せぬことに鼻がツンとくる。目も赤くなってきた。

「娘が外国に行くなんて、そんな時代が来るなんて。さあ、これも」  
母のポケットから出てきたのはお守り。

「もう、恥ずかしいじゃん」

後ろで由美と美沙がこう言った。

「いいなあ、優しいお母さんだなあ」

母は照れながら、二人にも渡していた。

「みんなの分も買ってきたの」

心配症の母、恥ずかしいけど誇らしい。二人はお守りを貰って二



「ニコとバッグにつけた。」

母と別れて出国手続きをしていると、美沙が呟いた。

「昔、痴漢にあつて、殴りつけたって話、覚えてる？」

「うん」

「あのときに、佳奈のお母さんが警察に来たときに怖かったねえって抱いてくれたのよ。うちのママは何もされなかつたかつてそればっかりだったのに」

「そうだったっけ？」

「うん」

いつの間にか美沙が涙ぐんでる。おぼろげに思い出して何だか私まで泣きそうになった。

この旅行、すんごく楽しかった。

毎日、知里子と母にメールした。

お土産は母の好きな紅茶、父のブックメーカー、お兄ちゃんにはビートルズのTシャツ、知里子にはハロウズのエコバッグ。私は自分に琥珀のペンダントを買ったの。そして新聞配達所のみなさんにクッキーで全部で一万七千円。私にはこれぐらいがピッタリ。

地下鉄の駅に着くと、父が待っていた。

自転車で乗って。

スーツケースを自転車の荷台に積んでくれた。

「楽しかったか」

「うん、お土産買ってきたよ」

「そうか」

父の声は嬉しそうだ。家に着くと、母が飛び出してきた。

「いやあ、洋行帰りのお姉ちゃん、お帰り！」

私は近所の人に聞こえるからって、母の背中を押しながら家に入

つ  
た。

## うちの息子は世界一

「あのなあ、母ちゃん、話があるねん」

「なんやの」

暑い店先で息子の太一が話しかけてきた。この二〇才の息子が話があるって？

嫌な予感がするわ。

「進学せんわ」

「なんでやの。今更そんなこと言いな！ 予備校かて行ってるやないの。どうするん」

「だから、やめて働くわ」

「そんないらんわ。息子に養ってもらう気なんてまだないわ」

「違うし、俺かてそんな気ないし」

「じゃ、遊んで暮らすために予備校やめるんか」

「違うって、金貯めて留学する」

「はあ？ 何言ってるんよ、そんな留学するような家じゃないし」

「母ちゃん、今時、金持ちだけが留学する時代じゃないよ」

「そんなあほなこと言ってるんで、はよ予備校行ってきなさい」

「ちっ、折角打ち明けたのに聞く耳がないんやから、うちの家族は」

捨て台詞を残して太一は地下鉄の駅に向かった。

父ちゃんだつて太一には普通の家の子なりに、普通の仕事について、普通の人生を送ってほしいと思ってるのに、何が留学なのよ。

ああ、どこでそんな子に育ったのか知りたいわ。親の顔が見てみたい、あ、うちか。フン、ホントにもう暑いのに、何言いだすことやら。二浪しておかしくなったんやるか。そうやな、成績がいいとはいえんあの子に大学に行つて来いって言うのは、私と父ちゃんの夢やもん。

その頃、太一は考えていた。

淀屋橋で友だちの龍次を待っていた。

龍次と二人で考えてるのは特撮のメイクを学ぶ学校に行こうなと約束したんや。

ずっとずっとホントの夢はそんな映画を作る仲間の一員になろうということやった。でも、龍次も俺も親にそんなこと言ったらバカにされるとどこかで思ってた。

でも、ドキュメンタリーの番組で日本から飛び出して、今ハリウッドで活躍している人を見て、やっぱりこういう仕事をしたいと思うようになった。金にはならない。すぐには稼げない。だが、自分の力が出せるのはこういうところのような気がする。

昔から美術も得意だった。手先も器用だ。成績はごく普通だったけど、美術はいつもAだった。どんな映画を観ていても、ストーリーよりメイクの方が気になって、どうやったらあんな顔にできるのかとかそんなことばかり考えていた。

「おーい、太一」

「おう、今来たところや」

「アメリカまで行っても、部屋代とかいろいろあるし、二人で五十万は貯めないとな」

「うん、お前、いくら持つてる？」

「三万」

「俺は一万四千元」

「随分働かないといかんなあ」

「でも、二人やったらすぐや」

龍次も俺も世の中を甘く見ていると言われそうだが、若いんだから当たり前や。やる気でやれば、どうにかなるさ。

あちこちのバイトを探して結局二人で入ったのは、コンビニの夜間の勤務だった。龍次も俺も体格がいいから店長は大丈夫と思ったみたいだった。

「早速、今日からやってくれるか」

「はい、頑張ります」

二人で張り切って、何とか五十万を三カ月くらいで貯めたいな。龍次も俺も店の制服を着て、鏡で確かめる。結構似合っていると、二人で満足した。龍次は本当にできる奴なんだけど、医科大に入り直すと、現役の国立をやめて予備校に来た。俺やったらそんなことしないだろうな。代わりにその大学に行つてあげたいくらいだ。

家も代々医者だから、そんな龍次に賛成したとか。それが特撮メイクの留学なんて、どんな恐ろしい言葉が返ってくるんだろうか。龍次は金が貯まった時点で話すという。俺は母ちゃんに言ったが、完全に無視されてるようなもんだ。

メールで今日からコンビニのバイトするつて言つと、めっちゃめちゃ怒つたメールが返つて来たけど、間違い字ばかりで訳がわからん怒りの絵文字だけやな、分かるのは。

処分する前の弁当を食べてると、二人で気持ちがノリノリになる。「アバターみたいななの、やってみたいなあ」

「うん、とにかく本場はきつと違うやろうなあ」  
そんなことばかり考えてた。

店長がよろしく頼むなと言つて帰つた後、ぽつぽつ客は来ていたが、二時を過ぎると暇になった。品物の並べるのも終わつて、少し話をしていると一人の男が入つて来た。咳をしながらマスクをしている。

風邪ひいたおっちゃんや。

龍次はビデオのラベルを観て、これが欲しいなと話しかけたその時だった。

龍次の後ろからおっちゃんが何かを言いながら迫ってる。

龍次は急に怖い顔をして、俺に目で合図する。

なんだよと思つてると、龍次が様子が変だ。

レジにいる俺のところへ来て、龍次の後ろからおっちゃんは金を出せと言つた。

強盗や。

レジの下の緊急ボタンを咄嗟に押した。おっちゃんは逃げようと

して俺たち二人に背中からタックルされて、あばら骨がボキッて鳴った。

「俺を殺す気か」

警察と店長が入って来た時は、強盗のおっちゃんは肋骨が折れたと言って泣いて訴えていた。年齢は四五才。急にクビになったから、腹が減って初めての犯行やったらしい。何だか気の毒になったが、二人でおったら何でもできる気になった。

店長は喜んで金一封やと二人で美味しいもんでも食べると五千元くれた。

淀屋橋から梅田へと向かう地下鉄で、また、マスクの男がおった。俺たちは二人とも豪傑を捕まえた気持ちでいたから、その男が睨みをきかしても平気だった。ぎらぎらした目をしていても、俺たちには通用しないと思っていた。

よろよろと近づいて、俺たちにこう言った。

「何を見てさらす！」

いきなり、俺の腹を何かで刺した。痛くもないと思った瞬間、とんでもない痛みが襲ってきた。

「うわあっ！」

とめどなく流れる血。

「綺麗や」

不思議と、その赤い血がものすごく綺麗に見えた。

「映画に使いたいなあ」

龍次が止めようとその男に飛びかかると、男は俺の腹を刺したナイフを龍次に向けた。

やがて、意識が遠のいていく。

「太ーっ！ 死ぬなっ！」

どこかで龍次が叫んでる。

「そっや、その迫力ある声や、映画の主演はお前でもいいなあ」

白い布をかぶせられた息子が目の前にいる。

「なんで特撮のメイクをお前がされとるんよ」

言いながら、太一の顔を撫でる。血だらけや。

腹を刺されて血が飛び散ったのを、綺麗って眺めてたらしいな。

あほや。

でも、この子はいいい子やった。

うちらには過ぎた息子や。

でも、大学も決まらんな。それはそうよ。うちもお父ちゃんも

大学なんて行ってへん。

勉強かて大っ嫌いやった。

でも、あんたには行ってほしかったんよ。

言うセリフも決めてたん。

「うちの子、大学へ行ってますの。ホホホ」

そう言ってみたかったんよ。

バイトかて、一日しか行ってへん。

父ちゃんは警察官と話してる、というか泣き崩れて起きてられへんのよ。

ホントに大事な一人息子をラリった男に刺されるなんて。

「太一、母ちゃんをハリウッドとやらに連れて行ってくれるのと違うん？」

「目を開けてみ、ほら、太一、嘘やったって」

「太一、母ちゃんの子でよかったか？」

「太一、もう、この歳でもう一度あんたを産むことができへんねん、あんたがどんなに望んでも」

遺体安置室から、聞こえてくる声を龍次は忘れはしない。

地下鉄に乗ると、龍次はいつも身構える。

あの日以来、視線が怖くてしばらくは乗れなかった。

あれから七年。

龍次が太一の墓に来た。

「太一、俺、医者になったわ。ごめんな。助けられなくて」



## 優先席に座るのよ！

横浜の街は好きだ。

お洒落な店が立ち並び、みんながのんびりと歩いている。

そんなに東京から離れてるわけでもないのに。

田舎から高校生の妹が出てきたから連れてきた。

妹は来年大学受験。夏休みの夏期講習の合間に私のところへ来た。私は公務員を狙っている大学三年生だ。どこかの役所に入って、一生心配なく暮らしたい。父にも母にもそう言われて育ってきた。父は兼業農家。近くのセメント工場と代々受け継いできた稲作もしている。母はそんな水田の草取りだとか、稲刈りだとか、毎日祖母と一緒にまっ黒になつて働いている。

地下鉄の駅ではみんな早足で動くものだから、妹は迷子になりそうで私の服を時々掴む。

「お姉ちゃん、みんなどうして急いで歩いているの？」

「さあね、都会は時間に追われているのよ」

「こんなに人がいても、みんな働き口があるの？」

「さあ、学生も多いけど、東京は働き口も多いでしょうね」

「田舎とは違うなあ。私も東京に出てこようつと」

私はそんなことをいう妹が可愛かった。三歳離れた妹はいつも私の後を追って来る子だった。学校でも遊びに行つても。ときどきは面倒に思うこともあつたけど、妹は性格が穏やかで誰にも好かれていた。私は言いだしたら絶対に引つ込めない勝気な性格だから、学校でもバリバリ言い合った。

そのくせ、あとでイジイジと後悔する、どうしようもない性格だった。

「そんなに後悔するなら言わなければいいのに」

といつも母に叱られた。妹はそんなことはなく、人の意見をよく

聞いて応える。素直な性格だった。

妹の行きたいところは原宿と言うことだったが、私は妹が来る三日前に遊びに行ったから、原宿は人が多過ぎて横浜にしようと思手に換えたのだった。

それでも、妹はお洒落な街、横浜という私の刷り込みのっかって、横浜に連れてこられた。

「ほら、すごいでしょう」

「うん」

何がすごいかわく分らない様子だったが、妹はあちらこちらの店のウインドーショッピングに満更でもないようだった。

「お姉ちゃん、あの店、レースの店」

「うん、近澤レースって有名なのよ」

妹は友だちに見せると言って写真に撮っている。

「あのバッグの店は？」

「あれはキタムラのバッグよ」

「ふーん」

「素敵よねえ」

「うん」

可愛いブラウスの店など、いろいろと連れて行って妹に一枚買ってあげた。

白地に花柄の小さなフリルが襟元と袖口に付いている。

Gパンにもスカートにも合いそうだ。

胸に当てて何度も鏡で確かめる妹。石橋を叩いて渡るタイプ。私なら五分とかからないで決めるはずだ。

「ありがとう」

喜ぶ妹の顔を見ると楽しい。中華街で七八〇円の海老チリ定食を食べる。安くておいしい。

妹は楽しそうだが、疲れた様子も見えてきた。

私より若いのに体力不足だと言うと、こつ話しかけてきた。

「来月ね、私手術が決まったの」

突然そんな話を聞かされた。

「最近なんだか体の調子が悪くて、お母さんと病院に行ったの。そしてたら足に腫瘍ができてるって」

「えっ、なんでそんな大事なこと早く言わないのよ。お母さんも誰も私に言わなかったわよ」

「うん、私がこの旅行が終わるまで言っちゃいやだって言ったもん」「足が痛いなら、こんなに歩かなかったのに」

「歩きたいもん。お姉ちゃんがそう言うと思ったから」

私は人前で泣くような人間じゃない、でも、涙が止まらない。私が代わってあげると言いたい。できないことは分かっているが、それでも、この妹の足を切るのはやめてほしい。

「他に方法はないの」

「うん、でも義足っていいんだって」

言葉が出ない。

ひそひそ話しても、聞こえる電車。話す妹に視線が集まる気がする。

でも、妹は優先席のシールを眺めながら話をやめない。

「私、遠慮しないで今度からあの席に座るの」

みつともないほど動揺してる私は、妹の顔を見れなくなって視線を落とした。

車内は三〇人ほどいるだろうか。

妹は呟いた。

「私、もう一生分の涙を使ったから」

その話にさらに意気地の無い姉の私は涙があふれていく。

高校生のこの子に、こんな試練が来るなんて。

車内の優先席はケータイをいじる若者と足を広げた中年男性が座っている。お腹の大きい女性が入ってくると、中年男性は足を閉じた。マタニティを着た女性はよいしょと声を出して座った。

静かな車内に彼女のよっこいしょの声が微笑ましく響く。

「お姉ちゃん、ありがとうね。病院にも来てくれる？」

「うんうん」

頷く私に微笑む妹。もう我慢できない。

妹の頭を抱き寄せて泣いた。

地下鉄の中はいつも通り。

でも、車掌さんの声も優しく響く気がする。

妹が下りる時、背の高い若者がすつと手を出してくれた。

エスカレーターでは妹を優先して乗せてくれる女性。

車内の話は聞こえていたのだ。

妹はニコツとしながらありがとうを言う。

駅の外に出るのに、エレベーターを探す私。

考えたこともなかった。

階段を当たり前に上っていた私。

「大丈夫だよ」

「うんうん、これに乗ろう。私が疲れたんだから」

そう言いながら妹を乗せる。

どうして、こんな外れにエレベーターってあるんだろう。

家に帰ると疲れた妹をベッドに寝かせた。

明日は妹が帰る日。

外に出て母に電話をする。

「母さん」

声を出したそばから二人が涙で言葉が出ない。

大丈夫よ、きっと。

明日は地下鉄の優先席にあの子をしっかりと座らせよう。

そう、遠慮しないで。

## 男親はつまらんよ

今日の地下鉄は設定の温度が高過ぎるのではないか。  
私の前の男の安い整髪料が嫌な匂いだ。

大体、どうしてこの暑いのに風呂に入らないのだ！

風呂に入ってもこんなに悪臭を放っているのか！

気分が悪い。

隣の女性はカラーの匂いがたまらない。

染めるのもいいが、このアンモニアのような匂いはご免こうむる。  
きつと、昨日美容院に行つて、何度も洗つてるからいいと思つて  
いるのだろうか、やはり、その夜はもう一度洗つてほしい。匂うの  
だよ、カラーの染料が。

どうして、今日はこんなに匂いに敏感なのか。

原因は分かつてる。

娘だ。

昨夜、女房がひじきを炊いていたのだ。結構美味しい匂いだつた  
のに、娘がうつぶと口を押さえてトイレに走り込んだ。弟はすかさ  
ずこう言った。

「テレビドラマの妊娠の分かる場面だな。姉ちゃん、妊娠だね」

私は思わず噴き出したよ。ところが、女房は真つ青だった。

その瞬間、私は自分の体が震えていることに気がついた。

「お、おい、まさか」

女房に詰め寄ろうとしたとき、娘が出てきた。

怖くて真実など聞きたくない。女房は娘の肩に手を置いて声を掛  
けた。

「どうしたの。大丈夫」

「うん」

なぜ、核心をつく質問をしないのだ！ 妊娠したのかと。誰の子

だ！

娘は気持ち悪いからと二階の自分の部屋に入って行った。

弟は姉の分の唐揚げも食べるんだと、せっせと食事を始めた。

女房に聞くのは、あとにしよう。

今はこの息子には聞かせたくない。

「あなた、ビールでも飲みますか」

「ああ」

何だか無茶苦茶飲んでしまいたい。

娘は明羅あきろと名付けた。

羅針盤のように行く方向を間違わず、明るいまっすぐに進む子と

して付けた。その名の通り、娘は優秀で優しい明るい子に育った。

少なくとも未成年で妊娠など考えられない。

まだ、高校二年生なのだ。受験もあるのだ、これから。私の会社

では新入社員が四人入ったが、どの子もうちの娘と同じように勝ち

抜いてきた子ばかりだ。この子たちと同じように明羅もなるのだよ。

美味しい唐揚げもポテトサラダもひじきの煮物も、味が感じられ

ない。

「どうしたんだよ、美味しいのに。今日はみんな食欲無いんだね」

息子のご機嫌で七つも八つも食べている。

一人腹いっぱい満足になった息子は、塾へ出かけて行った。来

年高校受験なのだ。

二人になった。

「おい、明羅はどうしたんだ」

「知りません。でも、最近生理用品が減らないので、どうしたのか

聞こうと思っていた矢先だったの」

「どういことだ」

「まとめて娘と私の分をスーパーで買うでしょ？ ナプキンの量は

二人分だから半端じゃないわよ。それなのに先月と今月、減らない

の」

「そんなこと分かってるなら早く聞けよ！」

思わず怒鳴ってしまった。

「だって、あなた、先月は急になったからって学校の近くのコンビニで買ったって言ったのよ」

女房は泣き顔になっていた。

「でも、三角コーナーも空っぽなの」

悔しさからか哀しさからか、信用を裏切られたからなのか、私の拳は強く握られていた。

普段はトイレの三角コーナーも自分でたまったら処分しなさいと言ってるのに、この頃は全くたまらないと思っていた。それは娘が片付けているのかと思ったが、どうもゴミの中にそれはないようだ。というのも、三角コーナーの処分する袋は脱臭機能付きの袋だが、それも減っていないと言うのだ。

こうなったら聞くしかない。

「私が聞いてきます」

意を決したように二階へあがる女房。

下りてこない。

声を荒げることもない。

どうして冷静なのか。腹が立ってきた。

ついに二階へ行く。

扉は開いていた。

明羅は私をじっと見つめた。

何も臆することがないように見える。

むしろ神々しさすら感じるのはなぜだ。

ストレートな肩までの髪、市松人形のように前髪を眉毛まで伸ばして、すっきりとした目元は若い時の女房そっくりだ。綺麗な子なのだよ。誰よりも。

「お父さん」

「どういうことなんだ」

「お父さんに心配をかけてごめんなさい」

ああ、泣いてしまいそうだ。こんなことを聞くために育てたんじ

やない。

「五月、合唱部の練習の帰り、土砂降りになって友だちの家に寄らせてもらったの」

もついい、聞きたくない。

「服を乾かせばというから、乾かしていたのよ。その子は同性だし。そしたら、お兄さんが帰って来たの」

「ま、まさか」

「友だちはお菓子買って来るっていうから、一人だったの」

「そしたら、順さんが」

何が順さんだ！

声が震えてきて明羅は体を硬くしていた。女房は娘の肩に手を置いて抱きしめている。

「私、性教育つていろいろと知ってるつもりだった。でも、わからなかった」

兄貴の順とやらは高校三年だという。

「でも、順さんもわからないって」

くそ、なんということだ、なんということだ！

怒りが止まらない。

娘が乱暴されたんだ！ 妊娠したかもしれないのに。

土砂降りのあの日のことか。私は居酒屋で飲んでいて。新入社員に威張って話していた。女房は看護師であの日は夜勤だった。ああ、なんということだ。

訴えてやる！

「なんで、そんなことを許したんだ！」

「だって、ずっと好きだったんだもん。これ以上言いたくない！

私のことを汚いもののように見るに決まってるから！ 今のお父さん、そうだもん！」

とめどなく流れる娘の涙の顔を正視できなかった。

「とにかく、明日、病院へ行きましょう」

女房は肩を抱いてそう言った。



階下に降りてウイスキーを立て続けに飲んだ。  
飲まなきゃやってられない。

明羅が小さい頃は風呂にも入れた。

あの子の成長記録はずっとビデオで撮って来た。

アルバムだつて息子よりはるかに多い。

自慢の娘なんだ。

それがなんだつてこんなことになるんだ。

なぜ言わなかった。

言ったところで許すはずもないが。

純真無垢な娘が、どこでどう間違つてそんなふしだらな。

駅に着いた。我にかえる。

会社に行つても怒りは止まらなかったが、それ以上に仕事が大変  
だった。

会長が突然亡くなって、葬儀のことや業務のことが一度にいろいろ  
と押し寄せてきた。

一日疲れ果ててまた地下鉄に乗る。

窓ガラスに映る私の目の下に隈ができている。

私が匂うのか、女子大生がふと顔をそむける。

そう言えば、暑さの中走り回った。

この時間、匂うのは当たり前だ。加齢臭なんかじゃない。  
ケータイも開く暇がなかった。

「病院では異常なし」

女房のメールだった。

全身の力が抜けていく。

「何が異常なしだ。あるじゃないか!」

そう送ると、またすぐ返信が。

「ないのよ、その行為されてないの」

「ん？」

「要するに外で射精。あの子の心配で生理が止まっただけ」

「それでも許さん！」

そう打ちながらどこかでほっとしていた。

バカな娘。

だが、よかった。

もっと人生の選択肢を広げてやりたいのだ。

いろいろと若いうちに見せてやりたいのだ。

家庭のあれこれはまだずっとあとでいい。

子どもの心配など十年後でいい。

駅からの帰り道、どんな風に話そうか考えていた。

「ただいま」

玄関に出てきた娘。

「お帰りなさい。ごめんなさい、心配かけて」

娘と顔が合わせられない。

男親とはつまらないもんだ。

私が悪いことをしたわけではないのに、男としてどこか後ろめたい。

不安にさせたその男にも会わなきゃならん。

服を着替えていると、女房が入って来た。

「あなた、取りあえずよかったわ」

「しょうもない話だ。あの子があの子でセックスなんて」

「うん、隠れてするつもりがこんなことになったのね」

「腹が立つ」

「でも、相手も初めてでできなかったのよ」

「くそ！ 許さん！」

何であれ、男に触らせるようなことが許せん。

「私たちは高校の三年生でしたよね。合格発表の帰りに」

「何を今、言うんだ！」

「相手はあなたと同じ年だったのよ。不思議なことではないわ。大  
学生になったらみんな親元から離れるし」

「相手を知ってるのか」

「うん、前に駅の近くの書店で見かけたの。明羅と一緒にのところ。

感じのいい子でしたよ」

「何が感じがいいだ！」

頭から湯気がでそうだ。

だが、ふと思いついた。

自分の初体験。

合格が決まった喜びと二人で親元を離れて生活できるという解放  
感。

自分の部屋に誘ったのは私。

どきまぎしながらついてきた女房。

訳が分からず汗みどろになった。

思わずおかしくなって二人で笑い転げた、あの冬の日。

思わずため息が出た。

上から見ると心細げに階段で座ってる娘。

「とにかく、よく考えて行動しなさい」

それがやっとだった。

「うん」

翌日、葬儀に使う喪服を持って地下鉄に乗る。  
昨日と何が違うのか。

安い整髪料も気にならない。

暑い車内は同じなのに。

今日は何の日？

地下鉄の駅へと向かう地下道は、自分のヒールの音ばかりが響くように、何だか恥ずかしい日がある。

今日の仕事は散々だった。

契約前の確認のコールを入れたら、あっさり断られてしまった。見積もりも出して、細かく話もしてきたのに、競争相手の不動産会社で契約したって。

あの建売住宅を気にいつていたはずなのに、両親がお金を出すなら実家の近くと言われたとか。

そんなこと理由にならない気がする。きっと相手がいいサービスを提供するという条件を出したんだろうか。ああ、一軒売ることがこんなに難しいなんて。

部長も初めての契約かと期待もしてくれたのに、断られたという話から口もきいてもらえない。課長にいたっては何でそうなるんだと怒鳴られてしまった。

課長と二人で相手の家に向かったが、既に契約をしたからと玄関で追い払われてしまった。

四十代の奥様と仲良く何度も下見に行ったのに、あれは幻なのか。三週間あまり、本当に期待していた。

もう次の顧客を見つけないとは、分かってはいるが辛い。ガクツとヒールのかかとりが取れ、傾いたと思った瞬間、ホームから転がり落ちた。

特急が通過する時だった。

「わあああああ」

周囲の人の悲鳴は聞こえた。確かに聞いた。

痛くない。

なんともない。

でも、おかしい。私はホームの天井にいる。

下を見る私。

なぜ、この位置に。

体がある。

見事に潰れた私の体。

轢死の遺体はバラバラになると話には聞いていたが、こんなことになってしまうのか。

「気の毒だ」

自分の体なのにそんなバカげたことを考えていた。

傍には幾十と無数の人。

同じように私と眺めている。

「ああ、あんたは新入りだね」

「えっ、あなたは」

「みんなホームから死んだ奴ばかりだよ」

「私は死んでません。ほら、ここに」

「よく見てごらんよ、足はあるかい」

「えっ」

足先が見えない。というより、膝から下が消えている。

「なんで、死ななきゃいけないの」

「ああ、そう言う人もいるわな」

「いやよ、この若さで死ぬなんて」

話しかけた人は三十代の男性に見える。真面目そうで高級な背広を着ている。

「僕は先月ここで死んでね」

「どうして」

「酔っ払いにからまれて突き落されちゃった」

「されちゃったって、軽い話みたいですね」

そう言うと、彼は腹を抱えて笑った。泣くほど笑ったので失礼な

人だと思っただが、突然の死を受け入れるなんて誰もできないものだ。

「君は愉快だなあ」

「楽しくなんかありません」

「そうだけど。なんで落ちたの」

「あ、バランスを崩して」

「ヒールなんて履くからだよ」

今日は帰りに合コンするはずだった。友だちの紹介で銀行マンやら公務員の紹介をしてもらうはずだった。だからヒールを履いてきたのに。バカな私。

駅員が私の頭を回収してる。

やだ、首から切断されたのね。白目だわ。アイシャドーをもっと入れておけばよかった。

ホームの待っている人たちがなぜかケータイで写してる。

ついったーで呟く人もいる。

みんなどうかしてるんじゃないの。

「君もアイシャドーの心配より、家族の心配は？」

「そうね、でも兄がいるから後継ぎはいるし、私は恋人もいないし、どうってことないわ」

「冷めてるんだね」

そう、父も母も優秀な兄が大好きだった。

その兄は医大にいる。両親の自慢の息子なのだ。

無口だけど、妹に優しく、私は好きだった。

だけど、あのときから疎遠になった。

私の同級生と付き合い始めた時。

人が間違うと笑うし、泣けばそれぐらいで泣くなと怒るし。女とは思えないデリケートの無さ。

そんな人を選んだ兄貴にがっかりした。

彼女は随分と私に気を遣ったようだが、私はもう知らん顔するだけだった。あれから八年。二人はこの春結婚した。彼女は義理の姉となったわけだ。しかも私と同じ会社に就職したのだ。

ズバズバ物を言う癖は相変わらずで、会社では上司にも言いたいことを言ってしまうようだが、なぜか左遷されない。彼女は企画を立てる方へと回り、私は営業でうだつがあらぬ。

兄貴はいい奴なんだよと言うが、私は知らん顔して席を立つみたいなことをしてきた。

ふと、下を見ると、その義姉が駅にやって来た。

髪を振り乱し、泣き叫んで私の名前を呼んでいる。いつも駅に着くのは同じような時間で、それぞれが反対方向に帰るのだが、会釈する程度だった。

「えっ、あんなに悲しんでるの」

「知り合いなの？」

「義理の姉」

「ふーん」

義姉はお気に入りの服が汚れるのも気にせず、私の体を撫でている。名前を呼んでいる。頭が外れているのを見ると、絶叫しながら抱きしめた。

この違和感。

今までどうして話さなかったんだろう。

そう、あの人はいい人だと分かっていた。

隠せない人なの。

読み間違った私の朗読に噴き出しただけ。

でも、好きな人の面前だったから彼女に怒りをぶつけただけ。

新任の体育教師が甘かったからプールの授業を立て続けに休んだ。すると、彼女が率直に指摘し私はわざと泣いた。若い教師は困っている、彼女が泣くなと言った。どれも私が悪い。

会社の話だつて正論を言われて上司が困ったとしても、彼女への信頼の厚さは変わらないのだ。それも悔しかった。

今、彼女の嘆きようを見ると辛い。

私の体は病院に運ばれていく。



彼女は付き添っていくのだと言ってきかない。

病院には出張先から兄貴も両親も走ってきた。

だが、誰よりも彼女が憔悴していた。

血で汚れた彼女が縫い合わされた私の遺体に近づく。

母を支えている優しい手。兄貴は父の背中を撫でている。

「綺麗に繋がってる」

彼女が呟いた。

「ありがとう」

私はふと声を掛けた。

彼女はびっくりしたように周囲を見回す。聞こえたのかもしれない。

そして、また哀しそうに泣きだした。

「どうしたんだい」

「知らなかったなあ」

「何が」

「家族っていいもんだなって」

「うん」

地下鉄に集まっていた霊たちはどこへ行ったのか。

そっだ、今日はお盆だ。

みんな帰るのだろうか。

傍で話していたあの男性もいない。

皆さん、今日の地下鉄はたくさんの方が乗っているかもしれませ  
んよ。

お盆ですから。

## ヘアスタイル

朝から哀しい。

長い髪が綺麗だよっていうから伸ばしてきたのに、付き合ってる子はショートヘアじゃないの！

そんなのあり？

ずるいわよ、このくそ暑い時期にウール百パーセントが首にあるのよ。まとめてみたってその団子が暑い。頭から汗が滴り落ちる。

早速美容院へ電話する。

今日は仕事が休みだから、昼に行こうと松田先生を指名する。

でも、松田先生が辞めたって。

そう言えば給料が安いっていつも言ってたな。

地下鉄の駅から三十メートルほどの美容院。

年中無休だから、私のように日曜や月曜も出勤と言う人にはありがたい美容院なのに。

勤めている人は多いけれど、ほとんどが研修生。

松田先生も一番ではなくて、さらにその上の先生は三千円の指名料もかかる。

松田先生は二番手で千五百円。

すごいなあ、美容師の世界も。

でも、松田先生がいらないなら、新しい先生か。カットに指名料だとそれだけで八千円。。

まあいいわ。

遅めの朝食を取り、白のクロップドパンツにボーダー柄のTシャツを着る。足はペタンコサンダル。化粧だってほら控え目にすれば、私ってそんなにブスじゃないわよ。なんで振られるわけ？ 年齢だつて二八才よ。おばさんじゃないわ。あの彼女は二〇才だって、フン。

ブツブツ言いながら地下鉄に乗る。新宿の一つ手前で降りる。

美容院では手持無沙汰の研修生が外を掃いたり、本を並べたりとウロウロしている。全面ガラス張りの美容院には客の姿が入店する前からよく見える。

「いらつしゃいませ」

みんなが一斉にこちらを見る。もっといいカッコしてくればよかったなと少し後悔する。

「ご指名は」

「いません」

会員カードを見せる。

「では、今日は藤坂がやらせていただきます」

ふーん、どんな人？

期待もせずシャンプー台へ行く。研修生が懇切丁寧に洗ってくれる。ああ、全身洗ってほしいくらいよ。

シャンプーがすみ、鏡の前に移動すると、とんでもないイケメンが鏡の向こうに見えた。

「藤坂です」

「よろしく」

なんと言う男前なの。

まるで、映画俳優よ。

背は高く、顔は山Pみたいよ。声もいいわ。

ごく普通の黒のTシャツにGパンなのに、その足の長さと言ったら言葉が出てこない。

神様は天に二物を与え過ぎ。こういう人にまとめてあげるから、よさの無い人も出る訳よ。

話だつて楽しくてそれでいて静かだ。つまり聞き上手。

あつという間の二時間。

シヨートヘアもボーダー柄によく似合う。

藤坂先生に恋しそうよ。

「ありがとうございます」

今度から必ずこの藤坂先生を指名するわと心に決めた。

そのまま、街もブラブラしよう。原宿あたりならこの格好でいいかも。

安い竹下通りで、二千円足らずのワンピースもゲット。あれもこれもと買いたくなる。

鼻歌気分で行っていると、あの藤坂先生が自転車でスイスイと目の前を行く。

やがて、小さな喫茶店に入る。走って追いかけて私も入る。

店の中には藤坂先生と子ども、そして女が。

「ああ、なあんだ、妻帯者なのか」

どつと疲れてアイスコーヒーを頼む。

折角一瞬だけでも夢を見たのになあ。

優しい笑顔だなあ。

羨ましいなあ。奥さん。

タオルのハンカチで顔を拭いていると、目が合ってしまった。

「ああ、先程の山岸さんですね」

「あ、ああ、藤坂先生」

「髪、似合いますね。僕の思った通りだ」

「あ、どうも。奥さんですか」

「妹です、甥と。僕は独身です」

「あらー、そうでしたか」

女って哀しい。思わず声が裏返った。

タオルで化粧を拭いてしまっていたことを、激しく後悔する。

「昼休みですか」

「はい、また今から美容院へ戻ります。また来てください」

「ええ」

行きますとも！と言いたかったが堪えた。

単純？

いいのよ、単純でも何でも。

もう少し夢を見よう。

それにしても、やったー！

今度はカラーに行こうかな。  
美顔マッサージもしてもらおうかしら。

その頃、喫茶店ではあの親子が話している。

「ママ、パパはあの人とお友達なの？」

「ううん、お客さんなんですよ。今日はお土産買って来るって言うてたわよ。早く自分のお店が持てるといいけど」

「ふーん。ママのこと妹って言ったね」

地下鉄の中では若い男と女がさつきからべたべたといちゃついている。

その姿に、自分と藤坂を重ねてしまう私。

来週はカラーの予約しようっと。

どうせ、デートもないし。マッサージもしようかあ。

藤坂 護まほみか。名前もいいわねえ。家族を守る感じで。

勝手に想像している私。

妹か、あんまり似てなかったなあ。

甥はよく似ていたなあ。

血は争えないわね。

嘘つき！

地下鉄の駅から五分。小さなビルの三階に私の馴染の店がある。といつても、三十七歳の独身女性が行く店だから、赤ちようちゃんこそぶら下がっていないが、カウンターだけで、マスター夫婦がしている店だ。

「こんばんは」

「いらっしやい」

マスターが元気のいい声で応対してくれる。

奥で手を振るのがマスターの奥さん。

私と同じ年だそうだ。

マスターは嬉しそうにこう言った。

「今日はね、美味しい魚が入ってます」

「へえ、なんですか」

「ニロギ、これです」

見ると、親が探しに来そうな雰囲気の小魚だ。

「あんまり食べ応えがなさそうね」

「嫌だなあ、これが私の手にかかるらと美味しいんです！」

「そう？　じゃ、お願いするわ」

「はい、ニロギ一丁！」

少し火で炙って、二杯酢で食べるんだとか。

いい匂いだ。

その手つきを見ながら、ぼつと昨日の話を思い出していた。

昨日は私が付き合っている同じ課の田端英吾が部屋に来た。

「俺、来月に田舎へ帰る」

「帰るって、何日ぐらい？」

「ずっと」

彼は真剣な表情だった。

思えば、先月、急死した彼の父親が残したのは、猫の額ほどの田んぼと築五〇年の家だけだった。

「帰って何するの？」

「ああ、あの家を改造して民宿をやるうかと思ってる」

「未経験でそんなことできるの？」

「ああ、誰も初めはそうさ」

「一人でやるの？」

どこかで期待している自分がいる。

私を必要と言って。

「うん、母と」

今いる会社は福利厚生もしっかりしていて、この不景気の中、雇用も減らさず頑張っている会社だ。

「あなたの給料ほど、民宿で稼げるとは思えないけど」

辛辣な言葉しか出てこない。嫌な女。

「ああ、そうだな。でも、お袋がな、東京はイヤだって言うんだよ。姉のところはもう兄貴の両親と同居しているし」

「お母さんがやるって言うの？」

「うーん、料理を作るのが好きだから、田舎のレストランみたいなのをやりたいって言うんだけど、あの年齢で何人も客をさばくことはできないから、民宿にすればいいかなって」

ああ、何ということ。お母さん、それで息子を帰らせるの。

腹が立ってきた。

四十になろうかと言う息子を、会社でかなりの仕事をしてきた男を、今更田舎の民宿を手伝わせるのかと、苛立つ気持ち顔に出そうだ。

「ふーん、私は厳しいと思うけどなあ」

「分かってるよ。でも、今ならもう一度やり直せるかなと言う気もするんだ」

「何でやり直すのよ。しっかりやって来たじゃない」

私たちの関係は六年になっていた。

彼は十年前、婚約者を交通事故で亡くしてから、ずっと一人だった。婚約者も同じ会社で私と友だちだった。彼女は穏やかで愛想も良く、誰からも好かれていた。そんな彼女を好きになるのは当たり前だと思っていた。私は当時大学生のころから付き合っていた彼がいた。でも、彼は地元のお店へ入って半年、その受付嬢とできちゃった結婚することになった。

あまりのことにがっかりしたが、離れていたせいも意外とさばさばした自分がいるのに驚いた。三年間も付き合ったのに、縁がないと言っのはいこういうことかと思った。

一方、田端の婚約者は雨の夜にバス停で、アクセルとブレーキを間違えた老人の車が乗りあげてきた。即死だった。

葬儀では田端英吾が人目をはばからず泣いていた。

ウエディングドレス姿の棺の中の彼女、あまりにも綺麗で白雪姫のようだった。彼がキスすれば生まれ変わるような気まですたものだった。

あれからどこでどうなったのか、四年後にひょんなことから付き合い合うことになった。地下鉄のカードを買おうとしていたら、前に並んでいるお年寄りが百円玉をばらまいてしまっ拾ってあげていると、同じように拾っていたのが田端だった。

今まではどことなくお互いに遠慮があった。だが、その時から不思議と何でも話せる人になった。

そして、今ではこれから先もずっと一緒に歩いていくようなことを考え始めていた。少なくとも私は。それが彼はそうではなかったのか。

今までは二人とも結婚に前向きではなかった。その話をするとどこか消えてしまうのではという怖さがあった。

「ねえ、一度行ってみようかな」

「うん？」



「あなたの田舎」

「そうだな、いいところだよ。オープンが九月だ」

「そこまで決めていたの」

置いてけぼりを食らった子どものように泣けてきた。そんな大切な話を何もしてくれなかった。

慌てて彼が話しだした。

「ごめんごめん。嘘、嘘だよ。今日はエイプリルフルだよ」

「ひどい！」

「民宿は姉がやるの。嫁ぎ先の家族と一緒にすでに民宿をしているから、そこを母にも手伝ってもらおうと言いだしただけさ」

「なによ、それ！」

あつたまに来た！

笑いながら、彼は私を抱きしめてこう言った。

「でも、今度の土曜日に一緒に帰ろう」

「嫌よ、知らない！」

徐にポケットから出したのは何の飾りもないリングだった。

「これをはめてみて」

「何よ、これ」

ブカブカだ。

「サイズが合わない！」

「だろうと思った。こっちはどう？」

ポケットから四種類も出てきた。

「サイズが分からないって言ったら、これのどれかだろうって店の人が貸してくれた」

「どういうこと？」

「指輪のサイズを調べたいから、サイズリングを借りてきたの」

「なんで？」

「なんでって、買うからさ」

分かっているけど、言うことあるはずよ！ 肝心の言葉を聞いてません！

黙っていると、思わず正座をした彼が一言。

「結婚してください」

この言葉って、もっと別の場で、もっとムードがある設定で、言われると思っていた。

でも、泣けるのね。

不思議。

私も正座で答えた。

「よろしく願います」

その後は思い出せない、ことはないけど、言えない。

思わず頬を染めていると、マスターが皿を差し出した。

「お待たせしました、ニロギ。どうぞ」

「美味しそうねえ」

「今日はお連れ様は？」

噂をすればドアが開いた。

ニコニコ笑いながら、手には小さな宝石店の袋。

「はい、お待たせしました」

最敬礼をしながら袋を差し出す彼。

「ありがとうございます」

両手で受け取る私。

カウンターからマスター夫婦がびっくりした顔で言った。

「ひょっとして、それ、婚約指輪？」

「はい！」

威勢のいい彼の声に私の顔が真っ赤になる。

地下鉄の駅から歩いて五分。

小さなビルの三階にある店「夜の訪問者」は本日貸し切りです。



後悔するよ、しました、しましたとも！

足を引きずりながら地下鉄の駅を下りていく。

今日はとにかく疲れた。陸上記録会だった。

今年は優勝も夢じゃなかった。

僕はキャプテンとして引っ張ってきた。どちらかというど、自信過剰なほどに。

でも、僕は見事に転んだのだった。

しかも陸上記録会で。

あれほどバトンの練習をしてきたのに、このキャプテンの僕がバトンを落とした。

いつもいつもみんなの先頭を走って来たのに、今日だって僕たちのチームはライバル校を抜いていた。

余裕の表情で受け取って、アンカーのあいつに渡すだけだった。だが、スルツと抜け落ちた。

驚愕の表情。

あいつの顔。

一瞬客席から悲鳴が聞こえた。

慌てて拾って渡したが、結局四位。

そりゃあそうさ。

みんな僅差だったんだから。

表彰台もメダルも無し。

監督の顔も見られなかった。

部員に会わず顔がない。

泣き崩れたほうがよかったのか。

だが、涙も出なかった。

みんなに頭を下げては来たけれど、誰もいいよとは言わなかった。そうだろう。

僕はいつだって失敗した奴にいいよなんて言わなかった。

「なんで、こうなるんだよ！」

僕はそう言っただけで追い打ちを掛けたんだから。

その僕がバトンを落とした。気のいいあいつは最後まで全力で走って来た。

誰も僕の周りに来なかった。

僕は嫌味な奴さ。

副部長の原田は何か言いかけたけど、聞きたくなかった。監督の話は右から左へと抜けて行った。僕はどこまでも自信家のどうしようもない奴さ。

「努力してきたんだから、結果じゃない……」

そんな話、聞きたくなかった。

だが、いつだって練習も誰よりもしてきたのに。

脚力鍛えるのに、ずっと足首に負荷も掛けたり、いいと思えることは最大限やって来た。だから、他人の失敗も許さなかった。

鼻で笑っちゃうよな、そのキャプテンがこの様だ。

電車は今日に限って人身事故とやらでまた遅延。

いい加減にしてくれよ。

みんなが来てしまう。

帰りたい。

誰にも会いたくないんだ。

ホームには続々と競技を終えた高校生がやって来る。

今日だって遠くても自転車で行けばよかった。

なんで地下鉄にしたんだろう。

人に会いたくないと思っっているうちに、いつのまにか囲まれている自分。

このまま、ホームから落ちたら明日からみんなに会わずに済むんじゃないだろうか。

そんなバカげたことが脳裏をかすむ。

「おい、翔トウ」

振り返るまでもない。

アンカーの大輔だ。<sup>だいすけ</sup>

会いたくないのに。

下を向いていると、左肩に手を置かれた。

「暑いぜ」

払いのけはしなが、こう言った。

「おう、暑いな。氷食わないか？」

「もう帰るよ」

「奢ってやるから。俺様、今日は金持ってるんだ」

「珍しいな」

「ああ、だつて翔が今日はパーティーするって言ったじゃん」

「くそっ、どこまでもカツコ悪いよなあ」

「ああ、その通り。コロコロってな」

「そんな簡単に言うなよ」

「いいじゃん、もう済んだ事さ」

「それも傷つくんだよ」

「そう言うなつて。お前はいつもそう言ってきたよ」

「ホントに嫌な奴だよな自分つて、流石に後悔してるよ」

こうズケズケと言われると痛みも通り越して笑えてくる。

「探してたぞ」

「誰が」

「マリコが」

「へえ、どうして」

「化学部のマリコはお前が好きだつて話だろ」

「噂だけさ。今日の場面でふられたさ」

「そんなことないよ。悲鳴上げてたもん」

一瞬思い出した。あの悲鳴か。ちっ、きつとこのカツコ悪い男を憐みの表情で見ってくれるつてわけか。

遅れていた電車が入って来た。扉が閉じかけたとき、階段からスカートをひらひらさせてマリコが走って来た。思わず二人でカバンを出して閉じないようにする。

「ありがとう」

「なんだよ、マリコのスカートが跳ね上がったぞ」

「いいの！ 見せてるんだから」

「言ったなあ、この自信家」

ニコニコ笑いながら、マリコは二人を見る。

「今日はお祝いするはずだったんでしよう」

「くそつ、お前も性格悪いなあ」

マリコは不貞腐れている僕を無視しながらさらにこう言った。

「氷食べに行こう。暑いもん。これで最後の大会だもん」

「ああああ、どこまでも嫌なこと思い出させるなよ」

「翔も大輔もカッコよかったよ。すごく走りっぷりがよかったもん」

大輔はそうだろうと言いながらこう付けくわえた。

「とにかく、やりきったさ。これで部活は終了だけど、ものすごい思い出ができたな。大人になったら笑いながら酒を飲んで言うよ。お前のせいで負けたぞつて」

「すまん。ホントにすまん」

素直に謝れた。

新宿に着いた。

長いエスカレーターに乗る。

「マリコ、どうして追いかけてきたん？」

「別に」

改札口に着くと、スカートをまたひらひらさせて走りだした。

マリコは化学部なのに俊足だ。

「何が別にだよ」

マリコを追って二人が追う。

足、軽いなあ。

今なら記録出せたなあ。くっそー！

父さんにも若いころがあったのね

このところ、顔色がすぐれないという父。

毎日ため息をついているって母が言うから、久しぶりに会う約束をした。

家を出てからもう三年。

会社には家からも通うことはできたが、いつまでも親離れしないのでは、言いたいことも言えない気になっていた。

年齢は三十三歳だから、結婚もしようと言う相手もいた時期もある。

でも、結局はしていない。今は付き合っている人もいない。

じゃ、寂しいかと問われればそうかもしれないけど、飲み友だちもいるし、アスレに通うとそこでも話す人はいる。会社には気の合う同僚もいる。もちろん既婚者だけど、恋愛感情はない。今は任される仕事もできて、結構満足しているのだ。

「こんな時間まで女の子が飲んで」

「もう、お隣の家には孫までできたのに」

「会社にいい人いないの」

と、母にさんざん言われると鬱陶しくて。部屋代は痛いけど、一人はこの上もなく楽になった。

父は無口な人で、昔から小言は少々言われてもあまり口うるさく言う人ではない。成績が学級で上位からビリになったときも、流石に驚いたようだが『見失うな』とだけ言われた。

あときは好きな男の子に犯された時だった。

まだ、高校三年生で受験まっ盛りだった。毎日図書館でデートしていたが、彼の家族がみんな海外旅行に行った時に、図書館ではなく彼の部屋に。

性へのあこがれがなかったと言えば嘘になる。

キスぐらいするかなと思って部屋に入ると、いきなり倒された。



「好きなんだからいいじゃないか」

「僕のこと嫌いな」

「お願いだよ、高校生活も最後なんだよ。会えなくなるんだ」  
そんな調子のいいことをいろいろ言われてその気になった。

好きなら当たり前なのかと、しかもキスからではなくてそのまま下着に手を入れてきた。

キスもしないうちに脱がされて、恐怖で震えている私にいきなりズボンのジッパーを下ろして啜えさせた。何もかも思い出したくない事の始まりだった。

全てが終わった時に、走って家に帰った。

母はその日は同窓会でいなかった。父は一人で手酌で飲んでいて私の泣きはらした顔を見て、どうしたんだと言ったがその後は何も言わなかった。母にも言わなかった。

あの日以来、彼とは会いたくなくなつて、何度か電話もきたけど決して取らなかった。母は仲のよかったボーイフレンドと喧嘩したのねと分かったふりをした。父は一度電話を受け取った。

「君、うちへ掛ける勇気を持ち合わせているなら、私と会ってくれないか」

そう言った途端に、彼からは二度と掛かってこなくなった。

父は知っていたのだ。

私は幸い妊娠もしなかったが、あれ以来セックスにはトラウマができた。何も言わないけど、父の庇護のもと私は安穩と暮らしたのだ。本当に恋人ができたのはそれから十年も経っていた。でも、その人とも今は別れている。

どこかで、父の姿を追い求めているのかもしれない。  
優しく、穏やかな父。

その父がどうしたのだろうか。

待ち合わせの銀座は、今日も人が多い。

父は手持無沙汰のような雰囲気の本屋にいた。

「父さん」

「あ、香苗」

「何を読んでいたの」

「これか、つまらん本だよ」

「そう言いながら見せてくれたのは、俳句の本だった。」

「ふーん」

「さあ、何か食べたいものはあるか？」

「うーんとね、握り寿司」

「そうか」

「そう言いながら父はさっさと歩きだす。手を組んだりすることはしたことがない人。」

「でも、私の足といつの間にか合わせてくれる。」

「母さんが心配してたよ」

「何を」

「父さんがため息ばかりついてるって」

「そんなこと言ってたか」

「うん」

二人でビルの二階へあがって行くとおしゃれな寿司店だった。

大好きなマグロから頼んで、ビールを注文する。

「言っておきたいことがあるんだ」

「えっ？」

「お前には兄がいるんだ」

「えっ？ 何それ」

「昔付き合っていた人に子どもがいてね。私の子だ。その後、彼女に子どもができていたのを知ったのは母さんと結婚してからだ」

「青天の霹靂とはこのことだ。」

私にとって一番の憧れの父が、あの高校時代の彼氏のような人だったのか。

「そう考えると無性に腹が立った。」

「なんで、今まで黙っていたの」

「言う必要もないかと思つてな」

「母さんは知ってるの？」

「ああ、三十年前に聞いた時すぐ伝えたよ」

「母さんはその時どうした？」

「泣いて泣いて随分と辛い思いをさせた」

「そんなこと、知りたくなかった」

ああ、なんてことなの。

今日母が来ないことも父のため息もやつと分かった。

あの陽気な母にそんなことがあつたなんて。

「父さん、その人とはどうして別れたの」

「大学時代は家を出て、一人きりだから好きなこととしていたよ。彼女も同じクラスで田舎から出て一人暮らし。すぐに意気投合して同棲始めたんだ」

父の若い頃の話はホントに今の父からは想像できなかつた。

彼女とクラブのみんなと映画を作ったり脚本を書いたりしていた。アングラの世界に憧れて、自分もその仲間入りをすると思つていた。

だが、四回生になると彼女は家からの見合い話を伝えてきた。父はまだまだアングラ映画を作りたくて結婚なんて考えもしなかつた。冷たく好きなようにしたらと言つたら、彼女はそれっきりだったという。

本当に悪いことをしたと語る父。

だが、あれほど燃えた映画も、卒業間際になかなか金になる仕事ではないと分かると、みんな去つて行つた。父も結局事務機の会社に入った。それっきり彼女とは会うこともなかつた。

だが、やがて、ばつたりと彼女と出会つた。彼女は小さな男の子を連れていた。ひと目で分かるほど自分に似ていると思つたそうだ。彼女は一人で子育てしていた。

東京で暮らしていることもその時に分かった。

小さな喫茶店を開いていることも知った。

男の子は逸郎と言った。

父の名は一郎。

彼女の思いが伝わるようだった。

「一人で育ててるから彼女は何も要らないと言ったけど、母さんとお前にはこのことを伝えておきたくてな」

「なんで今頃？」

「彼女が病氣と聞いたんだ。私の預金は家を買ったし退職金しか残らない。母さんが半分、お前と逸郎で残りを半分ずつとなる」

「ふーん」

「彼女の店はまだ借金もある。その借金を払ってやりたいんだ。認知もしていないが、あの子にそれぐらいはしてやりたい」

父のため息はこれなのか。

もちろん、面白いはずはない。

だが、分かる気もする。

若気の至りとはよく言ったものだ。

母だつて納得してるのかよく分からない。

でも、父はきつと思ひ通りにする。

母も泣きながらも父の言うとおりにするだろう。

両親はそう言う人だ。

「父さん、このお寿司は高いわよ」

「ああ、何人前でも食べてくれ。母さんにも買って帰る」

「そうね、極上のトロをね」

「ああ」

「それで、その半分とやらで借金は消えるの？」

「消えなくてもそれしかない」

「うん、そうね。母さんとの生活があるしね」

「ああ。こんな話を聞かせてすまん」  
父さん、カッコ悪いけど嫌いじゃないわ。

一郎と逸郎か。  
会いたくないような会いたいような  
兄貴か。

多分、私は会わないと思うけど、母が時々見せた複雑な表情。  
やっとわかった気がする。

銀座の駅で父と別れて母に電話する。

「母さん、聞いたわよ」

「そう」

「長い間えらかったわね」  
言葉がつまって母の嗚咽が聞こえる。

男と女、父と母。

「今度帰るわ」

「そう言っと、母は」

「いいお話が来てるわよ」  
と言った。懲りない人ね。

## お守りは誰のために

「おい、待ってくれ」

高齢の男性が階段を下りながら走って来る。

その声で、僕は思わず電車のドアが閉まらないように片足を出した。

「すみません」

ゼーゼー言いながらやっと乗ると、優先席は若者やサラリーマンで座席がない。

朝のラッシュユなんだから、老人だと言われてもそう簡単に身動きとれないのだ。

入口近くで老人と向かい合うことになった僕。

「大丈夫ですか」

「ああ、どうも。孫が小学校が終わる時間に帰っていてと言っもんですから」

「あ、子守りですか」

「ええ、学童保育はイヤだってダダこねて」

「それでも早くないですか」

「はあ、ばあさんの病院にも寄っていくから」

「それは大変ですね」

「まあ、行くところがあつて暇ではないからいいんです。あなたは？」

「はあ、学生です。これから就職活動に」

「そうですか。ご苦労さんです。いいところが見つかるといいですね」

「ええ、どこでもいいから僕を見つけてほしいですよ」

「はいはい大丈夫ですよ」

そう簡単に言われてもなあと思いつながら、妙に安心している自分がある。

赤羽でどつと人が下りる。

やっと空いた優先席に男性を座らせる。

隣も空いてるので、男性はどうぞと僕に声を掛ける。

黒のリクルートスーツを着ている僕と、少しくたびれたジャンパーを着て、作業用ズボンの男性。

「今日はどこまで行くのですか」

「ええ、羽田まで」

「おや、飛行機ですか」

「はい、大阪へ。本社がそこなので」

「どういうところへ勤めたいんですか」

「そう簡単に潰れないところですね」

「ハハハ、そりゃそうだ」

楽しそうに笑うこの男性は、実に会話がうまくて、きつと人望のある人なんだろうなと感じた。

僕はどちらかと言うと、面接では上がりまくっていつも失敗する。こんな面接官ならきつと合格しそうな気がする。

もう三十八社落ちた。

だから、自尊心は潰れっぱなし。

今日の会社も建設関係。

僕にマンションや住宅が売れる気もしない。だが、もう手あたりしだい受けるしかない。クラスで受かってない十二人。いつまでもその中にいたくはない。

付き合っている江守さやかは銀行に受かった。

何だか差をつけられた気がして、あの日以来会えない。

忙しいのも事実だが、ホントは悔しいのだ。

僕の気持ちの小ささに自分もうんざりしている。

分かってはいるけど、会わず顔がない。

大阪へ行くと言ったら、昨日お守りを届けてくれた。

中に入らなかつた。

僕も入れと言わなかつた。

アパートの入口でお守りを受け取ると、キスもしないで帰った。時間があればいつでも抱き、あれほど濃密な時間を過ごしてきたのに、この就職活動に入ってからには全く僕らはセックスレスになっていた。

いつも、頭のどこかで就職や親の顔のことがちらついて、そんな気になれない。

カバンに入れたお守りをもう一度確かめようと出してみた。

「おや、お守りですか」

「ええ」

「私も持ってますよ。ホラ」

男性は三つのお守りをポケットに入れていた。

「ばあさんが買ってきたんです」

「三つも？」

「ええ、その帰りに交通事故に遭いまして。足を骨折して入院ですわ」

「それはお気の毒に」

「一つは私。後の二つは娘と息子。でも二人とももういません」

「えっ？」

「娘は難産でたらい回しになった拳句に死にました。息子は過労で三年前に。それ以来、何だか妻は現実と夢がごちゃごちゃになってしまつて。ほら、このお守りも学童用ですよ。でも、ときどきは普通の会話もできるんです」

あまりのことに返す言葉が見つからない。

愛する子どもたちを失ったことに感情の糸がどこかでプツツと切れてしまったのか。

男性は下りる前にこう言った。

「就職も大事ですが、命はもっと大事。大切な人を守ってあげてください。お守りをくれた人の方が守ってほしいかもしれませんよ。妻もそうですから。私は仕事ばかりで放って来ました。今はそれを悔いでいます」



男性の言葉はずしんと僕の胸に落ちた。

羽田に着くと、ケータイにメールが入ってる。

「大阪から帰ったらすぐに電話してね」

いつも返信は了解とか、わかったとかの一言だった。

僕はケータイから電話した。

「さやか、今からでも会いたいよ。今日日帰りするわ。ありがとな」

「うん、待ってる」

嬉しそうなさやかの声。

僕は久しぶりに思った。

さやかを心の底から愛していると。

お守りをカバンから胸ポケットに移し替えた。

今日はいいい日？ それとも (以前ブルースカイとして投稿) (前書き)

短編としてブルースカイというタイトルで書いたものですが、地下鉄エトセトラにふさわしいのでこちらに移しました。

以前読んだ方、ごめんなさい。

今日はいいい日？ それとも (以前ブルースカイとして投稿)

今日の朝ごはんは卵トースト、ポテトサラダにキャベツの千切り、イチゴにトマト、そしてコーヒー、ヨーグルト。

これだけ食べると、朝から満腹。

でも、しっかり食べておかないと昼まで持たない。

私は小学校に勤めてる三十九歳。松井彩子。学校では六年担任。家族は四十二歳の会社員の夫、十三歳の娘、十歳の息子の四人暮らし。四月から大規模校に異動した。電車で揺られて通うこと一時間遠すぎるって話。でも、朝は始点だから座席は確保できるので文句は言えない。

今日も六時五十五分の電車に乗って、いつものように、学校まで行くはずだった。ところが、私の目の前に立っている男性がこともあるうに、私の膝に吐いたのだ。

「わーっ、どうしてー」

と、思わず声を出してしまった。満員で動けないから、席を立つこともままならない。しかも汚物が私のズボンにべとーっと、この匂いもたまらない。男性はひたすら謝るが、許すも何もどうするの、この服では学校に行けない。帰るしかない。彼は同じくらいの年齢で、二日酔いなのか。全くもう……。

「とにかく、次の駅で降ります」

そして、この男性も一緒に降りてきた。

「あなたねー、ひどいわよ。仕事に行けないじゃないの」

「申し訳ない、クリーニング代をお支払いします。僕はこういうものなんです。オエッ」

「えーっ、あなた大丈夫？」

駅員が困るよーと言いながらやって来た。ホームに広がる汚物。

「私もこうなんです。連れではありません」

そう言うと、トイレに行ってザブザブ洗うしかなかった。これで

は体も匂ってる。タオルのハンカチくらいでは足りない。下はパンツ一枚で洗う自分の姿は惨めで、トイレに来る人はみな驚いていた。

その濡れたズボンを穿いてまた帰らないといけないのだ。ラッシュの電車の中を。無理だ、そんなこと。男性はベンチで座っていた。帰って来た私を見ると、立ち上がったが、座るように指差した。また、吐かれたらたまらない。

「この格好では電車にも乗れません。タクシーで帰ります。請求させてください」

「今、取りあえずここに三万円あります。これをお願いします」

「預かります。そして、名刺が何かありますか。残金をお返ししますから」

「いや、いいです。でも、私はこういうものです」

差し出したのは、社員証。名刺は持っていないかったのだ。見ると、東京のA出版社の記者で井村信二という名前だった。

「私は松井彩子、小学校の教員です。今日は午前中、年休をとりました」

「本当にすみません」

「いいです、仕方ありません。でも、そんなに飲んでは体に毒です」

「ああ、こんなこと、初めてです」

「電話番号、控えさせてください。連絡しますから」

「いや、こつちが全面的に悪いのでどうぞ、とっておいてください。持ち合わせの金はほら、それで全部です」

「きつともらいすぎです。私も貴方から儲けたくはありません」

「分かりました。でも、頭が痛いので、この番号を書いてください。差し出したケータイを開いて見せる番号を書き留めた。彼はぐっ

たりとしていた。

「貴方は仕事に行かなくていいんですか」

「いや、行かないと。でも、今は電車はまだ無理です」

「では、これで失礼します」

「ごめんなさい、本当にすみませんでした」

彼がどういふ人かは分かったので、許していた。彼の財布にはもう小銭しか残っていなかった。だが、私もタクシーで帰らないといけないのだ。ここからタクシーでいくらかかるのか考えたこともなかった。代金は一万四千円だった。もう二度と乗らないと決めた。

ズボンもクリーニング店に持って行った。六百円。全部で一万四千六百円。お釣りを渡さないと、封筒に入れた。とても疲れて気分はブルーだった。六年の子たちは私が午前中休むので、きつと大喜びだろう。目に見えるようだ。急に年休と言つと、学校は困るだろうなあ。音楽の澤田先生が入ってくれて、後は児童支援の仲村先生が見てくれるらしい。もう、十一時だった。仕方なしに昼食を取り、また、行く用意をする。

「今日についてはないなあ」

気分を変えてスカートにして家を出る。久しぶりに足を出すと肌寒い。何だか、心が軽くなった。あの降りた駅を通過するとき、ベンチに彼が座っているのが見えた。

「えっ、まだ具合悪いの」

つい降りてしまった。

「井村さん」

「ああ、先生。着替えてきたんですね。すみません」

「もう謝らないでください。よかったわ、これお釣りです」

「いやあ、わざわざすみません」

「まだ、電車に乗れそうもないの」

「いや、そうじゃなくて、インタビュの相手もちょうどキャンセルだつていうから、もう仕事は今日はないんです」

「それはよかったわ。てつきり動けないんだと思って」

「じゃ、僕も一緒に行きます。東京に帰るから」

二人は次の電車に乗った。だいぶ良くなった彼は話を聞くことが上手で、つつい楽しくおしゃべりしてしまった。

「私、次で降ります」

「あつ、今日のお詫びに今度食事をおごらせてください」

「いや、そんなことはいいです」

「あの、ではその気になつたら電話してください。僕はいつでもいいですから」

「はあ、お気持ちだけいただいております」

降りた時に私は電車に乗つてゐる彼に、手を振つていた。この気持ちの変化が驚きだった。そして、華やいだ自分を恥ずかしく思った。夫以外の男性に誘われて喜んでゐる自分がある。もちろん、お詫びなのだと言ひ聞かせても心のどこかで嬉しく思う自分があるのだ。

バカみたいとつぶやきながら学校へ急いだ。クラスの子は

「わー、先生、もう来たの？ 休んでもよかつたのに」

「ありがとう、そういう気にはなりません」

子供たちは笑いながら迎えてくれた。この日は一日中楽しくて、子供たちとも十分コミュニケーションが取れた。朝からの事務処理も終えて、家庭学習の点検も済ませ、帰る時間は六時になった。もう、下の子が帰ってくる頃だった。夕食の準備はしていたから、後は温めたらいいだけ。

帰りの電車で、思わず見回す私、何だか、井村信二がいないかと思ひ探している。そんなこと、おかしいわねと思ひながら、今日一日のことを思い出していた。

駅の改札口で、笑う夫と娘がいた。

「あら偶然ね、ただいまー」

家族が一番。

綺麗でしょ？

夫が出ていってからもう五年。

彼の元には女がいるという。私はまだ離婚もすんでいないというのに同棲ですって。

私が何をしたっていつの。

あなたのために尽くし、あなたのために綺麗にしてきたのに。

少しのお金がかかっても仕方ないことよ。実家の父が残した遺産はすべて使った。

「僕の好きな瞳」

そう言っただじゃやない。

「ぶつくりした可愛い唇」

そうよ、若い時はぶつくりした唇もいつまでもそのままではいられない。だから、手術をしたのよ。

若さは顎や首に出るでしょ。二重顎も取り除いたわ。

胸も大きくしたのよ。バスト九十五センチ。ウエスト五十八センチ、ヒップは九十六センチ。

この年齢でこのスタイルは見事としか言いようがないはずよ。

子どもを作るとスタイルが悪くなるから、産もうとは思わなかった。

あなたのそばにいる彼女を見てごらんなさい。

子どもがいることを見せびらかすようなマタニティ姿。

大きなお腹をして、足は外に開いている歩き方。みっともないじゃないの。

私なんて十三センチのヒールも履けるのよ。

なんでそんな女がいいの。

ニットのワンピースで体ぴったりラインを見せつける。

今だって満員電車に乗れば、痴漢が私の魅力に負けてついて来る

のよ。それなのに、私と離婚？

冗談じゃないわ。

今日はホテルで同窓会よ。

張り切っておしゃれをしてきたわ。

ブランドのぴったりしたスーツ。

ピンヒールを履いて、髪はアップに結い上げた。項が綺麗ってあなたも言ってたでしょ。

同窓会の受付。

みんな驚きの声。

「どうしたの」

「何が？」

「顔、整形したの？」

「うん」

女性たちの嫉妬の眼が私には快感なの。

男たちは「ほう」と声をあげる。

男の方が素直だわ。

一人の男性が近づいてきた。

「久しぶりだね」

その声は精神科医になった橋本君。

「何か抱えてることあるの？」

「別に」

私を椅子に座らせる。

「随分と整形したんだね」

「綺麗でしょ」

「ああ、でももう十分だよ。君は君のままでもいいんだから」

「どづいこと？」

「これで何回したの？」

「そんなこと聞くのね。もう二十八回」

ふと言ってしまった。整形をした数。



彼は首元の傷を見つけて、手で触った。

「この傷はどうしてなんだい」

「ええ、段々傷が引きつるようになって」

「ご主人はどうしてるの」

「今、愛人と暮らしてるわ」

自棄になってそう言う。

「僕のところへ少し通わないか」

「どこも悪くないわ」

「分かってる。もう顔にメスを入れないようにしたいんだよ、僕は」

「この体を維持したいの」

「もう十分綺麗だよ」

彼が私をサポートして同窓会の会場を連れ出した。

同窓会の会場では大騒ぎだった。

「どうしちゃったの、あの顔」

「もう整形美人なんてものではないわね。皮膚がろうのようになって」

「

怖かったわ」

「体はバービー人形みたいだし」

「あれほど綺麗な人だったのに」

「私たちもう六十ですものね」

「橋本君がいてよかったわね」

「ええ、彼にカウンセリングしてもらってもうしなくなるといいけ

ど」

橋本クリニックの診察室。

「顔にメスを入れていくと、生まれ変わる気持ちになるの」

「そうか、結婚はいつだったっけ」

「もう三十五年前」

「彼が出て行ったのは？」

「五年前。もう許してくれって」

「何を許してって？」

「二十年前の秋に彼が浮気して、その相手の目が二重だったから私もしたの」

橋本君の目が優しく光る。

「彼の浮気はそれ一回だったけど、それ以来秋にはどこか美しくしたいと思うようになって」

「彼が出て行ったのはまた浮気なの？」

「いいえ、いつも変わっていく私を見るたびに責められ続けているようだった。それで、去年、離婚してほしいって。きっと彼女ができたからなのね」

「そうか、相手の人のこと知ってるのかい」

「ええ、定年退職して近くの警備会社にバイトで行って、四十歳のビルの清掃員さんと仲良くなったみたい」

とりとめのない話をするうちに思い出してきた。磨き上げた女の魅力よりも、トイレを磨く女を選んだことが自分を全否定されたと思った時のことを。

それ以来、整形に拍車がかかったっけ。

橋本君は月に一回おいでと言った。

次回の予約も入れた。

どこも悪くないのに、ふとクリニックのガラスに知らない女の顔が映った。

私と同じ服を着てるのね。

いやだわ。

帰りの地下鉄、後ろに立つ男がやたらと下半身をつけてくる。

困ったものね。

いい女だから仕方ないかとそのままにさせておくと駅に着いた。

どんな男かと振り返って見ると、男はぎょっとした顔で「おばけ」と呟いた。

## コンパクト

最近は平らな所でも転ぶことがある。

タンスの角に足の小指をぶつけて、一人で腹を立てたことも一度や二度ではない。

そんな私の姿を息子たちは呆れて眺めている。

私は四十五歳。息子は十八歳と十六歳。そして義母が七十三歳。私の母ではない。なぜか家を出て行った夫の母なのだ。

友だちはよく一緒に住めるわねえって言うけど、夫が出て行ったからあなたも出ていけとは言えない。

まして、この母がいないと生活が成り立たない。

夫が家を出たのは二年前。

「奥さん、ご主人は具合が悪いんですか？」

あの日、夫は出張だと言って荷物を持って出て行った。

出張などないし、会社にも来ていないというのだ。しかも、会社の金を横領したということであった。青天の霹靂とはこういうことか。

義母と私は近くの警察に足を運び、主人のことを訴えた。だが、警察の反応はにぶく、こういう話はよくあることだと言われた。荷物を持って出たのなら、自殺の線は考えられないということだった。思い当たることはないかと言われ、義母と二人で主人の書斎の机を探した。すると、離婚届と請求書が出てきた。嫌な予感がして家庭用金庫を開けると、コツコツためてきた義母の貯金は解約され、私の貯金通帳もなかった。銀行に走ったがすでに残高はなく四百万という借金が残された。

哀しみより怒りがこみ上げてきた。

債務が私に掛からないようにって離婚届なのか。でも、ちっともありがたくなかない。

落胆した二人にのしかかって来たのは息子たちの学費だった。義

母の年金と、私の働きで生活自体はどうかできたが、息子たちの進学費用はなくなっていた。中学生の次男は友だちに就学援助になったというのを知られたくないと言ったが、私たちに残された借金を教えるとそのまま黙った。ただ、部屋のドアには大きな蹴りの跡が残された。兄の方は仕方ないかと諦めて、大学は公立を受けるように頑張るとのことだった。大学に行く費用はないとは言えなかった。義母と二人でとにかく高校であらゆる方法を教えてもらおうと話した。義母はタンス預金だと言って三十万を渡してくれた。

「いいのよ、義母さん。貯金ももうないから心細いでしょ。いる時は貸してもらおうから」

「私は葬式代と思ってたためていたんだから、まだ当分死なないわよ」二人でそう言いながら泣けてきた。二人とも息子に、夫に騙されていたのだから。

私の仕事は化粧品会社の営業だった。主人のことは何も言わずにおこうと思ったが、保険の解約や子どもの扶養手当の申請などであつという間にはれてしまった。

それからますます仕事に精を出すことにしたが、気持ちほどは成果は上がらず、部長にこう言われた。

「うちは化粧品会社なんだから、もう少し服装や化粧品に手を入れてくれないと売れないよ」

美容院に行くことも靴を買うことも無くなっていた。

そんなある日のことだった。

生活に疲れた、そんな女の尻を触る手があった。

どこのどいつだ！

そう思ったが、その日の私は違っていた。

くさくさして面白くない毎日。

女としても枯れ果てていた。

まだ四〇代なのに。

どうして。

男は体を避けようとしないう女に少し躊躇していた。指が止まった。

私はさつとその手を掴むと、次の駅で降りた。

男は抵抗していたが、強引に引くと素直に下りてきた。

男は四〇代のサラリーマンと見えた。

それほど安そうでもないものを身につけている。

うなだれた男は、目を合わそうとしない。

「警察に言うつもりはないわ」

そう言つと、びっくりしながらも少しホッとした目になったのを

私は見逃さなかった。

「でも、ちよつと付き合つて」

「どこへ……」

男は震える声で言った。

「ホテル」

私は大胆になっていた。男は美人局だと思つているのか、足がす

くんでいるようだ。

「来ないなら警察に行く」

どういつ女なの。ひどい淫らな自分におののきながらも、妙に自信がわいてきた。

男と二時間一緒だった。

「お金ちょうだい。もう二度とこんなことしないわよ」

「いくらだ、俺だつてそんなに持つてない」

「財布を見せて」

「売春婦だったのか」

そう、それでいい。私は答えなかった。

もう疲れていた。

財布には一万二千円しかなかった。

一万抜き取ると男は舌打ちした。

「こんなことなら若い子を触ればよかったな」  
思わずホテルのスリッパを男に投げつけた。

義母は嫌いじゃないけど気を遣う。息子たちは可愛いけど今は疲れている。

人肌が恋しい。

それしかなかった。

夫はどこに行ったんだろうか。

地下鉄のホームに佇みながら、汚れた体を自分の手で温める。

電車の窓に映る顔。

さっきのお金を握りしめ、明日コンパクトを買うと決めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7619t/>

---

地下鉄エトセトラ

2011年9月30日03時23分発行